
ピカチュウの学園生活

ホープ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピカチュウの学園生活

【Nコード】

N4737S

【作者名】

ホープ

【あらすじ】

この物語は、とにかく全てが平凡な主人公ピカチュウと、個性豊かな仲間達が繰り広げるとたばた学園物ストーリーである！

入学式！（前書き）

この話を初めて読む方、新しいタブかウィンドウを出し、ピカチュウ達の舞台裏と合わせてご覧ください。

そちらの方では、キャラ紹介や後日談であるTIPSなどが掲載されています。本編の説明書的なものだと思ってもらえると嬉しいですよ。

入学式！

小鳥のさえずりが聞こえる緩やかな朝。その優雅な時間にけたたましくなる1つの目覚まし時計。そしてそれを止めるたポケモンは、もはや定番ともいえるセリフを呟く。

「ふあゝあ。良く寝たゝ」

目覚まし時計の音で目を覚ます一匹のポケモン。全体的に黄色っぽく、背中にはシマシマの模様が入っていて特徴的な紅い電気袋とギザギザの尻尾を持つポケモン——ピカチュウである。

いつもより30分ほど早い6時30分にセットした目覚まし時計でも、難なく起きられた自分に感心するピカチュウ。

「ピカチュウゝ！ もうとつくに8時半を過ぎてるわよゝ！」

「へっ？ だつてまだ6時半なはず……」

そう言われて時計を見てみると確かに8時を回っている。さっき鳴ったのは念のためにセットしておいた2つ目の覚まし時計だった。

「げっ！ もう8時半！ 初日早々遅刻になる！」

そう、このピカチュウは今日から中学校に入学するのである。

ピカチュウは、テキパキと必要なものをバックに詰め込んで家を飛び出す。

「朝ごはんはどうするの〜!？」

後ろでピカチュウの母が叫んでいるが、そんなのも耳に入らず全力で学校に向かった。

——最初から遅刻とか本当に勘弁してくれ!——

しばらく走っていると、見慣れた影が見えてきた。全体的に青紫で、首に紅い真珠のようなものがついているポケモン——。ピカチュウの親友、ムウマである。

「ムウマ? 何だ、お前も寝坊か」

「うつさいわね。私はあんたとは違います」

ピカチュウに嫌味を言い返してくるムウマ。どうやら性格が悪いようだ。それをピカチュウは「はいはい」と言って軽く受け流している。

「それよりはやく行こうぜ。本当に遅刻するぞ」

「あんたに言われなくても分かってるわよ」

二人は急いで学校に向かった……。

「ふう〜。なんとか間に合ったな」

時計を見ながら言うピカチュウ。残り1分もないところで学校

に辿り着いた。既にたくさんのポケモン達が集まっていて、自分達がギリギリだったということ嫌というほどを思い知らされた。

「本当にギリギリね……。それよりもこの学校綺麗ね」

辺りを見回すと、確かに校舎はピカピカだし、校門に飾られている『入学式』と書かれた看板もまだ真新しい。

「じゃあ私は調べたいことがあるから向こうに行くわ」

そう言い残し、ムウマは向こうのポケモン達の中に消えていった。

1人になってしまったピカチュウ。仕方なくクラス表を取りに行くことにした。

「あつ！ おーい！ ピカチュウくん！」

クラス表を取りに行く途中、遠くからピカチュウを呼ぶ声が聞こえる。声の主は橙色を主調とした、2本の尻尾と首についている浮き袋が特徴的なポケモン――。ブイゼルだ。

「ブイゼルか。おはよう」

「うん。おはようピカチュウ君。あとクラス表貰ってきたよ」

ブイゼルはクラス表を差し出す。ちゃっかりもう1枚あるのはムウマの分だろう。

「おつ、サンキュー。さーて、俺は何組かなあ？」

クラス表とにらめっこを始めたピカチュウ。なかなか見つからないようだ。

一方ブイゼルはもう見つけたようで、ピカチュウが見つけるのを待っている。その表情はこころなしか嬉しそうだ。

「やっと見つけた！ 俺は1組か。ブイゼルはどう？」

「僕も一緒のクラスだよ。後ムウマちゃんもね」

「じゃあ3人一緒か！ それじゃあ他に知り合いはいるかな？」

もう一度クラス表に目を落とすピカチュウ。しかし、すぐに視線を前に戻した。どうやら見つからなかったようだ。

「ダメだ……。知り合いが誰もいん」ばあ！」

急にブイゼルの前にムウマが現れた！ ブイゼルは驚いた様子で後ずさりしている。

「なんだムウマちゃんか。驚かせないでよ」

呆れたように言うブイゼル。このようなことはいつものことらしい。

「それより聞いて！ この学校は今年が初めての入学式だそうよ」

ピカチュウはそれを聞いて唖然としているが、ブイゼルは首を縦に振っている。なんとなく察しがついていたようだ。

「やっぱりね、通りで知り合いが誰もいないわけだ。多分、皆は向こうの中学校に行ったんじゃないかな？」

ブイゼルが言う、向こうの中学校とは『ポケモン第1中学校』のことである。ちなみに、ここは『ポケモン第2中学校』だ。向こうが古いのに対し、こちらは新しい。生徒数の増加がこの学校創立の理由だそうだ。

「ムウマ。一つ聞くぞ。先輩もいないのか？」

ムウマは首を横に振る。どうやら先輩達はいるようだ。

「残念ねピカチュウ。この学区内のポケモンは強制的にここに入学するみたい。つまり、向こうの中学校に通っていたポケモン達の一部もこっちに来るみたいよ」

3人で話していると構内アナウンスが流れてきた。

「それでは皆さんは教室に入ってください」

「だって。それじゃあ僕達も行こうか」

こうして3人は校舎の中に入って行った。

「うわゝ。知らないポケモンだらけだな」

ピカチュウの言葉に2人も同意する。本当に知らないポケモンだらけだった。

「それじゃあ自分達の席に座りましょ」

そう言つとムウマは自分の席の方に向かう。

「俺達も行こう。というか、俺達の席ってどこだ？」

ピカチュウがうるキョロしながら探していると、ブイゼルがすぐ見つけてくれた。

「なんだ、俺の後ろがブイゼルか。というかこのクラス人数が少ないな」

ざらつと教室を見渡しても、机が20個ぐらいしか見当たらない。以外にも小規模なクラスのようなのだ。

「そうだね。他のクラスもこんな感じかな？」

ピカチュウとブイゼルが話していると、大きくて白いふわふわした羽を持ち、体は全体的に青色のポケモンポケモン——チルタリスが話しかけてきた。

「あの……、もしかしてこの前商店街で大食い大会に参加してませんでしたか？」

「あゝ。あれね。多分出てたよ。もしかしてあのチルタリス？」

「やっぱり！ 私があの中の時のチルタリスです！ 突然ですけど、今度良かったらどこかに食べ歩きに行きませんか？」

ここで説明する必要があるだろう。実はこのピカチュウはかなりの大食いである。それで、たまたま街の大食い大会に出場したときに知り合ったのがこのチルタリスだ。彼もかなりの大食いで、前回の戦いではピカチュウと善戦するも、惜しくも負けてしまったのである。

「ねえ、ピカチュウ君。このポケモン誰？」

ブイゼルが訊ねてくる。ブイゼルはチルタリスのことを知らないから当たり前反応であろう。

「あ、そっか。ブイゼルは知らないのか。じゃあ紹介するよ。彼はチルタリス。この前の大食い大会で戦ったんだけど、結構強くてね。なんとか勝てただけど、こんなところで再会するとは夢にも思わなかったよ」

「ピカチュウ君と互角なの！？ そりゃすごいね！」

ブイゼルが大仰に驚く。それも当然だ。なぜならピカチュウは大食いに関しては小学校の頃からずっと無敗で、並ぶ者さえいなかったからだ。

「チルタリス、こっちも紹介する。彼はブイゼルでいって、俺の昔からの親友だ。ちなみに趣味は家庭菜園なんだぞ」

「そうなんですか。それじゃこれからよろしくお願いしますブイゼルさん。今度収穫した木の実でも見せてくださいね」

ブイゼルは苦笑いしながら「今度ね……」と言っていたが、内心は全部食べられそうだから見せたくないのであろう。

「おーい。みんな席につけ。出席を取るぞ」

そう言って現れたのは、黄色を主調として尻尾とおでこに赤い宝石がついており、首と尻尾と耳には黒色のシマシマがあるポケモン――デンリユウである。

「18、19、20と！ よし全員いるな。それじゃあ入学式が始まるまで適当に過ごしとけ」

ちなみに、このクラスの生徒数は25である。

まあ、適当に数を数えたデンリユウは教室から出て行った。

「今の先生が担任かな？ かなり適当だったけど」

ブイゼルが話題を変える。木の実はあんまり触れられたくないようだ。

「まあ、面白そうな先生だしいいんじゃないかな？」

そんなこんなでピカチュウ達は、入学式が始まるまで3人で雑談をしていた。

ガラッ……。

教室の扉が開いて、デンリユウが出てきた。

「よし。体育館が空いたから行くぞ。適当に並んで体育館まで来いよ」

「『ええっ！？』」

教室全体から驚きの声が出る。当たり前だろう。こんなに不真面目な先生はそうそういない。

「……。それでは皆様。1列にお並びの上、体育館まで参りましょう」

全体的に桃色のポケモンが皆に指示を出す。慣れている様子だが、口調が口調なため、色々とおかしく感じてしまう。

「それでは入学式を始めます。とはいってもこの学校は面倒なことをしない方針ですので、最低限のことだけを行います。まず校長先生のお話です」

舞台に大きな鳥ポケモンが上がってくる。どうやらこのポケモンが校長のようだ。

「皆さんこんにちは。私は校長のルギアです。これから楽しい学校生活を送って行きましょう。先程の入学式では、校長の話は長いと言われたのでこれで終わりとなります」

あっけなく終わった校長先生の話の後には何もなく、それだけで入学式が終了となった。

教室に戻ったピカチュウ達。先生が来ないのでブイゼル達と話している。

「この学校、大丈夫かな……」

少し不安になるピカチュウ。デンリユウに引き続き、校長のルギアもあんな感じだったのだから、心配するのも分かる。

「なんとかなるよピカチュウ君！ 前向きに行こう！」

「そうですよ、落ち込んでも得することなんてありませんから！」

「ばあ！」

ムウマがまたブイゼルの前に現れる。ブイゼルは尻もちをついてしまった。

「今日は2回目だよ……。本当にびっくりするんだよ！ ムウマちゃん！」

「あはは、ごめんね。それよりこちらの白いふわふわしたポケモンは誰かしら？」

「ああ、彼はチルタリス。この前の大食い大会で出会ったんだ。実力は俺と同じくらいで、結構びっくりしたんだ」

ムウマもブイゼルと同じように驚く。

「へえ、あのピカチュウと互角ねえ。それってすごいわね」

話していると途中、先程のデンリユウがやってきた。

「よし！ 皆もう帰っていいぞ。明日は9時までに学校に来ればいいからな。それじゃあ解散！」

それだけを言い残してデンリユウは教室から出て行った。

「適当だね」

「適当だな」

ブイゼルとピカチュウのシュールな掛け合いに、クラス中が笑いだす。

「……それでは、デンリユウ先生が解散指示を出しましたので今回はこれにて下校としましょう」

その笑いの中、先程のポケモンが周りに指示を出し解散となった。

この学校、大丈夫なのか？ と心配したポケモンは数知れず。

入学式！（後書き）

地道に編集中だということを、『ここにだけ』明記しておきます。

読み返してくれる方や、新規の方でも分かりやすい小説を心がけようと思います！

ポケモン学園の生徒達　くキャラ紹介とか言わないようにーく

——入学式の次の日。

ピカチュウ達は、別の意味での不安を持ちながら学校に登校した。

「えー。これから学級委員を決めたいと思う」

ピカチュウ達の担任のデンリユウがそう言うと、全体的に赤と白の、ドラゴンタイプのようなポケモンが質問をした。

「ちょっと待ってください！　あの、自己紹介とかはないんでしょうか？」

「自己紹介は面倒なんだけどな。やりたいならやるけど？　やる？」

デンリユウの返答があまりにも投げやりだったので、みんな笑いだした。

「当たり前です！　それじゃあ私からやらせてもらいますね。私の名前はラティアスです。趣味は読書で、文芸部に入ろうと思っています。次やりたい人はいますか？」

そのポケモン、——ラティアスは、さっさと自己紹介を終わらせてしまった。そして、ラティアスはきよきよと周りを見渡すが、手を挙げるポケモンがない。そんな中手を挙げたポケモンが一人——ブイゼルだった。

「じゃあ、僕がやります。僕はブイゼルです。趣味は家庭菜園です。他にやりたい人はいますか？」

ブイゼルの意外な趣味に教室全体がざわつく。

「ちよつと質問いいですか？」 ブイゼル君って可愛いってよく言われますか？」

その質問を聞いた途端、ブイゼルの耳が少し反応する。実はこのブイゼル、可愛いと言われるのがコンプレックスだったりする。

「よく言われますけど、あんまりそう言われるのは好きじゃないです。じゃあ、次はあなたでいいですか？」

ブイゼルが突き放したような言い方をする。これでも結構堪えている方だ。いつもならキレているだろう。

ブイゼルに指名されたポケモンは赤色の体に、クリーム色のふさふさした毛に首と尻尾がおおわれているポケモンだった。

「僕ですか？ 分かりました。僕はブースターって言います。音楽が好きで部活は吹奏楽部に入ろうと思っています。次はサンダースでいいよね？」

ブースターに指名されたサンダースはやれやれという感じだ。

「俺かよ。いくら従兄だからって名指しはするなよなあ。……まあ気を取り直して、俺はサンダース。そっちのブースターとは従兄だ。俺は陸上部に入ろうと思っているぜ」

どうやらこの二人は従兄で、かなり仲が良いらしい。

「俺の次はだれがやる？」

「じゃあ、僕がやらせていただきますね」

何故かとても丁寧な言葉使いのポケモンは、クラスみんなが知っていた。この体全体がピンクで長い尻尾の付いたポケモン――。昨日の入学式で指揮をとっていたポケモンだ。

「僕はミュウと申します。得意な科目は理科で、科学部に入部させていただこうと思っています。それでは、次の方どうぞ。……あれ？ 誰かいませんか？」

このミュウは本当に丁寧な言葉使いで、クラスのみんなが唖然としていた。当然次やろうと思う勇者などいない。10秒くらいたったあと、デンリユウがまた話し始めた。

「もうやりたい人はいないみたいだな。それじゃあ学級委員を決めるぞ」

二人のポケモンが手を挙げた。ラティアスとミュウである。

「珍しいなあ。二人も学級委員に立候補するなんて。面倒なだけなのに」

デンリユウが到底教師とは思えないような発言をする。

そんな教師を放置して、二人は話し合いを始めた。

「ミュウさん。どうします?」

「そうですね……。ラティアスさんはいい案はありますか? 僕の方はあまりいい案が浮かびません」

「ここはみんなを待たせているので、素早く決められるじゃんけんでいいですか?」

「そうですね。こんなことに皆さんの貴重な時間を割いてもらうのも悪いですから、その案に決定しましょう」

ピカチュウはこのとき思った。デンリユウよりミュウかラティアスが教師をやった方が良いのではないのだろうか……。

ピカチュウがそんな無駄なことを考えているうちにじゃんけんは終わって、ラティアスが学級委員をやることになった。

「よし。やっと終わったな。それじゃあ、俺は面倒なことが嫌いだからこれで終わりにするぞ。学級委員。号令よろしく」

「きりーっ! きょーっけ! 礼!」

「さようならー!」

なにはともあれピカチュウ達は下校することにした。今日はブイゼル、ムウマ、チルタリスと一緒に帰る。

ピカチュウ達は校庭にでた。まだグラウンドも綺麗で、校舎にも傷一つついていない。ピカチュウは、改めてここが新しい中学校な

んだと実感した。しかし、不安なことがたくさん……。そのうちの
一つをブイゼルが質問してきた。

「あのさあ、ピカチュウ君。この学校って大丈夫なの？」

「さあ……？　ほかの先生はまともだといいね」

「多分大丈夫でしょ。さすがにあんな適当な教師だけではないだろ
うから」

そんなことを話していると、校門付近に学級委員のラティアスを見つけた。

「あら？　あれラティアスさんだわ。こんなとこで何しているのか
しら？　調査調査」

「あつ、ムウマ！　今日知り合ったばかりの人を観察するのはやめ
る！」

「いいじゃない。気になるんだもの」

ムウマはそれだけ言い残すとラティアスに向かって全速力で行っ
てしまった。

「いいんですか？　ピカチュウさん。ムウマさんを連れ戻さなくて」

「いや、はやく連れ戻さないとやばい。変に興味を持ったら、毎日
ストーリーマガイなことをラティアスさんにし始めるぞ」

あのムウマ、趣味はポケモン観察という絶対に他には言えない趣

味を持っている。その上、気に入ったポケモンを見つけると毎日ストーキングっぽいをするのだ。そのせいで前の学校では不眠症のポケモンが多いんだとか……。

「ラティアスさ〜ん！　こんなところでなにしているんですか？」

「あ、えーっと、ムウマさんでしたっけ？　今はお兄ちゃんを待っているんです」

「お兄ちゃん？」

ラティアスが頷くと同時にそのお兄ちゃんらしき影が見えた。

「あ！　おにいちゃ〜ん！　ここにいますよ〜」

ラティアスは手を振りながらそのポケモンに声をかける。向こうも気づいたようで、手を振り返してくれた。

「あの人がお兄ちゃん？」

「はい。ラティオスっていいいます。今は3年生なんです」

説明が終わった頃、ピカチュウ達がこっちに向かってきた。

「ラティアスさん！　大丈夫でしたか？　何か変なことされませんでしたか？」

ピカチュウがラティアスに詰め寄る。外から見ると、変なことをしているのはピカチュウの方に見えるだろう。

ラティアスは訳のわからなそうな顔をしている。それで、さり気なくムウマの顔を見てみると怒りととれるような表情をしていた。

「ピカチュウ！ そんな失礼なことするわけないでしょ！ ただ、私はラティアスさんとおしゃべりしていただけです」

「え？ そうなのラティアスさん？」

「はい。ただムウマさんと話をしていただけです。それより……、ちよつと離れてくれませんか？」

ピカチュウは、ラティアスに超至近距離と呼べるほど近づいていた。

「あ、すいません。つい……」

「ラティアス、そのポケモンは誰かな？ もしかして彼氏？」

ここで登場したのはラティアスよりも一回り大きく、赤いところが青くなっているポケモン——ラティオスだった。

「もう、お兄ちゃん。この人は彼氏じゃないよ。ちよつと私を心配してくれてただけ」

「そうなのか？ ちよつと残念だなあ。それよりシャワーズは一緒にじゃないのか？」

ピカチュウは今の、ちよつと残念というセリフが少し気になったが気にしないことにした。

「シャワーズは3組だからここで待ち合わせ。それよりお兄ちゃんこそグレイシアさんと一緒じゃないの?」

「グレイシアは2組だからなあ。俺もここで待ち合わせだ」

ムウマは気になったことはとことん追求する。その性格が事件の引き金になることも多いのだが、こういう場面では色々気になることを聞いてくれて助かる。

「ラティアスさん。シャワーズさんとグレイシアさんって誰?」

「シャワーズは私の親友で、パソコンとかに詳しいの。それで、グレイシアさんはシャワーズのお姉さんで、趣味は私と同じで読書なの。私達兄妹はそろって向こうの姉妹と仲が良いの」

ムウマはそれからラティアスにどんどん質問していくが、ラティアスは一一つ丁寧に答えていく。どうやら几帳面な性格で、友達付き合いもいいみたいだ。

そんなこんなで3分ぐらいおしゃべりをしていたらグレイシアとシャワーズがこっちに来た。

「こんにちは、ラティアスちゃんにラティオス。待たせちゃった?」

「もう二人ともいたの? こっちは大分話し合いが長引いちゃって……。それと、その四人は誰?」

ピカチュウは軽く自己紹介をする。

「俺はピカチュウ。ラティアスさんと同じクラスなんだ。それで、

右から順にムウマ、チルタリス、ブイゼルだ。全員1組だから、ラティアスさんに会いに来るついででも声かけてよ」

ピカチュウが全部説明してしまったのでムウマ達はしゃべることもなかった。

「そうなんだ。うちはシャワーズ。3組で趣味はパソコン。よろしくな」

このシャワーズは非常に男勝りな喋り方をするみたいだ。ピカチュウが「こちらこそよろしく」と言おうとしたら、グレイシアが間に入ってきた。

「ふーん。じゃあ君達はあのデンリユウが担任なのね」

ここでラティアスが質問をする。

「あのグレイシアさん。デンリユウ先生のこと知っているんですか？」

「知っているわよ。実はあのデンリユウ、もとは向こうの中学校の教師だったんだけど、あまりにも適当すぎるから向こうの校長が見限ってこっちに転勤させたの」

グレイシアは最後に笑って、あんな奴に先生なんて付けなくていいわよと付け足した。こちらのグレイシアは見た目こそ綺麗だが、結構腹黒いだろう。やはり、綺麗なバラにはトゲがあるようだ

「それじゃあ俺達は帰ろうか。どうせグレイシア達はうちに来るんだろ？」

「そうね。お邪魔させてもらうわ」

確かにこの四人は仲が良いみたいだ。

「私も行きます。ムウマさん。今日はおしゃべりできて楽しかったです。それじゃあ、皆さんさようなら」

「さようなら。またお話ししようね」

ムウマは一人ご機嫌だ。ピカチュウはムウマのこの表情からして、明日からのムウマの動向には気をつけなければいけないと思うのだった。

四人と別れた後、そのまま家に帰るにしても、時間がお昼時だったのでこのまま昼食をとっていくことにした。

街のメインストリートに来たピカチュウ達。ここら辺は、お洒落なお店がたくさん立ち並んでいるところだ。全体的に落ち着いた感じの所で、この街での人気ナンバー1を誇る場所だ。

「どこでお昼食べる？」

「私は洋風のお店が良いわ」

「食べ放題の所でいいよ。そうしないとお金が……。ぶつぶつ」

「僕はどこでもいいですよ」

ピカチュウがみんなに聞いて見ると、見事にばらばらな答えが返ってきた。

「それじゃあ、洋風の食べ放題のお店に行こうか。俺もどこでもよかったからさ」

その時、どこからかアナウンスが流れてきた。

「ただいまより、あの焼き肉&ケーキ食べ放題で有名なファイヤートルネード店にて大食い大会が開催されます。チーム戦で、4人から参加できます。なお、参加費は無料。しかし敗北したチームには、勝ったチームのが食べた分の代金と、自分達の食べた代金を支払ってもらいます。くりかえします……」

これを聞いたピカチュウ達。こんなチャンスを見逃すはずもなく……。

「よし、ファイヤートルネードに行こう。チルタリス！ 絶対優勝するぞ！」

「もちろんです！」

こうして、ピカチュウとチルタリスが二人を無理やり連れて、大食い大会の会場まで急ぐのであった……。

大食い大会inファイヤートルネード！（前書き）

新キャラが出ます。4人ほど。正確には5人かも。

ピカチュウ「何故曖昧なの？」

それは、まあ、色々と……。

大食い大会 in ファイヤートルネード！

ピカチュウ達はここ、今日大食い大会が開催されるファイヤートルネードに来ていた。とはいっても、ブイゼル達は半ば強制的にだが。

このお店は全体的に赤とオレンジで構成されていて、所々にピンクの水玉模様がある。暑そうな見かけとは裏腹に、冷房が利いていてほどよく涼しい。奥の部屋からは熱気とおいしそうな肉の匂いがある。飲食店というだけあって、人の声が結構気になる。そんな普通のお店だ。

「久しぶりだね。ここに来るのは」

ピカチュウが言うと、みんな首を振って頷く。

このお店、とってもおいしくて評判も良いのだがとにかく値段が高い。食べ放題コースなんて二万円はする。まあ、ピカチュウだとそれで元をとるからいいのだが。

「それよりさあ、大丈夫？ お金持ってきてるの？」

ブイゼルが心配そうに訊ねる。ここの料理の値段を知っていれば極力当たり前の反応だ。

「俺とチルタリスで優勝するからお金なんていらないでしょ。ブイゼル達もタダでここの料理が食えるぞ！」

自信満々に言うピカチュウ。つまり、お金は持ってきていないよ

うだ。そんなピカチュウを見て、ブイゼルは苦笑している。

「それじゃあ、僕が受付済ませてきますね。皆さんはここで待っていてください」

そう言つと、チルタリスはレジの方へ駆け出して行つた。

「ピカチュウ君。前から気になっていたんだけど、何でこのお店ってファイヤートルネードなの？ 僕的には『ファイヤートルネード』の方が良いと思うんだけどな」

ブイゼルの昔からの素朴な疑問だった。普通、ファイヤーではなく、ファイアーと書くことの方が多いであろう。

「実は、この店長のホウオウさんも昔は大食い大会でひと暴れしていたらしくて、それでついたあだ名が『ファイヤートルネード』。だから、この店もその名前にしたんだって」

ピカチュウが自慢げに説明する。

「そんな経緯があつたのね。私も初めて知つたわ」

ムウマも話に加わってきた。ムウマはこの中で一番の情報通だ。しかし、食のことに關してはピカチュウと全く同じぐらいの情報量なのだ。これは、ムウマが食について疎いのではなく、ピカチュウが食に關してだけは精通しているからだ。

「ピカチュウ。ちなみにここのお店で一番おいしい料理は何？」

ムウマが興奮の色を隠せないまま訊ねると、ピカチュウは急に立

ち上がり、向きを変えてムウマ達を見据える。周りの客達も何事だ
と思いながらも見て見ぬふりをしていた。

「よくぞ聞いてくれた！　ここはシヨコラケーキが最高だぞ！　チ
ヨコケーキも別にあるけど、シヨコラの方が断然美味い！　そうい
えば、お肉は何でも美味しいんだけどその中でも美味しいのが何々で…
…」

ピカチュウの熱演に気迫を感じるムウマとブイゼル。そんな熱演が
目立たないはずもなくあつという間にピカチュウの周りにはギャラ
リーが集まっていた。

ピカチュウは周りにそんな人たちが集まっているとはいざ知れず、
身振り手振りも含め、熱演がさらにヒートアップする。

「それで、最後は甘さ控えめのショートケーキを食べると良い感じ
だぞ！　……って、何で皆さん集まっているんですか？」

「そりゃあ、あの勢いで演説してたらねえ……」

呆れたように手を振りながらブイゼルが言う。やれやれと言った
感じだ。

「私もそう思うわ。はつきり言って周りのことを考えない奴に見える
わ」

ムウマはいつも通りの嫌みっぷりだ。その口元は少し緩んでいる。

そんな騒ぎがあったことも知らずにチルタリスがこちらに向かっ
て走ってきた。どうやら受付が済んだようだ。

「皆さんお待ちせしました。受付終わりましたよ。もうすぐ始まるからここら辺で待っているとのことですよ」

「あんたら今日の大食い大会にでるのか？」

チルタリスの話を聞いていたギャラリーの一人、ガブリアスがピカチュウに訊ねてくる。

「えっ？ 出ますけど何か？」

そのポケモンは深くため息を吐き、ピカチュウの目をもう一度見直してそう言い放った。

「今日は、あのカビゴンが出るらしいからやめた方が良いでしょう。これは忠告だから」

——カビゴン。その名前を聞いた瞬間、ピカチュウのピンと割った耳が反応する。そのカビゴンというポケモンは今まで出場した大食い大会ではすべて優勝。まさに負け知らずと言えるものだった。

しかし、カビゴンはピカチュウにとって憧れであるため、カビゴンの現在地など調べ上げてある。彼の名誉のために言うがストーカーなどはしていない。

「大丈夫ですよ、今カビゴンさんは異国の地に行っていますから。この大会にでれるはずがありません」

「それじゃああれは誰だ？」

そう言われてガブリアスの指す方向をみると、そこには確かにカビゴンがいた。ピカチュウも驚いている。しかし、驚いたのはそれだけじゃなかった。何と、今日の自己紹介のときにいたブースターも一緒にいたからだ。

「?? 訳が分からないぞ……。つまりどうということなんだ?」

真剣に考え込んでものすごい顔になっているピカチュウ。そんな彼を見て、事情を察したのかブースターが駆け寄ってきた。

「君って、僕と同じクラスだね? もしかして、こちらのカビゴン先輩について知りたいのかな?」

「カビゴン……先輩?」

驚いたような、拍子抜けしたような声を出すピカチュウ。そんなことはお構いなしに、ブースターは説明を始める。

「そう、カビゴン先輩。僕って吹奏楽部に入ろうとしてるよね。実は、僕のお姉ちゃんも吹奏楽部で、2年生なんだ。で、部長がこちらのカビゴン先輩。だから、お姉ちゃんを通して、僕とカビゴン先輩はずっと面識があったわけ」

「なるほど。今の話は私も聞かせてもらったわ。そのお姉さんも来てるんでしょ?」

話に割り込んでくるムウマ。この盗聴は見ず知らずの他人でも重いから困る。

「いるよいるよ。お姉ちゃん、こっち来て〜！」

そうブースターに呼ばれてきたのは、体は全体的にベージュで、耳や尻尾は緑かかっている。その容姿はまさにキャバ

「今、私がキャベツにでも似てるとでも思ったんでしょ？ はっきりに言っただけですよ。と、その前に。自己紹介が遅れましたね、私はリーフィア、今の発言は無視しておいてね」

思いつきりメタ発言をして飛び出してきたポケモンはリーフィア。ブースターの姉だ。

「ちょっと、リーフィアさん。小説内でメタ発言するのはどうかと……」

恐縮しながら注意するブイゼル。この発言も思いつきりメタ発言だ。

そして、いきなり葉っぱがカッターがブイゼルに向かって飛んでくる。放ったのはもちろんリーフィアだ。

「リーフィア”先輩”でしょ、私は一応上級生なんだから」

「はあ、リーフィア先輩」

先輩と呼ばれて上機嫌のリーフィア。2年生になったばかりで、こういう風に呼ばれたかったのだろう。少し分かる気がする。

「あ、やっぱりそう思うよね〜」

本日3回目のメタ発言。

「……それより、その、ブースターとカビゴンさんとリーフィア…先輩は何でここにいるんですか？」

「もちろん大食い大会に参加するからだよね、お姉ちゃん」

「そうそう、カビゴン先輩も一緒だから負けなと思うし」

自慢げに言うリーフィアとブースター。カビゴンも見かけ通りよく食べるようだ。

「これより、大食い大会を開催いたします。参加者は奥の部屋に来て下さい」

「始まるみたいだね。それじゃあ頑張ろう！」

アナウンスを聞いて、ピカチュウ達は部屋に入ってしまった。

部屋の中は熱気に覆われていて、部屋の外と比べると断然こっちの方が暑かった。

そんな中、このこのオーナーであるハウオウが向こうの調理台の方から出てくる。

「ここで補足説明だけど、ここに住んでいるポケモン達は、みんな身長とかがあまり変わらないの。だから、ハウオウが出てきてもピカチュウが踏みつぶされるみたいなことはないみたい」

「お姉ちゃん、メタ発言が多いよ……」

画面の向こうの皆さまに説明をしたリーフィアが弟のブースターに怒られる。今回はメタ発言が多いような。

「それじゃあルール説明はいらないよね。取りあえず一番多く食べたチームが優勝。制限時間は2時間だから皆さん頑張ってね」

そう言い残すと、料理の皿を持ったキレイハナ達が出てきた。どうやらアルバイトらしい。慣れない手つきでお皿を配膳する。

配膳が終わった後、開始の合図が出され大食い大会が始まった。

（1時間後）

「『おかわり！』『』」

3人の声が同時に鳴り響く。ピカチュウ、チルタリス、カビゴンの声だ。

もうブイゼルとムウマ、ブースター達はある程度食べたらし食べなくなり、ピカチュウ達に任せた。それどころか、4人で集まり雑談をする始末だ。

他のチームはピカチュウ達の食欲の前に戦意喪失し、ただ、料理を眺めているだけだ。

つまり、今は両者の一騎打ちなのである。

（更に1時間後）

「そこまで！　ってそこ！　もう終了だから食べないの！　そっちのお客さんも！」

ピカチュウ達の食欲は収まるところを知らず、まだまだ食べていた。試合終了の合図が出てまだ。

「ピカチュウ君！　もういいでしょ！　これ以上食べたら太るよ！」

太るという言葉に反応したのは以外にもチルタリスだった。意外と体型を気にしているらしい。

チルタリスが食べるのをやめると、それにつられてカビゴンとピカチュウも食べるのをやめた。

「ふゝ、それでは結果発表です！　優勝は……ピカチュウのチームだゝ！」

観客から「おおゝ！」という歓声が会場を埋め尽くす。そして、敗北したチーム達に領収書が渡される。

今回の料金システムは、一番食べたチームの代金＋自分達の食べた代金を足すので、お店はかなり儲かる仕組みだ。

「それじゃあ、僕がみてみるね。えーっと、何々、1、10、百、

千、万、十万、五十万円!？」

ブースターがその金額に驚く。これはもう詐欺の領域だろう。

「しょうがないわね。それじゃあ、従兄のブラッキーに払ってもらおうか」

彼女らはこの金額を他の人に払ってもらおうとしているようだ。

「あの、リーフィアさ……じゃなくて先輩。ブラッキーさんとは誰ですか？」

チルタリスがリーフィアに訊ねる。

「んー？ ブラッキーは私達の従兄でもものすごいお金持ちなんだ。豪邸をいくつも持ってるし、ジェット機ぐらいならチャーター出来るよ」

「あ、サンダースとは違う従兄だからね。サンダースは一人っ子」

リーフィアの説明にブースターが付けたす。取りあえずお金持ちだということしか分からなかったチルタリスであったが、聞き直すと半殺しになりそうなので聞き直さなかった。

「じゃ、電話しよ」

リーフィアが携帯を取り出すと（どこにしまっていたかは秘密です）ブラッキーに電話をかけようとした。

しかし、ヘリコプターが近づく音がしたので、電話をやめ、外へ

出るリーフィア。

「あ、ブラッキー。ナイスタイミング！ ちょっとカード貸して。50万以上支払える奴」

「いいぞ。どうせ大食い大会で負けたんだろう？ 持ってきてるぞ」

「ナイス！ やっぱりGTSは便利よね」

ヘリから降りてきたブラッキーからカードを受け取ると、また店内に戻っていく。

「じゃあ、これで。また来ますね」

カードで支払いを済ましたリーフィア達と一緒に帰るピカチュウ達であった……。

ちなみに、そのほかの参加ポケモンがフアイヤートルネードの支店で働いているところをムウマにより目撃されている……。

大食い大会inファイヤートルネード！（後書き）

リーファイア……色々やっちゃった感のあるキャラです。

リーファイア「私の応援ヨロシク♪」

ピカチュウ「それより、新キャラ4人しか出て無いじゃん」

多分、君の氣にしていないキャラが実は新キャラなんだよ。

ピカチュウ「!?!」

部活動仮入部！　　く前編く

学校が始まり1週間がたった。クラスの雰囲気が決まる大事な時期、もうひとつ大事なことがあった。そう、それは――。

「えー、今日から仮入部が始まる。この学校は校長が『絶対部活動に入れ！』という方針だから、帰宅部は存在しない。そういうことで、来週までには配った紙を見て必ず部活動を決めとくんだぞ。それじゃあ解散！」

デンリュウが珍しく教師らしいことを言った。

「えー……。部活動なんて決めてないよ……」

こんな嘆きを漏らしているのはこの小説の主人公、ピカチュウである。

「ピカチュウ君。部活動決めてないの？」

ピカチュウの嘆きを聞いて軽く質問するブイゼル。ピカチュウのことを心配しているようだった。

「決めてない。ブイゼルは？」

「僕もだよ。園芸部とかがあればいいのになあ」

そう言いつつ、配られた部活動一覧表を見るブイゼル。あまり興味のある部活はないようだ。

ちなみに、この学校に存在する部活は、野球部、陸上部、バスケット部、卓球部、水泳部、バレー部、ハンドボール部、吹奏楽部、囲碁・将棋部、料理部、文芸部、捜査部、科学部、パソコン部の14個だ。

「ピカチュウ達は部活動決めてないのね。私は捜査部に行ってみるつもりだけど」

ムウマが言う捜査部は、落とし物を探したり、人探しをしたりする部活らしい。

「じゃあ、僕もついて行って良いかな？」

「だめ。よくここを見なさい」

捜査部の欄をよく見ると、『捜査部はゴーストタイプ以外入部お断りです』という一文を発見した。

そのほかにも、野球部とバスケット部は四足歩行のポケモンはお断り、水泳部は水タイプ以外お断りだった。

「本当だ、ゴーストタイプ以外入部できないみたい。他にも入部条件がたくさん」

「でしょ？ だから、ピカチュウ達はほかの部活を当たってみるのとね」

そう言うとムウマは向こうの方に去って行った。

「うーん。あ、チルタリスはどうするんだろう。聞いてみよう」

「確かに気になるね。あつ！　ねえねえ、チルタリス君は部活動何にするの？」

「たまたま近くを通りかかったチルタリスに質問を投げかけるブイゼル。」

「僕？　僕は料理部に入るつもりだよ。シャワーズちゃんと一緒に見に行くんだ。ピカチュウ君もどう？」

「チルタリスはすっかりこのクラスになじめたのか敬語を使わなくなった。ピカチュウ達と親しくなったとも言いかえられる。」

「そうか……、俺達は遠慮しとくよ。料理は得意じゃないしね」

「そう言っ、ブイゼルと顔を見合わせるピカチュウ。二人とも料理は苦手な方だ。」

「どうしよう……。また振り出しかあ。こうなったら片っ端から飯入部行く？」

「ピカチュウの提案は今のピカチュウ達にとっては最善の選択だろう。」

「それじゃあどこに行く？　僕的には運動系はちょっと……」

「俺も運動系は嫌だし、文芸部にでも行こうか？」

「ということで、文芸部を目指すことになったピカチュウ達。」

「教室が図書室に近いこともあり、すぐに図書室までたどり着けた。」

しかし、図書室とはあんまり縁のなかったピカチュウ達なので、心なしか緊張している。

「すいませ〜ん。僕達仮入部に来たんですけど……」

ブイゼルが恐る恐る声をかけながら図書室に入っていく。

「仮入部ですか？　って、君達はこの前のピカチュウ君とブイゼル君？」

そこにいたのは、この前校門で出会ったグレイシアだった。

「はいそうですけど……。もしかして部長さんですか？」

「一応ね。それじゃあ無駄話はこのくらいにして、向こうの方へ行ってください。もう少ししたらプレゼン始めますので」

グレイシアが前足を使って指した方向には、すでにラティアスが仮入部に来ていた。どうやらピカチュウ達3人だけの様子。

「あ、ピカチュウさん達も仮入部来てたんですね」

「取りあえずだけどね。片っ端から仮入部して行って、その中から俺たちに合う部活を探そうと思って」

「そうなんですか……。実は文芸部に仮入部に来たのは私だけなんです」

ラティアスは少しだけ物哀しそうな表情をする。

「そうなんだ……」

全体の雰囲気沈む。その後は沈黙の時間だった。

その雰囲気察してか、 그레이シアが早めにプレゼンを開始してくれた。

「それじゃあプレゼンを始めるわ。この文芸部は当たり前だけど文を書く部活よ。文といっても、詩やエッセイ、短歌や小説など、ジャンルは様々。どれか一つでも興味のあることがあるんじゃないかしら？ もし、一つでも興味があったら明日も是非この部に来て、試しにでも文を作ってみてね。みんな待っているわ」

그레이シアがぺこつと頭を下げると、ピカチュウ達が拍手をする。

「ごめんなさいね。実は副部長からプレゼンの時間は短くして体験に時間を割きたいみたいなの。そう言うことで、あとは体験だけど、3人ともやってく？」

「私はやりたいです！」

ラティアスは待つてましたと言わんばかりに手を挙げる。ピカチュウ達は迷ったが、ここだけで時間をつぶすわけにもいけないので、体験は遠慮した。

図書室を退室するピカチュウとブイゼル。次に行く部活はまだ決めていない……。

——方その頃、チルタリス達は——

「はあ、はあ。やっと着いたね。調理室に」

「本当だよ。うちたどり着けないんじゃないかと思った。はあ、はあ」

息を荒げている二人、どうしてそんなに疲れているかというところ…。

「こっちに来てよ！ 絶対楽しいから！」

「いやいや、ハンド部より卓球でしょ？ 仮入来てよ！」

二人の先輩に羽をつかまれ、引っ張られているチルタリス。どうやら、ハンド部と卓球部の勧誘らしい、かなり過激な。

「おいオクタン！ 離せよ！ こっちが先に見つけたんだ！」

「それはないでしょフライゴン！ こっちが先に声をかけたんだから！ とうかちゃんと先輩に敬語使いなさいよ！」

この二人、卓球部の方がオクタンで、ハンドボール部の方がフライゴンらしい。しかも、フライゴンはまだ2年生のようだ。

「離してくださいよお！ 痛いですって！」

チルタリスも悲鳴を上げてるが、二人は一向に離そうとしない。

「まあ、これじゃあ仮入いけないじゃん。うちははやく仮入行きたいし、すいません先輩方！ 水鉄砲！」

シャワーズから放たれた水流はフライゴンとオクタンの顔面にジャストミートし、チルタリスは自由の身になった。

「今のうちに逃げるよ！ 早くしないとこちら仮入に行けなくなるし！」

「……そうだね！ 行こうか！」

その後、全力で逃げるチルタリス達であったが、オクタン達も死に物狂いで追ってきて、結局校内大レースが始まってしまった。最終的には図書室に逃げ込み、 그레이シアに助けを求めたそうだ。それでなんとかレースを終わらせることができて調理室まで来た。というところである。

「よし、じゃあ開けるよ。失礼しまゝす！」

チルタリスは勢いよく扉を開けた。

「いらっしやゝい。我が調理部へようこそ♪ なんだ。シャワーズか」

そこにいたのは、以前 그레이シアとであった時に会ったラティオスだった。

「ラティオス。仮入来たよ。というかこれで決定でいいんだけど」
シャワーズは最初からここに入るつもりだったらしい。

「いいのか？ それなら今日から決定でいいけど。そっちのチルタリスもいいのか？」

「いいよいいよ。チルタリスもここが第一だから」

シャワーズとラティアスの会話。こうして見ると先輩後輩ではなく単なる友達となっている。

「それじゃあ、早速そっちの調理台に行ってくれ。今日のメニューはオレンの実サラダ、お肉の炒め物、モモンの実のケーキ……」

こうして、二人の部活は決まったのであった。

——一方、ムウマの仮入部は——

「ゲンちゃんまた負けじゃん」

「弱いよ。ムウマちゃんにも負けてるし」

「そう言われても……。そうだ、難しいんだよ！ このゲーム！

俺大富豪苦手だし」

今、ムウマ達のいる部活は捜査部だ。正確には捜査同好会と言ったところか。ここには顧問がいない。

で、今やっているゲームはトランプの『大富豪』。自分の持ち札を無くせばいいという、比較的簡単なルールだ。追加ルールを付けなければ。

今やっている大富豪は、追加ルールという追加ルールがほとんど採用されている。幸い、ムウマは大富豪は得意だったためビリは免れているが、その代わり、部長のゲンガーが負けまくっていた。

「そう？ 難しくないよね、ヤミラミ」

「そうそう、ゲンちゃんが弱いだけだよねミカルゲ」

二人はともに二年生のミカルゲとヤミラミだ。彼らは相性的に弱点が無いゴースト・悪というタイプで、私生活でも同じように隙が無い。

「……」

ムウマは捜査部と聞いてどんな捜査をするのかと思っていたら、何故か、トランプの大富豪をずっと続けている。これで15回目だ。ちなみに、ムウマやミカルゲには手が無いので、サイコキネシスでカードを浮かせている。

「しょうがない、俺も本気を出させてもらっぜ。ヤミラミ、ミカルゲ。後悔するなよ？」

ゲンガーの雰囲気我突然変わった。今までは失礼だがちょっと抜けているところがあると思っていたムウマ。今のゲンガーは目つきが鋭くなりその目を見た者を全て凍らせるような目つきだ。

「あ、やつちゃった」

ヤミラミが何か物を壊したときのようなおどけた声でそう言った。

「ムウマちゃん。ちょっと悪いけど、3メートルは離れた方が身のためだよ。ああなったゲンガーは誰も止められないから」

ムウマはその忠告を無視し、自分の周りに緑色の薄い膜を作り出した。守るという技である。

「忠告ありがとうございますミカルゲさん。でも私は未知のものを見るのが大好きなので、ここで見学させてもらいます！」

「守るが使えるんだ。それでもずつとは出せないでしょ？ 守るの効果が切れかけたらすぐに離れないと危ないよ」

ヤミラミの忠告も想定済みだったムウマ。それに対する反論も既に考えてある。

「それも心配ご無用です。私はこういうところが好きなので、未来予知を応用して次の攻撃が来るときにはその場を離れられるようにしてあります」

ヤミラミとミカルゲは軽く笑うと、そのままゲンガーの所へ向かって行った。

「やつと遺言が済んだのか？ それじゃあ大富豪始めるぞ」

ゲンガーがサイコネシスを使い、宙を舞いながら配られていくトランプ。それはゲンガーの周りに無数のトランプが舞う。トランプで作られた花びらの舞いのようだった。

「それじゃあ、俺からでいいな？ 始めるぜ」

ゲンガーから始まった大富豪は、ムウマと一緒にいた時の大富豪とは全然違うものだった。教室全体が緊迫しているムード。誰も言葉を発さない。

「どうした？ 出せねえのか？ それじゃあこいつで上がりだぜ」

ゲンガーが1位で上がる。今までビリ独走していたゲンガーとは何もかもが違っていた。

「あーあー。分かりましたよゲンガー先輩。ゲンガー先輩が一番強いです大富豪。僕達負けました」

ヤミラミが心のこもっていないお詫びをする。しかし、それを聞いたゲンガーは今までどおりのムードに戻っていた。

「うん」 分かってくれたらいいよ」

「と！ ここでムウマちゃんに問題だぜ」

ゲンガーが元に戻ると同時にミカルゲが問題をムウマに出す。

「？ いきなりなんですか？」

「実は、今までののは全部芝居でさ。今のゲンちゃん見たでしょ？アレ実はイカサマしているんだけど、それに気づけたら合格。入部する権利を得られます。もし分からなかったら……」

「入部できないということですね」

「そういうこと」

「分かんなかったらもう一回やってあげるけどどうする？」

ヤミラミが救いの手を差し伸べようとする。しかし、ムウマはそこまで難しいトリックは使われていないと確信していた。

「心配ご無用ですヤミラミさん。トリックなんてもう見破っていますよ」

ムウマが少し口元から笑みをこぼすと、そのトリックについて説明を始めた。

「答えは簡単です。だって、ゲンガーさんにはカードを見るチャンスがあつたんですから。それも配る前に。更に言うと、それを見て自分には強いカードを、相手には弱いカードが来るように仕組んでいた。違いますか？」

ゲンガー達は何も言わない。どうやらそのチャンスがあつた時間を述べよということらしい。

「その見るチャンスがあつた時間。それは、カードを配っている間。

ずっとゲンガーさんの周りをトランプが浮遊していた時です。合ってますよねゲンガーさん」

「うん。正解。きみ凄いね。初めて一回目でこのトリックに気づかれたよ」

「それじゃあよろしくね。ムーちゃん」

「ムーちゃん？」

「そ、この部活はみんなあだ名で呼び合うし、先輩後輩関係ないから。気楽に行こうムーちゃん！ちなみに、俺達二年は弱点が無いからということ俺がフェクト、パーフェクトからとった。で、ヤマミミがアル。アルティメットからきてるぞ」

ムウマの推理は正解し、入部権利を獲得することができた。

部活体験。後半に続く！

部活動仮入部！　　く前編く（後書き）

ピカチュウ「一発キャラ多くない？」

大丈夫これから一発キャラにももつと出番があるから。
次回はあのリーフィアが帰ってきます！　大波乱の予感……。

部活動仮入部！　　く後編く

ムウマが捜査部の試験に合格した頃、サンダースは外を走り回っていた。

「はあはあ……、どうしたんだ？　あの二人の先輩」

サンダースを追っかけていたのは、先ほどチルタリス達を追いまわしたオクタンとフライゴンだった。

「サンダースくうん！　ハンドボールでなら君は凄く活躍できるよ！　素質あるし！」

「卓球部でも十分活躍できますわー！　あなたの素早い動きなら次の大会は優勝間違いなしですわ！」

「勘弁して下さいって。俺は陸上部に行きたいんだあー！」

そう言って速度を上げるサンダース。今走っているのは校舎の裏だ。

サンダースが速度を上げたことによって、フライゴン達は離されて行く。

「あ！　待ってよ」

「君、早すぎですわー！」

オクタン達はもう限界に達したのか、その場に座り込む。二人と

も一日中勧誘で歩き回っていたのだろ。そのまま二人は話を始めた。

「フライゴン。ハンド部はどうですの？ 部員集まりました？」

「ううん。まだゼロさ。ま、今日始まったばかりだし、これからも勧誘頑張ればみんな来てくれるよね？」

「どうだか……。去年は卓球も毎日勧誘頑張ったけれど、ダメダメでしたわ」

「ふーん。だいたい事情は分かったわ。フライゴンに、オクタン先輩」

そこに現れたのは、この前の大食い大会で色々やらかした……。

「そう。リーフィアよ。もう私がキャベツっぱいだなんて思ってないわよね？」

「ん？ リーフィア、誰に話しかけてるの？」

「あ、ごめんごめん。それより、今年も卓球は苦戦してるんですね。ハンドは新しく出来たのに頑張っているわね」

今の会話で分かったであろうが、卓球部は2年生の部員がいなくて今年も部員が入らなければ廃部。ハンドボール部はこの学校に新しく設立された部で、まだ、入部者はゼロ。今年1年生が入らなければこちらも潰れるそうだ。

「1年生を寄せるコツを教えてくださいようか？」

「本当ですよ？」

「本当ですよ、今から吹部も仮入部始めるので、それを見に来て下さい。コツが分かりますので」

「分かった。行ってみるよ」

リーファイア一同は吹奏楽部の部室へと向かった……。

「もう追ってこないよな？」

サンダースは辺りを見渡しながらそう呟いた。今いるのは科学室の前だ。科学部が何か怪しげな実験をしている。

「そっぴやミユウって奴がここに見学に来てるんだっけ」

ちょっとした好奇心で扉の隙間から覗いて見ると、そこにはありえない光景が映っていた。

「皆さん聞いてますか？　これから水酸化ナトリウム水溶液に塩酸を加えていき、塩を作る実験を致します！」

これが、部長のセリフであつたのならなんら問題はないだろう。しかし、普通の会話で『致します』なんて言葉を使うのは一人しか

いない。

そう、そこにはミュウが教壇に立っていた。サイコネシスを使い、器用に黒板に文字を書いていく。

その時、何気なくミュウと目線があつた。

ミュウの目を見たサンダースはこれ以上この問題にかかわるのは危険と判断し、扉をそつと閉めた。

「あれ？ 君はてつきり陸上部志望だと思っていたのに科学部志望だったんだ」

サンダースに後ろから声をかけた主。サンダースには見覚えがあった。凛々しい顔。ふさふさした毛皮。間違いない。あのウィンディだ。

「えっ、あ、あ、あ、もしかしてウィンディ先輩ですか？」

「そうだけど。君は陸上に興味あるの？」

「あります。というか第一志望です！ 是非入部させてください！」

「ふふっ。君のことはリーファイアちゃんから聞いてたけれど、足が速いんだよね。これから楽しみだな」

ウィンディはサンダースのことは知っていたらしい。リーファイアはおしゃべりだから、どうせ勝手にあることないこと喋ったのだろうとサンダースは思った。

「失礼ね！　実際にあったことしかしゃべってないわよ！」

リーファイアが背景を破って出てくる。

「あのなあ、リーファイア。背景破るとか完全におかしいだろ？」

「あ……。まあ気にしないで。それよりなかったことは喋ってないからね！」

と言って、また自分で開けた背景の穴から出ていく。何故か背景は元通りになった。

「……面白い子だねリーファイアちゃんって」

「あの人と血がつながってると考えるとなんだか怖いです」

——一方その頃、ピカチュウとブイゼルは——

「あ、ブースターだ」

「本当だ。ねえ！　ブースター君は吹奏楽部に行くんだよね？　——緒について行って良いかな？」

「うん♪　いいよ。それじゃあはやく行こう！　僕今日は掃除で遅くなっちゃったんだ」

ピカチュウ達は吹奏楽部の活動場所である音楽室を目指し、歩いて行った。

「広っ！ 何これ？ 何でこんな大きいの？」

ピカチュウ達が来たのは第1音楽室。主に合奏したり、金管楽器が練習するのに使う場所だ。

合奏するためか、とにかくこの部屋は広い。言い表すと、教室を5倍くらい横に引き伸ばしたくらいの大きさだ。

「あゝ、カビゴン先輩はいますか？ 僕達仮入部に来たんすけど……」

「カビゴンはどっかに出かけたわ。それで今は私が受付してるわ。で、仮入来たのは何人？」

「3人です♪ ランクルス先輩♪」

「そう、それじゃあ向こうの第2音楽室に行くと後ろの方にイスが置いてあるからそこに座ってね」

「はい」

ランクルスに言われた通り、第2音楽室にやってきた。こちらの教室も向こうの教室と負けず劣らず大きい。こちらは木管楽器が練習に使う教室らしかった。

「ねえ、ブイゼル。この学校って金持ちなの？」

「多分そうじゃない？ 調べてみると、入学式や校庭で見たものは全体の十パーセントに過ぎないらしいから」

ピカチュウはそれを聞いて言葉を失う。それでは、入学式の光景で十分立派だったこの学校は実はもっと広かったなんて。

「二人とも何してるの？ はやく席に行こうよ」

ブースターが向こうでピカチュウ達を呼んでいる。どうやらずっと立ちっぱなしでいたようだった。

「え？ あ、うん」

「で、ルギア校長が、さすがにこれは広すぎるとか何とか言って授業中使っているのは僕達のクラスがある7棟と、向こうにある4棟だけみたい。それで、他の棟には部室がたくさんあるんだって」

「へえ……」

ピカチュウは内心超ガッツポーズをとっていた。そんなでかい学校に行けるなんてラッキーと思ったからだ。

「それじゃあ、フライゴン達はここで見ててね。早速勧誘してくるから」

「分かった」

リーフィア達も音楽室についたようで、早速1年を集めるコツの
ようなものを披露するようだ。

「はい！ 皆さん注目！」

リーフィアの声に反応してみんなリーフィアの方を見る。

「今、私の持っているこの楽器。なんて言いか分かりますか？」

今リーフィアが片前足で器用に持っているのは、リコーダーに色
々な修飾を加えた、黒っぽい楽器だった。

「あ、ブースターには解答権無しね。どうせ知ってるんだから」

「えゝ。お姉ちゃん酷ーい」

代わりに、ブイゼルが手を挙げる。どうやら知っているようだっ
た。

「はい！ そのブイゼル君！」

「クラリネットですか？」

「正解！」

「リーフィアの正解の声に合わせて、トランペットのファンファ
ーレが鳴り響く。どうやら後ろの方はずっと待機していたようだ」

「それじゃあ、クラリネットについてよく知っているブイゼル君！
クラリネットの体験をさせてあげよう」

ブイゼルの表情が明るくなっていく。このブイゼルは非常に人に乗せられやすいのでこういうこともしばしばだ。

「本当ですか！？　ありがとうございます！」

「よし！　それじゃあ向こうの教室にレッツゴー！　フライゴン達もついてくる！」

「あ、うん。今行くよ」

取りあえずブイゼルはクラリネットの体験に行ってしまった。その間、ピカチュウは暇だったので、近くにあった『ポケ第二中吹奏楽の楽器』という冊子を手にとってみる。

「何々……」

この吹奏楽部にある楽器は全部で21種類！

金管楽器が、トランペット、ホルン、アルトホルン、トロンボーン、バストロンボーン、ユーフォニウム、チューバの7種類！

木管楽器が、クラリネット、バスクラリネット、フルート、ピッコロ、ソプラノサックス、アルトサックス、テナーサックス、バリトンサックス、オーボエ、ファゴットの10種類！

弦楽器と打楽器が、コントラバス、エレキベース、ハープ、パーカッションの4種類だ！

自分のやりたい楽器のページを開いて見よう！

「自分のやりたい楽器かあ。あ、ホルンなんてカッコいいかも」

ピカチュウは、付属していた写真集をみて、外見で楽器を決めていた。

ホルン（Hr）

- ・金管楽器の中で一番管の長い楽器だよ！
- ・主に、メロディ、ハーモニーを担当します。
- ・みんな楽しく練習しているので是非来て下さいね！

ピカチュウ的にはまあまあぐらいだった。

「あ、ブイゼルが戻ってきた。どうだった？ 楽器体験」

「うん。それなりに楽しかったよ」

「へえ……。ブースターは楽器は何にす……」

ブースターのいたはずの方向を向いて見ると、ブースターはそこにはいなかった。

「ブースター君ならランクルス先輩の所に行ったよ。なんでもトランペットの体験でもやらせてもらおうのだったさ」

「『トランペットは聞いたこともあるよね。ラッパと呼ばれることもあるその楽器は吹奏楽部の花形といってもいいくらいメジャーな楽器だよ』か」

ピカチュウが読み上げた文章はトランペットの欄に書いてあったものだった。

「へえ、ブースターってトランペットに興味あったんだ。もしかして、意外と目立ちたがり屋？」

またリーフィアが出てくる。一年生の面倒をみるのはリーフィアの役目らしい。

「みなさん！これから合奏をやりまーす！ 曲目は秘密です♪ イスを持って第1音楽室へ来て下さい」

「ブースターの分も持って行ってあげようか」

「そうだね、ブースター君も大変だろうし」

そうして、第1音楽室に移動したピカチュウ達。ブースターの楽器体験も終わり、今は三人で並んで合奏を聴いている。

ピカチュウには音楽的な知識は皆無なので、メロディがきれいということぐらいしか分からなかったが、ブースターはみてもすぐ分かるくらい感動している。バイゼルも同様だ。

そして、曲が終わった。

「皆さんありがとうございました！是非明日も吹奏楽部に来て下さい！」

演奏の後、さすがにこれからは部活動体験も行けないので、今日

は帰ることにした。

帰宅道は下り坂だ。行きは昇りなので辛いことこの上ないが、帰りはとても眺めがよくて、この坂は好きなピカチュウ。そんな中、ブイゼルが話しかけてくる。

「今日の演奏凄かったねピカチュウ君」

「そうだね。俺にはあんまり分からないけどいい感じだったのは分かった」

ブイゼルは薄く笑いながら「そうだね」と言った。

「僕は吹奏楽部に入ろうかなあ」

「ブイゼル、悪いけど俺はダメ。あんまり女子だらけの所は嫌いなんだ」

今日の仮入部のときには、女子が20人ほど、男子はピカチュウとブイゼル、そしてブースターしかいなかった。

「分かってるよ。大丈夫。一人でもできると思うから……」

その時、ピカチュウにはブイゼルが凄く大人に見えたような気がした……。

「よし！ 掴みはオツケー。それじゃあ内容を考えよう！」

「フライゴン、よくそんなに頑張れますのね。私は疲れてやる気が出ませんわー」

「そう言わないでよ、次期部長さん！ でもリーフィアも面白いこと考えたよね。卓球とハンドボールを合併させて、ハンドピンポン部みたいになればいいなんて」

「同感ですわ。私達で悩んでいてもそんな案は出なかったでしょうね」

フライゴンとオクタンはリーフィアに教わった一年生の心をつかむ方法を実践しようと準備していた。

「リーフィアさんって、そんなに洞察力があるようには見えませんでしたけれど、結構鋭いんですね。一年生は集団心理が働くから、なるべく大勢を誘った方が良さなんて。私は一切思いつきませんでしたわー！」

「そうだね、本当に感謝しないとリーフィアには。よし！ 今日はこのくらいで終わりと。それじゃあ僕は帰るね…って、もう夜中の11時！？ やばい、急がないと！」

フライゴンは、オクタンの家の窓から飛び出し、全速力で家まで帰ったそうなの……。

部活動仮入部！　　〵後編〵　　（後書き）

部活は今後大事になってくる要素です。

部活対抗。。。とかも開催されますし……。何より、中学生生活の華ですし。

授業中…　く数学はとにかく眠い！く

現在5時間目の授業中。教科は数学、先生はジバコイルと言うポケモンだ。しかし、お弁当を食べた後で、さらに数学となれば眠くなるのも必然である。

「ふあゝあ……」

大きな欠伸をしているのはいつものピカチュウ。彼はとにかく眠いのだ。数学など毛頭興味もない。今は窓際に席があるため、外の景色を眺めていた。桜が散り、新たな葉が芽吹いた木が目の前にある。

「エー、この問題が分かる人イマスカ？」

ジバコイルは先生は特徴的な喋り方をするので、初日でのインパクトは凄かった。しかし、それに比べて授業自体は平凡そのものなので、初日以外は生徒へのウケは良くなかった。

「あー眠い。何で5時間目に数学なんだよ……」

と、思っていた矢先、ムウマがサイコキネシスでこちらに紙を回してくる。

「ん？　何々……」

『数学眠いよ……。チルタリス』

『僕も同感♪　ブースター』

『これみんなに回そっか。ムウマ』

どうやら、チルタリスから始まった伝言用紙らしい。自分の思ったことでも書き込めばいいのだろうかとかピカチュウは考え、とにかく今思っていることを書いて、ムウマに紙を挙げてアピールした。

「了解」

ムウマはそう短く言つと、サイコネシスで次の席の人に回す。次はサンダースだった。

「何だこれ？」

もう眠いというより寝ていたサンダース。思いつき紙をぶつけられ目を覚ました。

「何々……。なるほど、そう言うことが」

サンダースもこの展開が分かったようで、紙に書きこんでいく。ちなみに、四足歩行のポケモンもイスに座って前足を使い勉強する。その様子は一部の女子からは可愛いと言われているとか……。

「書いたのね、それじゃあ回しましょ」

ムウマがサイコネシスでチルタリスの方に紙を持っていく。この5人で文通するようだ。

チルタリスの席は前の方にあり、先生に見つかりやすい。そんな中、よくこういうものを始めたなとかピカチュウは思うのだった。

「もう回ってきたの？ 何々、……ぶっ！」

チルタリスが吹き出す。

「サンダース何を書いたんだ？ チルタリスが吹いたぞ」

「ドウしました？ チルタリス君？」

その様子に気づいて、ジバコイル先生が声をかける。

「え？ いや何でもないです……」

その後、ジバコイル先生は怪しくチルタリスのことを見つめていた。結構な時間がたつと、さすがに時間の浪費だということに気づき、何もなかったかのように授業を進め始めた。

「危ない危ない……」

チルタリスは、先生の目が黒板に移った時を見計らって紙に素早く書き込んだ。その後、チルタリスも紙を挙げると、ムウマがサイコネシスでブースターに飛ばす。

ブースター、ムウマも書き込み、ピカチュウの所に紙が回ってきた。

「何々？」

『取りあえず面白いこと書こうよ。ピカチュウ』

『そういうのはダメだ……。サンダース』

『サンダース、この紙によだれ付いてるよ……。チルタリス』

『本当だ、サンダース汚いよ。ブースター』

『この紙はピカチュウが処分してね。ムウマ』だと……」

確かに紙の右端によだれがべつとりと付いている。なるほど、チルタリスはこれを見て吹き出してしまったのか。

普通なら処分はサンダースに任せるだろう。しかし、ムウマがこの紙を回していて、ムウマに処分するよう言われたのだからピカチュウが処分するほかない。

「チクショー！ 何で俺が……。！ まあ、怒ってもしょうがないし新しい紙を出すか。ノート1枚あれば十分だよ……。それで、こう書きこんでと」

ピカチュウは紙に『サンダースのバカ！ よだれついてるじゃん！ 新しい紙に変えといたよ』と書き込み、ムウマにアピールした。

「ありがと。ピカチュウ」

そう言ってサイコネシスでサンダースの席に紙を飛ばす。

「えっ！ マジか……」

サンダースは酷く落ち込んでいるようだった。その後、何かを書き込みチルタリスに回す。

チルタリス、ブースターも同じように書き込み、ムウマに順番が回ってきた。ムウマは鉛筆などは持てないが、最新技術を駆使した脳波を読みとり思った事を書き込める鉛筆がある。手のないポケモンには無料で支給されるが、手のあるポケモンには支給されない。市販のものは最新技術を使っている為とにかく値段が高いのだ。

「あ……」

ムウマが何かをしでかしたような顔をする。その後、何を思ったのかは知らないが、ピカチュウに向けて紙を投げてきた。紙はそのままピカチュウの後頭部に直撃する。

「痛っ！ 紙落ちちゃったじゃんか……。面倒だなもう！」

そう言いながらも紙を拾い上げるピカチュウ。そこにはこう書かれていた。

『ごめん……。最近疲れすぎて……。サンダース』

『部活忙しいもんね。チルタリス』

『陸上ってそんなに大変なの？ ブースター』

『大変みたいよ。後、サイコネシスのPPが切れちゃったから、もう私は回せないわ。ムウマ』

「そうか、ムウマのサイコネシスってPPは10だっけ」

ピカチュウは『これから投げて回すからね。はずさないように！』

と書き込み、サンダースの席に届くよう後ろに下投げで投げ飛ばした。

「うお？ 何で飛んできたんだ？」

サンダースは取りあえず紙の中を確認する。読み進めるうちに、みるみる顔が青ざめていった。

「え？ サンダースどうしたんだ？」

「やるっきゃないか……。それっ！」

サンダースが投げた紙はチルタリスの席を通り過ぎ、ジバコイル先生の前まで飛んでいく……。

「ナンですか？ コレは」

ジバコイル先生が紙を確認する。そこにはピカチュウ、サンダース、チルタリス、ブースター、ムウマの名前が書いてある。

「コノ紙に名前が書イいてアル人は、授業が終わったら廊下に来て下さい」

サンダースとブースターはため息をついている、この二人にしか事情が呑み込めていないようだ。

「ねえ、ブースター。何でサンダースはあんな暴投をしたの？ 僕より投げるの下手だよな」

疑問に思ったチルタリスが、小声でブースターに質問する。

「実は、サンダースって陸上以外はあんまり出来ないんだ。陸上部だから運動神経がいいって勝手にいつも思われるからね。サンダーズとしてはいい迷惑みたいだよ」

「へえ。僕も運動神経が良いと思ってたよ」

チルタリスは納得した様子だ。

「なるほど。これはネタになるわね。今度でも調査しましょう」

どうやって聞いていたかは分からないが、小声で話していた二人の会話を席の一番後ろにいたムウマが聞きとる。

「それでは、今日はこの辺で授業を終わります。例の5人は、廊下二来て下サイ」

ジバコイルがそう言いきると、それを待ち構えていたかのようにチャイムになる。

「はあ。行くっきゃないか……」

ピカチュウ達はしぶしぶ教室から出ていく。

その後、こっぴどく叱られた。そして、叱り終わると同時にチャイムになる。ピカチュウはどうしてこのジバコイル先生は時間が分かるのだらうと思った。

ピカチュウ達は教室に戻る。他の生徒から何をしたのかとか聞かれたが、あえてノーコメントを貫いた。

「あゝ！ 終わった！」

「サンダースのせいじゃん。本人がそんなこと言わない」

サンダースにさり気なく突っ込みを入れるブースター。

「というかもう次の時間ね。今日は理科だったはずよ」

若干2名のテンションが上がる。サンダースとチルタリスだ。

別に、二人が特別理科が好きという訳ではない。しかし、その担当の先生が大変気に入っているらしく、毎回毎回テンションが上がるのだ。

「俺にはあの先生のどこが良いのか分からないけどなあ」

「私も同感だわ。だって、あの先生……」

ムウマが言い切るよりも先に、その問題の先生がやってくる。

「それじゃあ、授業を始めます、皆さん、教科書の10ページを開いてください！」

ここまでではいたって普通の授業だ。しかし、この『セレビィ先生』の恐ろしいところはこれからだ。

「あれ？ ここはもうやったね。それじゃあ11ページかな？」

「せんせーい！ そこもやってあります」

とあるポケモンがそう叫ぶ。

「あれ？ あれれ？ それじゃあ12？ 13？ それとも15？」

この先生は、物忘れが非常に多く、それに加えて天然という二つの要素を持っている。更に、その容姿が天使のように可愛らしいとなれば男子生徒に人気が出るのは当然と言えるよう。

「このクラスは14ページからだたと私は記憶しています。間違っていたら申し訳ありません」

堅苦しい口調でミュウがページ数をセレビィに伝える。

「14ページからね」 それじゃあ、始めるよー！」

このような感じで授業が続く。まだ薬品を使った実験などはしていないが、するならば他の先生にもついてきてほしいと思っている生徒は多数いる。何故なら――。

「今からプリントを配ります！ あれ？ 持ってきてなかったけ？」

「ここは大事ですからねー！ あ、違う違う。ここじゃなくてそっちが大事だからねー！」

「えーと。この問題は……。どうやるんだっけ？」

……。お分かりいただけたであろうか。普通の教師ならまずクビになってそうだが、生徒からの強い願望と、ルギア校長の権力で教師が続いている。

そんなこんなで理科の時間も終わり、帰りのホームルームも終了した。まだ仮入部は続いているので、これから仮入部だ。

「ピカチュウ君！ 仮入部はどこに行くの？ 僕はブースター君と一緒に吹奏楽部行こうと思ってるけど」

ブイゼルは吹奏楽部に入る決心がついたようだ。

「俺？ ラティオスさんから聞いたけど、囲碁・将棋部が楽な部活だって聞いたからそこ行ってみるよ」

「そう……。分かった！」

一瞬悲しそうな顔をしたブイゼルだったが、すぐに元気になり、ブースターと一緒に廊下を駆けて行った。

「よし！ 俺も行こっかな」

ピカチュウも教室を後にして、囲碁・将棋部の部室へ急ぐのだった……。

授業中…　　く数学はとにかく眠いーく（後書き）

ピカチュウ「またインパクトのあるキャラが二人も……」

ムウマ「これから更にピカチュウの影が薄くなりそうね」

リーフィア「まあ、私には敵わないけどね！」

ブイゼル「リーフィア先輩はもう少し自重した方がちょうどいいと思います」

リーフィア「うるさいわね！　食らいなさい、葉っぱカッター！」

ブイゼル「いたっ！　怒っても葉っぱカッターを飛ばさないでくださいよ……」

ブイズ家主催のパーティ！？

今日は土曜日。つまり学校は休みである。

部活がある所はあるかもしれないが、まだ仮入部期間で本格的にスタートした部活はない。

つまり、今日は生徒達が全員集まれるかもしれない日なのだ。

「で、俺にも来てほしいと。そう言うことだね」

電話をかけてきたサンダースに最後の確認をとる。

「ああ、お前とムウマが面白いのはこの前の授業で知ってるし、ブイゼルはブースターがどうしても言うから」

「分かった。待ち合わせは二人を連れてブイゼルの家の前にいればいいんだよね」

「そうそう。迎えに行くから。それじゃあよろしくな」

そう言っでサンダースは電話を切る。

「ふー。でもこういう風の吹きまわしだ？ 急にパーティを開くって」

ピカチュウは、サンダースにパーティに誘われたのだ。しかも、一人じゃなくてムウマとブイゼルも。

「どうでもいいか。それじゃあムウマから迎えに行くか」

そう言ってピカチュウは家を出た。まだ朝早くなので日差しが気持ちいい。小鳥のさえずりもどこからか聞こえてくる。そんなさわやかな朝だった。

「ピカチュウ。待ってたわよ」

家から出た先には何故かムウマが待機していた。パーティの準備を済ました状態で。

「何でいるんだよ！ まだ連絡してないじゃん」

「だいたい想像はついてるくせにいっ」

ピカチュウの想像はこうだ。うちの家にはムウマがいつの間にか取り付けた盗聴器があり、それを聞いて準備してピカチュウの家まで来た。ちなみに、ムウマの家は徒歩1分もない。

「盗聴器でも家の電話に仕掛けたんだろ？ ここまで来ると本物のストーカーだぞ」

「ご名答。でも“ストーカー”じゃなくて“調査”だから。勘違いしないでね」

「どっちも同じだろ！」

そんな会話をしながらブイゼルのうちの前までやってきた。ピカチュウはインターホンを鳴らす。ムウマが扉をすり抜けて入ろうとしたのは秘密だ。

ドアを開けてブイゼルが出てくる。半分寝顔だった。

「どちら様ですか？ あ、ピカチュウ君。どうしたのこんな朝早くに」

「説明はあれに乗ったらする。車で来るなんてサンダースもいいことするじゃん」

ピカチュウが指さす方向にはいつの間に来たのだろう。ピカチュウは車と勘違いしたが、高級そうなリムジンがあった。ブイゼルの家の前に止まっていて、そこから一匹のポケモンが出てくる。サンダースだ。

「よお！ 早く乗れよ。ブラッキーの所に行くぞ！」

「え、ちょ、え？ リムジンだったの？」

「リムジン……。初めて見たわ。これ触ってもいい？」

「朝からドッキリなの？」

各々思い思いの言葉を発する。上から順にピカチュウ、ムウマ、ブイゼルだ。

「あつ、そうか。まだ紹介してなかったな。俺の従兄にブラッキーもいるんだ。そいつがかなり金持ちでな。リムジンもあいつが手配してくれた」

「なるほど。ブースターさんの従兄だから、サンダースの従兄でも

あるのね」

ムウマがリムジンにぺたぺた触りながらそう言った。表情は嬉しそうだ。

「あはは……。そんなことより早く乗れよ」

「そうだね。行こうか」

ブイゼルが了承してリムジンに乗り込むと、それにつられて二人も乗り込んだ。リムジン内は空調が整っていて快適だ。周りにイスがあり、真ん中にはテーブルまで用意されている。

「ブースターの所にもよるからな。それと、シャワーズちゃんとラティアスちゃんの所にも」

サンダースが席に着くとリムジンが発進する。運転しているのはエルレイドというポケモンだ。

「ピカチュウ君。今のうちに詳しく説明して」

ブイゼルは何がどうなっているのか分かっていないようだ。

「いいよ。今日、朝早くにサンダースから電話があつたんだ。『ブラッキーさんの所でパーティを開くから、ピカチュウもムウマとブイゼルを連れてきてくれ』って。それで、ここに至るわけ」

「なるほど。あ、そろそろブースターの家じゃないかな？」

「何でブイゼルがブースターさんの家を知ってるの？」

ムウマが不思議そうに訊ねる。それに対して予想外な答えが返ってきた。

「一回お邪魔したことがあるから」

「へえ、一回お邪魔して…ってちょっと待ちい！」

ピカチュウが叫ぶ。ムウマも叫びそうになったが、ピカチュウが先に叫んだので叫ばなかった

「え？ 何か問題でも？」

「いや、問題はないんだけど、いつの間に二人はそんなに仲良くなつたの？」

「そりゃあ同じ部活だし、男子が僕とブースターだけでしょ？ だからすぐ仲良くなれたんだ」

——そう言えば、ブイゼルって吹奏楽部だった。忘れてたよ——

ピカチュウは軽く相槌をうち、世間話を始めようと思った矢先…。

「いやっほー♪ ブラッキーの所に行くのは久しぶりねえ」

「お姉ちゃん、はしゃぎすぎ……。あ、ブイゼル。おはよー」

そこにあのリーフィアとブースターがやってきた。

「うん。おはよう、ブースター。それと、おはようございますリー
ファイ“先輩”」

「おはよう！ やっぱリーバイゼン君は礼儀がなってるわねえ」

「いやいや、当たり前ですよ」

すっかり部活に溶け込んでいるリーバイゼン。ちょっぴりうらやまし
いとピカチュウは思うのだった。

「私もいいのよね？」

「私も参加するですわー！」

「僕も行くよー！」

後ろから聞き覚えのある声が三つほど……。

「あ、おはようございますランクルス先輩にオクタン先輩♪ それ
とフライゴンも」

「何で僕だけ後付けなの？」

リーファイアに突っ込みを入れるフライゴン。当たり前だが不服そ
うだ。

「「おはようございます。ランクルス先輩！」」

「おはよう。二人とも朝から元気ねえ」

ブイゼルとブースターが挨拶をする。

「にぎやかになってきたな。後はシャワーズとジグザグマの所だけか」

サンダースが小さな独り言を漏らす。

「ん？ ジグザグマって3組の？」

どこから聞き取ったかは知らないが、サンダースの小さな独り言に質問するムウマ。

「そうだけど。お前どれだけ地獄耳なんだよ」

「誉め言葉ありがとう」

ムウマにとって地獄耳は誉め言葉らしい。最高の笑みを見せてくれたムウマ。しかし、それとは対照的なポケモンが一人。

「やっぱり俺空気だ……」

一人リムジンの隅で落ち込んでいるピカチュウであった……。

しばらく走り続けた後、停止してドアが開いた。外から6人のポケモンが入ってくる。

「皆へ。おはようございまーす。うちも来たよ」

「調理部の部長。ラティオスも来たぞ！」

「それでね、この物語の続きなんですけど……」

「へえ、いい感じじゃない。それでそれで？」

「サンダース！ オイラも遊びにいくつす！」

「僕も誘われたんだけど、いいのかな？」

上から順に、シャワーズ、ラティオス、ラティアス、グレイシア、ジグザグマ、チルタリスである。こんだけのポケモンが乗っても、このリムジンは窮屈感を感じさせない。

「よし！ 全員そろったな。それじゃあ、今からパーティ会場に向かうぞ！」

「イエーイ！！」

全員の声がハモる。後は世間話をしたりしてピカチュウも楽しくリムジンの中で過ごすことができた。

「着いたぞ。前にいるのから順番に降りてくれ」

全員降りたピカチュウ達。目の前にあった建物は、どこか中世的な雰囲気を出すお城だった。庭にはバラの花が植えられており、高級感が出ている。

「現代でお城が見れるなんて！　ちょっと写真撮らせてもらっわよ！」

ムウマはお城を見て興奮している。どこからカメラを取り出したのかは分らない。

「あれ？　またデザイン変えたの？」

「どうやらそうみたいだな」

「確かに。前来た時はお屋敷だったもんね。いつの間にお城にしたんだろ」

前からここに来たことのあるリーフィア達は、デザインが昔と変わっていることに気がついた。

「ようこそお越しくださいました。私は執事のエルレイドと申します。以後お見知りおきを」

執事であるエルレイドが挨拶をした。この仕事を始めて長いようだ。動作が手慣れている。

「それでは皆様を客間へのご案内致します」

エルレイドを先頭に客間へ行くピカチュウ達。その間、ブイゼルがブースターに質問する。

「ねえブースター。ここには何があるの？」

「ん？　えっとね……。とにかく何でもあるよ。例えば屋内プール、

映画館、運動施設に中庭、コンピュータールームや図書室に加えて、楽器も置いてあるんだよ！」

「へ？ それホント？ 嘘じゃないよね？」

ブイゼルが聞き返す。あまりの現実味のなさで信じられなかったようだ。

「本当だよ。僕も初めて来たときは信じられなかったけど」

「到着いたしました。こちらが客間となります。どうぞ中でおくつろぎください」

ピカチュウ達はお言葉に甘えて中で休ませてもらうことにした。

客間にはたくさんの絵画が掛けられていたり、いくらするか分からないような置物がたくさん置いてある。それに加えて高級そうなクラシックが流れている。数分がたった後、このパーティの主催であるブラッキーが出てきた。

「みなさん、待たせてしまいましたか？ 私はブラッキー。今回のパーティの主催を務めさせていただきます。それでは軽い自己紹介でも。年齢は13才。大学院の1年生です」

「あ、ここでまた補足が必要ね。こちらの世界には飛び級制度があって、頭さえよければどこまでも上にいけるの。飛び級だけでなく落第もあるからね。年齢だけでは何年生かは分からないの」

「リーフィア、補足ありがとうございます。ちなみに私は音楽が好きで、ユーフォニウムという楽器を吹いています」

「更に補足ね。——ユーフォニウム。知らない人もいるんじゃないかしら。説明が難しいんだけど、チューバって楽器が分かるなら、それを少し小さくした感じの楽器だと思ってくれればいいわ。音の高さはトロンボーンと同じくらい。メロディも伴奏も両方できるおいしい楽器なのよね」

これでブラツキーの自己紹介が終わった。リーフィアがちょっと出すぎた感じもあるが。

「うるさいわね！」

「パーティを始めるのは午後の5時から。それまではこの城を好きに歩きまわっていていいよ」

「はい」

みんなの声がハモる。今回はムウマとブイゼルの声がやけに大きい。現在の時刻は午前10時だ。

「私はこの城を捜査してくるから、そうだ、ゲンちゃんたちにも連絡しよ！」

そう言ってムウマは向こうの壁の中に消えていった。

「ブースター、音楽室行こうよ！先輩達も一緒にどうですか？」

ブイゼルは、吹奏楽部のみんなに訊ねる。

「僕行くよ！ここの楽器は質が良いし」

「私はもちろんいくわ!」

「私も行く。私がいなきゃパーカッション誰もいないでしょ?」

満場一致で、吹奏楽部の四人は音楽室に向かった。

「ジグ。トレーニングするか!」

ジグと呼ばれたのはさっきのジグザグマである。彼のあだ名らしい。

「もちろん! サンダースも早く来るっすよ!」

ジグザグマは既に走っていた。サンダースも急いで後ろを追いかける。

「私たちも行こうかしら? どうしますフライゴン?」

「ここにはパソコンルームもあるんでしょ? それ使いましょうよ」

フライゴンは敬語とタメが混ざったような喋り方をする。最近までオクタンとはタメで喋ってきたが、同じ部活になったことにより敬語を使うようになったのだ。

「あれですわね! 分かりましたわー!」

二人はコンピュータールームに何かをしにいった。

「うちもパソコン使いたいから、ついてこ」

シャワーズもオクタン達について行った。

「ラティアスちゃん。さっきの小説の案。今のうちにまとめておきましょう」

「そうですね。 그레이シア先輩！」

二人もコンピュータールームに行くようだ。

取り残されたのはピカチュウ、チルタリス、ラティオスの3人となった。

「ラティオスさん。料理部の部長さんですよね？」

「違う！ 調理部の部長だ！」

「どっちでもいいじゃん！」

ピカチュウの意見はごもつともだが、ラティオスには通用しなかった。

「どっちでもよくない！ 俺は“調理部”の部長なのだ！」

「はあ、分かりました。調理部部長のラティオスさん。何か作ってください」

ピカチュウがラティオスに注文する。ピカチュウも朝食は一応食べ歩いてるが、もうお腹がすいたようだ。

「お安い御用だ！ 俺の腕前をってみろ！」

こうして3人は厨房へ向かうのだった……。

ブイズ家主催のパーティ!? (後書き)

ピカチュウ「今回は登場キャラクター多いな……」

ムウマ「それでピカチュウの空気っぷりが思いっきり出てるわね」

ピカチュウ「それを言うなあ!」

ブイズ邸で大暴れ！

音楽室に着いた。ここの音楽室は学校の音楽室の倍はある。とにかく大きいところだった。そんな光景を見て興奮したブイゼル達は、早速楽器を触り始めていた。

「すごい！ 同じクラリネットのはずなのに音が全然違う！」

ブイゼルがやっている楽器は、楽器紹介でも触らせてもらったクラリネットという楽器である。クラリネットパートには、ブイゼルのほかにリーフィアも所属している。

「そりゃあ値段が桁違いだからね。ひとつ30万円くらいかな」

リーフィアがさらっと凄いのを言う。ちなみに、学校のクラリネットは一つ5万円くらいのものだ。

「30万円ですか！？ 通りで音が出やすいんですね」

さつきからみんな思い思いの楽器を触って吹いたりしている。ブイスターはトランペット、ランクルスはパーカッション（打楽器の総称）だ。

「お、やっぱりここいたのか」

ブラッキーが扉から入ってくる。

「あ、ブラッキーも来たわね。それじゃあ何か楽譜貸して。皆で合奏するから」

リーフィアがここに来たのはこれが目的だったようだ。

「……別に私は構わないけど、人数が足りないんじゃない？ チュ
ーバもないし」

ランクルスが心配するが、リーフィアに代わりブースターがその
疑問に答える

「心配ご無用ですランクルス先輩。ブラッキーの凄いところはここ
ですから」

「そういうことか。分かった、メンバーを集めてくれ！」

ブラッキーが執事のエルレイドに無線で声をかける。しかし、全
員集めるには後30分はかかるらしい。

「仕方がないな。それまで音出ししてていいぞ」

その頃、コンピュータールームでは――

「申し訳ありません。説明の途中でしたが、ただいまブラッキー様
よりご連絡を承りましたのでそちらを優先させていただきます。ま
ことに申し訳ありません」

パソコンの説明の途中で連絡が来てしまったエルレイド。深々と
お辞儀をしながらドアの向こうに去って行った。

「行っちゃった……。どうする？ オクタン先輩」

「面倒ですからタメか敬語で統一してほしいですわー！」

「それじゃあタメにする」

フライゴン達は、新入部員に説明するのに必要なプリント作りをしていた。まだ正式な顧問が決定していないので、こういうことは二人がやる必要がある。

「えーっと。まずはこの部活の特徴だね。特徴として、ハンドボールをやる人と卓球をやる人に分かれてもらうんだよね」

それじゃあ何故合併したのか突っ込みたくもなるが、どちらの部活も存続がかっていたので、それどころではなかったのだ。

「そうですね。それと、ハンドボールも卓球も素早いポケモン、飛べるポケモンが有利ですわね」

「そうそう。飛べればいくらでもボールを持って動けるからね。ちよっとせこい気もするけど」

ハンドボールは、バスケットと同じでドリブルしながら進む。4歩以上歩かなければいいというルールなので、飛んでいればカウントされないのだ。

何故卓球は空を飛べると有利なのだろうか。それは、飛んできたボールがどこに来ても対応できるからである。

「そう言うことですね。早く完成させるのですわー！」

「オクタンも少しは手伝ってよ！」

グレイシアとラティアスは、さっき浮かんだアイデアをプロットにまとめているところだ。

「ここはどうしましょう？ グレイシア先輩」

「ここは保留でいいわね。すぐ変更できる箇所だし」

カタカタと軽やかなリズムでキーボードをたたいていくラティアス……ではなくシャワーズ。

「ごめんねシャワーズ。面倒なこと引き受けさせちゃって」

「いいいいいよ。うちも勉強になるし」

シャワーズはラティアスがキーボードを一つ一つ押していく姿を見て、代わりにやると言いだしたのだ。

シャワーズは何故かキーボードを打つのがとても速く、グレイシアでさえその腕前には舌を巻いていた。

「本当に早いわね。どうしたらそんなに早くなるのかしら？」

グレイシアは小悪魔的な笑みを浮かべる。どうやらシャワーズをからかうつもりようだ。しかし、画面をずっと見ていて、それに気づいていないシャワーズ。

「うー？ えーっと、某掲示板サイトとか某動画投稿サイトでコメ

ント打ってるうちに早くなつてったよ」

「ふーん。どんなコメント書いてたの？」

シャワーズにグレイシアの言葉が刺さる。目では見えないが、心には深い傷が出来てるだろう。

「えっ、え、え、ええと！ 普通の！ 普通のコメント書いてたよ！」

シャワーズは明らかに動揺している。

「怪しいわねえ。小学生が書くコメントなんかたかが知れてるじゃない。どうせ、あんなことやそんなことでも書いてたんでしょ」

シャワーズから汗がにじみ出てくる。もしこの場に水があれば溶け込んでいただろう。

「うつ！ あ、ごめんラティアス！ うちプール行ってくるから！ それじゃね〜」

シャワーズは逃げるようにコンピュータールームを後にした。

「逃げられたわね。つまんないの」

グレイシアは大分腹黒くなっている。

「それじゃあキーボードどうしましょう？」

「あ、それならフライゴンにやらせるわ」

そう言って、フライゴンの方に近づいてくグレイシア。先程の一件があつたばかりなので何をしでかすか分からない。

「フライゴン」 ちょっとキーボード打ってくれない？」

「僕は今忙しいのでダメです」

否定の言葉を聞いた瞬間、グレイシアの声のトーンが変わる。まるで天使から悪魔にでも生まれ変わったかのような。

「吹雪。食らいたい？」

皆さん知っていると思うが、フライゴンはドラゴン・地面タイプ。氷タイプの技、吹雪は効果4倍である。

「それはさすがに……」

引き気味のフライゴン。誰だって効果抜群の技なんか食らいたくない。

「それじゃあ、キーボードよろしく」

また元の声に戻ったグレイシア。

「……しょうがないですね。少しだけですよ？」

そう言い、今まで作ってきたファイルを上書き保存しておく。

「オクタン！ 僕急用が出来ちゃったからトレーニングでもしてて」

オクタンは非常に機械音痴なため、電子機器はほとんど扱えないのだ。パソコンはもちろんのこと、ケータイ、電子レンジ、プリンター、更には電卓までもが扱えないというから驚きである。

「分かりましたわー！ サンダーズ君達と一緒にトレーニングしてまいりますわー！」

そう言ってさっさとコンピュータールームから出るオクタン。

「それじゃあよろしくねフライゴン！」

フライゴンは次の日は激痛で指が動かせなくなるなどと思ってもらえなかったのであった……。

同じ頃、とある部屋の中――

「ムーちゃん！ 呼んでくれてありがとうね」

そこにはゲンちゃんことゲンガート、ムーちゃんことムウマがいた。

「いえいえ。それより調査しましょう」

完全に先輩後輩が無くなっている。それが捜査部のいいところであるのだが。

ムウマ達はブラッキーの城を散策していた。今は『立ち入り禁止』

と書かれたプレートがかけられている部屋の前にいる。

「ムーちゃん。入る？」

「あつたり前よ、こんな怪しいところ入らない理由が無いじゃない」

そう言つて扉を開けようとするムウマ。しかし、鍵がかかっているようで開けなかった。

「しょうがない。ムーちゃん、壁抜けするよ！ 本当はこういふことすると不法侵入だけど」

「ゲンちゃんはブラックキーさんの許可なしにこの城に入っているし、もう心配する必要はないでしょ」

つまり、ゲンガーはここに入らなくても入っても不法侵入なのだ。

「じゃあ行こう！」

ゲンガーの掛け声で二人とも中に入つて行つた。

中は水道管がたくさん詰まっているだけの面白くない部屋だった。

「なんだ。つまんないの」

ムウマはもつと面白いものを期待していたようで、落胆の声をあげている。

「ん？ あそこ。何か詰まってるかも」

「え？ 何でそんなことが分かるの？」

ムウマが不思議そうに訊ねる。

「この能力のこと？ 俺の目は透かしたいものを透かして見ることのできる特殊能力が昔からあったんだ」

「へえ、良いなあ」

ゲンガーが指さす先は、プールの下水道だった。

「えーと。この形は……、水に何か生き物が溶けてるね。それもポケモン」

ムウマはそれで分かった。この中に誰がいるのかも全て。

「ゲンちゃん。そのこのハンドルを回して。そうするとここの蛇口からあの水が出てくるはずだから」

「オッケー」

ゲンガーは軽く返事をし、ハンドルを回し始めた。回し終わったらその水に向かって声をかける。

「シャワーズちゃん。流れてきて大丈夫だよ」

取りあえず声をかけてみたムウマだったが、移動している気配が無いのもう一度声をかけてみる。

「大丈夫だよ。蛇口も開けてあるから。そこから出てこれるよ」

今度は流れてきてくれたようで、蛇口から水があふれてくる。そして、その水の中に溶けていたであろうシャワーズも出てきた。

「はあ。川まで流されるかと思った」

「何で、シャワーズちゃんがこんなところにいるの？」

ムウマは気になったことは何でも聞くタイプだ。例えばそれがどんな些細なことでも。

「えーっとね、うち、プールで泳いだの。そのうち調子に乗って水に溶けたら排水溝に入っちゃって。それで流れてここまで来たの。本当は川まで流れていくつもりだったんだけど、ムウマちゃん達の声が聞こえたからここで止まってみたんだ」

シャワーズの説明に納得するムウマ。

「それよりムーちゃん。お腹すかない？」

「あなたに出せるものはありません！」

ムウマの意見はごもつともだ。このゲンガーは影に入り込んでここまでやってきたのだから、完全に不法侵入だ。

「え。それじゃあ、そのブラッキーだっけ？　の所に行こう。俺も招待されたってことで」

勝手に話をまとめるゲンガー。

「しょうがないわね。確か音楽室にいたはずよ」

「行こ行こ。うちもブラッキーの演奏聞いてみたい」

こうして3人は音楽室へ向かうことにした。

もしかしたら存在を忘れられていたかもしれない、トレーニングをしていたサンダース達は――

「疲れたあゝ。もう無理。というかこの中庭どんだけ広いんだよ！」
「広いつすねえ」

サンダースとジグザグマはその場に倒れ込む。

サンダース達が走り込んでいたのは中庭だ。しかし、中庭と言われなければ中庭だと分らないくらい広かった。これだけ広くてもお城の三割もないというのだから更に驚きである。

「あら？ 皆さんもうくたびれましたのー？」

「オクタン先輩が来る前からずっと走ってましたから……」

一方オクタンだけはまだまだ元気だ。

その時アナウンスが聞こえてくる。声の主はブラッキーだった。

「これから音楽室で私達の演奏を行います。興味があつたら是非

来て下さい」

「演奏かあゝ。ブースターも出てるんだろうなあ。よし、ジグいくぞ！」

「行くっすゝ！」

サンダースとジグザグマは音楽室へ向かって行った。

「サンダース。ひとつ聞いて良いっすか？」

ジグザグマことジグが走りながら聞いてくる。

「なんだ？ 別にいいけど」

「あの、その、リーフィア先輩ってどんな感じっすか？」

「リーフィアあ？ そうだな……。騒がしくて元気ハツラツって感じだな。一緒にいればとにかく飽きはしないぞ」

「へえゝ。あ、別に深い意味はないっすからね！」

ジグザグマはああいうことではないと否定するが、サンダースはもうとつくに気付いているようだった。

音楽室についたサンダース達。普通は静かにはいっていくが、サンダースは勢いよく扉をあける。

「来た来た！ サンダース！ 今から演奏する所！」

サンダース達の他には、ムウマ、ゲンガー、シャワーズ、グレイシア、フライゴン、ラティアスが来ていた。

「ピカチュウは来てないのか。せっかくブイゼルが演奏するのに」

サンダースは少し残念そうな顔をする。

「なにはともあれ、これからブイズオーケストラの演奏を始めます。礼！」

指揮者のエルレイドが礼をする。演奏するメンバーはリーフィアにブースター、ブラッキー、ブイゼル、ランクルス。それにエルレイドがたくさん……。

「ちよいと待ってくれ！ エル……」

言い終わる前に合奏を初めてしまったエルレイド。曲目は誰でも知っているヘルガー作曲の『威風堂々第1番』だ。

音はとてもきれいなのだが、ヴァイオリンを演奏している20人全てがエルレイドなので迫力がありすぎる。はつきり言っただけかなり怖い。

ランクルスがやっているパーカッションは、念力でスティック（太鼓のバチみたいな奴とか、ビブラフォンをたたいた奴）を浮かせ、一人で全ての打楽器を演奏している。これもかなり迫力がある。

一方リーフィアとブイゼルのクラリネット。ブラッキーのユーフォニウム、ブースターのトランペットは、エルレイドが目立ちすぎていたためあまり目立たなかった。

あつという間に合奏が終わってしまった。

「皆様ありがとうございます！ サンダース様。何か質問でもありましたか？」

先程いいかけたことを口にするサンダース。

「いや、少しエルレイドサンが多すぎるかなって思っ

エルレイドはそれを聞いて納得したような表情をする。

「その事でしたか。これは技『身代り』で生み出された幻の私です」

エルレイドが指を鳴らすと分身たちは一斉に消えてしまった。

「そうなんですか？ でも何でそんなにいっぱい？」

その質問にはムウマが答えた。

「身代りを一回使つと2人に増えるじゃない？ 次はその二人が身代わりを繰り返し出すの。これで4人になったでしょ？ 後は分かるわよね？」

サンダースも後は説明されなくても分かった。分身がどんどん分身を作りだしていく。これだけで数はものすごことになるのだ。

「お分かりいただけたでしょうか？ おっと、そろそろ5時になりますね」

壁に掛けられていた時計を見ると、すでに長針が真上を指そうと
している。

「それでは私は残りの皆さまを連れて食堂に参ります。食堂へは私
の分身が案内します」

エルレイドの身代りは全然身代りっぽくなかった。普通に会話も
でき、表情まで変えるのである。

「到着いたしました。こちらが本日の会場となります。食堂で御座
います」

そう言つと、エルレイドの身代りは光の粒子となって消え去つた。

「やっと始まりね。今まで長かったわ」

ムウマの言つとおりである。

「ん？ あ、みんな、来たの？」

扉を開けるとそこにはピカチュウ、チルタリス、ラティオスがい
た。その三人の周りには汚れたお皿がいっぱい……。

「ごめん。ブラッキーであつてるよな？ 実は、料理しすぎてここ
の食材全部使ってしまった。悪いな」

ラティオスはそう言つて巨大な冷蔵庫の中を見せた。

「確かに。全て無くなっている」

ブラッキーは一つも驚いたようなことはせず、ただ冷蔵庫を眺めているだけだった。

「料理はどこに行ったんだ？ まさか全部炭になったわけではないだろう？」

「それはだなあ、そこにいる二人に聞くといい」

ラティオスはピカチュウとチルタリスの方を指さす。

「まさか？ いやそんなはずはあるまい。あの量を食べつくすなんて」

「そのまさかです」

チルタリスが軽くウィンクをする。一同の怒りパロメーターが上がったのは言うまでもない。

「あはは、やつちゃった」

「やつちゃったじゃねえよ！」

全員がピカチュウに突っ込んだ。

「えー、食糧がないのでこのたびのパーティは中止させていただきます！ 誠に申し訳ありませんでした」

「マジで！？」

そう言ってエルレイドとブラッキーは逃げるように消えていった

……。

後日談となるが、今後のパーティには食糧の大量確保がメインとなったそうだ。全く罪深い奴である。

ブイズ邸で大暴れ！（後書き）

報告

『TIPS1：ピカチュウ君とブイスター』がこの話以後にあったものです。ピカチュウ達の舞台裏よりご覧ください。

後書き

ピカチュウ「今後はパーティ無いの？」

ブイゼル「あるんじゃない？」

ムウマ「あんたが食べ過ぎなきゃ流れなかったわよ」

リーフィアの一日　普通の学園物になってしまった（前書き）

リーフィアの葉っぱカッター！

痛っ！　いきなり何してんの？

リーフィア「サブタイの普通の学園物になってしまったってなんなのよ！　これって普通の学園物でしょ？」

いや、基本ギャグ路線を突っ走るはずの小説なのに、今回はギャグが非常に少ない。

リーフィア「あの先生が出るから問題ないわ！」

それは微妙にネタバレのような……。まあいいや。それでは本番をどうぞ！

リーフィアの一日　普通の学園物になってしまった

「ランラン♪　今日はコンビニへレッツゴー！」

ゴールデンウィーク中で浮かれているこのポケモン。お騒がせなおてんば娘、リーフィアである。

今は午前8時。部活に向かう途中、コンビニへ立ち寄るようだ。このテンションは騒音迷惑になっていると言っても過言ではないだろう。

「何を買おっかな？」

眺めているのはパンコーナー。どうやら小腹が空いたようで、少し腹ごしらえをしようとコンビニまで足を運んだらしい。

「これにしよう」と

そう言いリーフィアが売り場から持ち出したのはメロンパン。メロンのような網目模様がついているだけのメロンパンではなく、見た目は緑で、味もメロンの味がするという画期的なメロンパンである。

それを持ってレジへと急ぐ。前など確認せずに浮かれて回転なんてしているものだから、目の前の人とぶつかってしまった。

「あつ、すいません……アレ？」

そこにいたのはリーフィアと同じ部活のブイゼルと、その親友で

あるピカチュウだった。

「こちらこそすみません……」

「怪我とかないですか？」

どこかよそよしく話しかけてくる二人。そんな言動にリーフィアの目が光る。

「君達つてブイゼルとピカチュウだね？ 何でそんなによそよそしいの？」

「すみません。僕たち急いでいるんで」

逃げるように去る二人。そんな行動をリーフィアは変だなと思いつつも、お腹がすいていたので取りあえずメロンパンを買うことを優先した。

「これください」

そう言い、店員のガブリアスにメロンパンを渡す。……このガブリアス、どこかで見たことがあるのは気のせいだろうか？

「136円になります」

財布からお金を取り出そうと必死のリーフィア。床に財布を置かないとお金を取り出せないの、どうしても時間がかってしまう。

「ありがとございましたー！」

なんとかお金を取り出し、メロンパンを買うことができたリーフ
ィア。

すぐに出口まで直行し、そこら辺でメロンパンの袋を開ける。ビ
ニール袋はそこら辺にポイ捨てしてきた。

「おいしそう」

目を輝かせながらメロンパンを貰っすぐ見つめるリーフィア。そ
れから一瞬もしないうちにメロンパンをほおぼる。

「うん！ やっぱおいしい」

メロンパンを食べきり、ふと時刻を確認すると既に8時20分。
後10分で練習が始まる頃だ。

「うっそ！ これは本格的にやばいかも」

このコンビニは学校と離れた所にあるが、リーフィアが全力で走
れば間に合わない距離ではない。

そのことをリーフィアは知っていたので、すぐに走り出す。

「おはようございます！ 先輩方、これはセーフですか？ それと
もアウトですか？」

リーフィアが音楽室に着くと同時に時計の針が一つ進み、30分
となったのだ。

「しょうがないわね。今回だけよ？」

一応ランクルスからセーフサインがもらえて遅刻にはならなかった。

「ありがとうございます！ ランクルス先輩♪」

そう言い残し、すぐに音楽準備室に向かうリーフィア。

何故GWだということにもかかわらず部活があるのか。それは、今度季節外れのコンクールがあるからだ。

普通のコンクールは7月から8月行っ。しかし、今回出場するコンクールは5月の中旬という早い時期に開催されるのだ。

そのため、コンクールメンバーの人はGW、更には土日祝日、それに加えて朝も練習があるのだ。

「あれ？ お姉ちゃん、今日は遅かったね」

準備室で楽器を出していると、突然ブースターが声をかけてくる。

「何でブースターがここにいるの？ 今日はコンクールメンバーだけの練習じゃなかったっけ？」

「そうだよ。僕もコンクールメンバーに選ばれちゃったから」

えへんと胸を張るブースター。

「へえ、ブースターもコンクールに……。って本当に？」

普通、コンクールメンバーは3年生と上手な2年生が出場する。1年生は人数の都合上出られないのだ。

リーフィアは結構な腕を持っていたためメンバーに選ばれたが、1年生が選ばれるというのは前代未聞のことだ。

「本当だよ。それにブイゼルも出るんだ」

ブイゼル。彼はこのリーフィアと同じクラリネット担当の1年生である。確かに楽器を初めて触るにしては上手だとは思っていたリーフィアだが、コンクールに出るなら3年生が優先だ。

「3年生が出るからクラは人数足りてるわよ」

「あ、そうか。お姉ちゃん昨日休んだんだっけ」

ブースターは納得したような表情をし、うんうんとうなずいている。

リーフィアは確かに昨日体調を崩して休んだ。まさかその時に何かあったのだろうか。

「実は、今度のコンクールは人数制限なしなんだよ」

「へっ？ 制限無いの？」

リーフィアは拍子抜けしたような声を出す。それではコンクールではなく演奏会だ。

「そう言うことだから。上手い人はみんな出れるんだよ」

なるほど。リーフィアは納得する。確かに人数が多ければ多いほど音量も出るし迫力も増す。それが上手い人だけならなおさらだ。

「分かった。教えてくれてありがとね、ブースター」

「うん」

ブースターにお礼を言い、改めて楽器を取り出す。そこには黒い輝きを帯びているクラリネットがあった。

「よし！ それじゃあ練習頑張ろうっと！」

皆が出るということで気合いを入れ直す。1年生も出るのなら負けていけないと思ったのだ。

木管楽器の練習場である第2音楽室へ軽い足取りで向かっていく。

扉の前で深く深呼吸してから第2音楽室へと入る。

木管楽器といっても多種多様だ。クラリネットのほかにもフルート、サクソ、ファゴットなどがある。

そのため、練習場所を移してパートだけで練習することも珍しくない。今のクラリネットパートはまさしくその状態だった。

「あちゃー。パート練行っちゃったかあ」

この学校、前にも説明したとおりものすごく大きい。そのため、個別音楽室というものが結構な数用意されている。

クラリネットパートがよく使う個別音楽室は第3個別音楽室だ。

「しょうがない。早くいこつと」

早く練習に参加したいと思い、進む足のスピードを速めて個別音楽室を目指した。

第3個別音楽室に辿り着いたリーフィア据え付けてある防音性の窓から中を見てみる。

防音性なので中の声は全く聞こえないが、今は練習中ではないようだ。チャンスだと思ってリーフィアは個別音楽室に勢いよく入る。

「すいませ〜ん。遅れました！」

威勢よく声をあげて入ったため視線がリーフィアに集中する。しかし、リーフィアはおかしいことに気がついた。

「あれ？ 3年生と2年生は？もしかして今日来てるのって私だけ？」

吹奏楽部はとても人数の多い部活だ。その分、休む人も多くなる。1年生から「そうですよ」という声が聞こえてくる。

「ふ〜ん。だからいきなりここにいるわけね」

まず、クラリネットパートは基礎練習をする。楽器にはまだ触らず、楽器に取り付けるリードというものを吹いて音出しをするのだ。

それが終わったら楽器にリードを取り付けチューニングをする。これをしてないと合奏などのときに音程が合わなくて不協和音になってしまうのだ。

その次に楽器を使った基礎練習をする。これだけでざっと1時間はかかる。それが終わり次第ここにきて合わせたりするのだが、1年生は基礎練習の大事さをあんまり理解していないので全部飛ばしてしまったのだろう。

「すみません……」

1年生たちもリーフィアが何を言っているのか分かっているようで、先に謝罪の言葉を述べた。

「まあいいわ。それじゃあ基礎練から始めましょ」

「はい！」

元気な声で返事したのは今日コンビニで会ったブイゼルだ。丁度いいと思い、リーフィアは朝のことを聞いてみた。

「ブイゼル。今朝コンビニにいたわよね？」

「え？ 行つてませんけど……」

ブイゼルは嘘を吐く人ではない。それは1ヶ月という短い期間で

も十分に知っていた。だからリーフィアはこの意見を信じることにする。

「そう。それじゃああれは見間違いだったのね」

ブイゼルは話が分からないという顔をしていたが、リーフィアが何も言わずに基礎練習を始めると、あれで会話が終わったのだらうと思い、ブイゼルも基礎練習を始めた。

練習を始めて2時間が経過した。今はコンクールメンバーであるリーフィアとブイゼル以外は全員第2音楽室に戻り、二人だけで練習していた。

「えー、ここはこうして。そうそう、そんな感じ。もう少し高めかな？」

リーフィアがブイゼルにコンクールの曲を教えているところだった。そんなリーフィアといつものおてんば娘のようなリーフィアは全くの別人だった。

「取りあえずこれで全部終わったわね」

今さっきコンクールの曲を一通り通したところだ。ブイゼルは長時間の練習で疲れてしまっている。

「あはは。疲れちゃったか。ちょっと休んでいいよ。もう少しで全体合奏始まるしね」

「はい……」

ブイゼルは今にも倒れそうな声で返事をする。そんな声で返事される心配で、ともに練習ができないリーフィア。何度もブイゼルの方をちらつと見ながら練習している。

そんな様子に気付いたブイゼルは、ぺこりと頭を下げてもう大丈夫ですとアピールする。

それを見て少しは安心したリーフィア。練習に神経を集中させ始めた。

ほどなくして先ほどよりも音程がよくなり、ブイゼルとの力量差がはつきりとしてくる。そんなリーフィアにブイゼルは前から尊敬の念を抱いていた。

しばらくリーフィアの音色に聞き惚れていると、不意に個別音楽室の扉が開く。

「合奏だよ」 お姉ちゃんにブイゼル

現れたのはブースターだった。合奏が始まることを知らせに来てくれたらしい。

「ありがとうブースター、今行くわ」

ブースターに軽くお礼を言い、素早く合奏の準備をするリーフィアとブイゼル。

二人は早足で第1音楽室に向かった。

「ふ〜ん♪（これから合奏を始めま〜す）」

指揮者の席に座っているのはプクリン先生だ。吹奏楽の顧問をやっているときは鼻歌とジェスチャーだけで会話をするので、まずはこれを翻訳出来るようにするのが1年生の目標である。

「ふ〜んふ〜ん♪（それじゃあ取りあえず全部通すよ〜!）」

タクトを振り上げるプクリン。今のを翻訳できなかった1年生もその動作で何をするのか分かったようだ。

こうして合奏が始まったのはいいのだが……。

「ふ〜ん♪（そこ違うよ! もう少し高く）」

「ふふふ〜ん♪（出来ればもうちよつと長く音出せない?）」

このプクリン、音楽に関しては非常にうるさくて細かいところもバシバシ指摘する。それが1年生であっても手加減なしだ。

けれども、1時間ちよつとあれば合奏以前よりクオリティが格段に上がる。それだけプクリンの腕が良いということになる。

「ふ〜ん♪ ふ〜ん♪（それじゃあ合奏終わりね。後はこのまま帰っていいよ）」

プクリンの話が分からなくてもプクリンが教室から出て行こうと

したので、だいたい何を言ったのかは1年生でも分かった。

「ブースターは帰る？」

リーフィアがブースターに問う。一応プクリンが学校にいる午後5時までは練習していてもいいということになっている。

「うーん。もう少し練習してく。さっき言われた所を直したいからね」

ブースターは去年から吹奏楽部に度々出入りしていたため、プクリンの鼻歌を翻訳できる。

「そう、分かったわ。今日は私一人で帰るね」

そう言い、リーフィアは太陽が最も高く昇る時間帯に下校したのであった。

リーフィアの一日　普通の学園物になってしまった（後書き）

ピカチュウ「俺の出番」

ごめん。用意してなかった。

ブイゼル「えっと、デンリュウ先生に、ジバコイル先生、セレビィ先生にプクリン先生とルギア校長。まともな先生っているの？」

プクリンは一応普通の授業ではまともという設定。

学園×学園 〱コンクール準備編〱（前書き）

今回から正式なコラボが始まります！

ピカチュウ「俺の出番」

最近の君はそればっかだねえ。大丈夫、一応主人公らしく出番はあるよ。

ピカチュウ「やったぜ♪」

学園×学園　〜コンクール準備編〜

5月に入り、学校も周りの自然も活発化する今日この頃。

温かな気温とゴールデンウィーク明けの初日ということもあり、やる気の出ないポケモンが一人。窓際でため息をついている。

「はぁー……」

彼の名はブイゼル。仮入部のときの演奏に惹かれて入った吹奏楽部も調子よく続き、友達関係も勉強も文句なしのこのポケモンが悩み事でもあるのだろうか？

「ブイゼル、今日は調子悪いのか？　なんなら保健室行く？」

ブイゼルのことを心配するポケモンが一人。彼の名はピカチュウ。ブイゼルの親友である。

「はぁー……」

ピカチュウの言葉もブイゼルの耳には届いて無いらしく、ため息ばかり繰り返している。

「そう言う時こそお任せよ♪」

そこに突如現れたのはムウマ。ピカチュウ達と親友であり、ストーカーという趣味を持っているポケモンだ。

「なんだムウマか。心当たりでもあるのか？」

「なきや来ないわ。私の調査によると、ブイゼルはコンクールのこととで悩んでいるみたい」

ブイゼルの耳が反応する。どうやら凶星のようだ。

「……。お前、本当にどこからそんな情報を入手してるんだ？ 普通分らないだろ」

ピカチュウが呆れながら質問する。このムウマの情報網は本当に広い。校内の情報なら簡単に調べ上げる。

ムウマがピカチュウの質問に答える前に、ずっと黙っていたブイゼルがムウマに呼びかける。

「ムウマちゃん、それにピカチュウ君。ちょっと悩み事聞いてもらっていい？」

「もちろん！ 昼休みだからまだまだ時間もあるし」

「私も興味あるわ」

二人の返事を聞いた後、ブイゼルは重々しく喋り始めた。

二人の聞いたブイゼルの悩みはこうだ。今回のコンクールで出る1年生はブイゼルとブースターだけらしい。ブースターは昔から楽器を触っていて1年の中でも軒並みはずれた実力があるが、自分はそのままで上手くない。なのにコンクールメンバーに選ばれて上手く

出来るのかすごく不安とのことだ。

「なるほど……。これは難しいな」

「確かに難しいわね。私達は音楽的なことは全く分からないし」

二人ともブイゼルの悩みに対して答えを言うことが出来なかった。

「そうだよね……。相談してごめん。今は忘れて」

ブイゼルは申し訳なさそうな感じで謝る。

「なんだ。ブイゼルはそんなことで悩んでたの？」

そう言いながら現れたのはブースターだ。ブイゼルと同じ吹奏楽部で彼もまたコンクールに出場する。

「ブースターは解決方法分かるのか？」

ピカチュウがブースターに聞いてみる。今の口ぶりを聞く限り、解決法を知っていそうだ。

「知ってるよ」だって、ブイゼルはコンクールメンバーなんだもん」

ブースターが理由になっていない理由を返す。こんなことを言われても誰も分かりはしない。

「あ、難しかった？　だって、今回のコンクールは人数無制限なんだよ。つまり、上手い人だけで構成するはずだよ。その中にブイ

ゼルは入っている。それだけで上手く出来る証明にはなってるよ」

3人ともこれを聞いて納得する。ブイゼルも先程までに比べて表情がだいぶ和らいだ。

「そうだね。ブースターの言うとおりだよ。ピカチュウ君達も相談に乗ってくれてありがとうね」

「それよりもコンクール頑張れよ！」

「私達も応援してるわ！」

ピカチュウ達はブイゼルに応援の言葉を送った。それを弾みにして、ブイゼルはコンクールの練習を人一倍頑張ったそうだ。瞳の色も鮮やかになり、迷いは無くなったようだ。

「あれ？　今回は短くない？」

ピカチュウ。そんなこと言うてはいけません。これから別サイドに移ります。

時は同じく、とある中学校では――

「ポール。調子どう？」

ポールと呼ばれたそのポケモンは全体的に青く、ペンギンのよう

なくちばしを持っている。種族的に言えばポツチャマという種族だ。

「半分くらい出来たかな。ボルトはどんな感じだ？」

ボルトと呼ばれたそのポケモンは、全体的に黄色い体をしており、ギザギザの尻尾と大きな耳が特徴的なポケモン。種族で言うところま
さしくピカチュウであった。

「1か所だけ出来ないところがあつてね。今練習中」

「まあ、頑張れよ」

この二人が話しているのは今度のコンクールについてだ。そう、このポケモン学園もポケモン第2中学校と同じコンクールに出場する。いわばライバル的存在だ。

「二人ともどうしたの？ 妙にテンション低いよ？」

そこに現れたのは、オレンジ色の体をしていて、泳ぐのに適してい
いそうなの尻尾を持ち、可愛らしい瞳を持っている。ポケモンの種
族で言うブイゼルというポケモンだ。

「あ、ルークか。ちょうどいいや、ここ教えてくれる？」

「いいよ。まだまだ時間はあるしね。ポールも分からないところがあるなら教えるよ？」

ルークと呼ばれたブイゼルもコンクールに出場するらしい。腕は
ボルト達より上のようなが。

「それじゃ、お言葉に甘えて」

ポールも分からない所を教えてもらうことにした。

「ここなんだけど、ルークは分かる？」

ボルトが指さした先は、8分音符と16分音符が大量に並んでいる、見るも難しそうなところだった。

「分かるよ。ここはこんな感じ」

そう言いルークは二人の前で手を叩き、リズムを教える。遠くから見ると先輩と後輩のようだ。

「なるほど。ありがとうルーク！」

ルークの教え方が上手かったのか、すぐに理解するボルト。

「どういたしまして！ 分からないことあったらどんどん聞いてね」

「そうさせてもらっよ。俺も教えてもらって参考になった」

ポールも、分からなかった所が理解できたようだ。

ルークは成績優秀、運動神経抜群、人間関係も最高という、非常に素晴らしいポケモンだ。彼は吹奏楽部でサクスを吹いている。ちなみに、ボルトはトランペット。ポールはパーカッションをやっている。

あつという間に時間は過ぎ、放課後……。

「部活だ部活」

ボルトはルークに教えてもらったところを早く練習したくて、超駆け足で部室へと急ぐ。その後ろを追うルークとポール。

「待つてよー！ ミミとエドがまだ来てないよ」

ルークが叫ぶが、ボルトの耳には全く届いていないようだった。

「しょうがない。俺は二人と一緒にいくから、ルークは一緒に行つてやれ」

「分かった！」

ポールの提案を了承したルークも駆けだす。

「二人とも本当に音楽が好きだよな。俺もだけど。……はっ！ もしかして俺達つて才能あるんじゃない？」

ポールはあほらしいことを呟きながらエドとミミのいる1年4組を目指し、来た道を折り返した。

しばらく歩くと、目的の二人の人影が見えてくる。

「あつ！ おーい。ポール」

今、手を振っているこのポケモンは、長くて綺麗な耳が特徴的で、

体は全体的に茶色だ。種族で言うとミニロルというポケモンである。

「今行くから、待っててね！」

そう言いゆっくりポールの方に向かってきたのは、全体的に黄緑色をしていて、背中には殻のようなものがある。種族的にはナエトルというポケモンだ。

「二人とも遅かったな。なんかあったのか？」

「特に何もなかったかな。それより部活行こ？」

ポールの問いにミニミが答える。彼女もまた早く部活に行きたい様子だ。

「そうだね。ボルトとルークは先行ったし、俺達も行くか」

3人も部活へ向かった……。

「えーっと、今日から本格的にコンクール曲の練習を始めます！皆さん分らないところがあつたらどんどん私に聞いてね！」

ボルト達吹奏楽部の部長のサーナイト。通称さな先輩が合奏前に全員に声かけをする。

「ハイッ！」

部員42名も全員やる気のようなのだ。どこかの吹奏楽部とはわけが

違う。

このポケモン学園吹奏楽部は2、3回の全国大会出場経験を持つ
由緒正しき吹奏楽部だ。

「先生がまだ来てないけど、先に私達だけで始めようか！ それじ
ゃあ私が指揮をするね♪」

そう言い、さな先輩がみんなの前に立つ。そして滑らかな動きで
^{タクト}指揮棒を振り始めた。

それに合わせて音を出すボルト達。ハーモニーが織りなす素晴ら
しいメロディーは、聴く者をほれぼれさせてしまう。

そんな素晴らしい音に包まれながら、今日の練習は幕を閉じたよ
うだ。かれこれ結構な時間合奏をしていた。

「ふっつ、それじゃあこれで今日は終わりね。また明日、みんな
で練習頑張ろう！」

「おっつー!!」

ポケモン学園の音楽室に42名の大きな声が木霊した……。

コンクールまであと2週間！

学園×学園　〜コンクール準備編〜（後書き）

という訳で、ブイゼルさんの『ポケモン学園〜ハチャメチャ学校生活〜』からボルト、ルーク、ポール、ミミ、エド、さな先輩に来てもらいました〜！

ボルト達「よろしく！」

ピカチュウ「俺の出番少ないぞ！」

文句言わない。次からが君の出番多くなるから。

ピカチュウ「本当か？」

コンクール当日！ ～前編～

センター地区大ホール。今回のコンクールで使われる会場だ。

ブイゼル達の学校からはそこまで遠くはないが、ボルトたちの学校からはかなり遠い。となれば大きい楽器は自然とトラックなどに詰め込めるわけであるが……。

「ボルトく、ルークく、ミミく、少し待ってよぉく！」

ナエトルことエドが前に行く3人に呼びかける。現在はコンクリートで舗装された道を歩いている。幅は広く大型トラック2台程度なら普通に通れるくらいだ。周りにはお洒落なお店が立ち並び、いかにもメインストリートという感じである。

「遅いよー！ 早く動けないの？」

ボルトがシンバルを持ったポールと、スネアドラムを背中に背負っているエドに問う。聞かなくても答えは明白な気もするが。

「無理だろ、これ結構重いぞ」

「そうだよく、トランペットみたいに軽くないんだよ」

やはりと言ったところか、ポールとエドは口をそろえて無理と言いつつ切った。

何故これらの楽器がトラックに乗せられていないのか、気になるであろう。本当はシンバルとスネアドラムは貸してもらったはずだっ

ただ、ブイゼル達ポケモン学園に。しかし、パーカッションの先輩がトラックが発射した後、「自校の楽器が良い！」なんて騒ぎ出したのだ。これを見無視することも出来ず、1年生である二人が持つことになったのである。

「しょうがないね、僕が手伝うよ。ポール、代わりに僕の楽器持ってきてくれる？」

「いいのか？ 助かる」

ルークがポールの方に駆け寄り、ポールの代わりにシンバルを持つ。

「おっと、これは確かに重いなあ」

ルークが一瞬よろける。結構な重量があるらしい。

ここでシンバルという楽器について説明しておこう。知っている方も多いと思うが、この楽器は金属でできている。円の形をした金属の板が二枚、これをぶつけて音を出すのだ。音自体が大きいため、迫力がある。

「まあな、演奏中はこれをずっと持つてるから大変なんだ」

「それは大変だね」

ルークとポールが何気ない会話をしながら戻ってくる。エドもなんとかついてこれた。

「はあああ、何で僕のスネアドラムは誰も持ってくれないの？」

スネアドラムについての説明もしておこう。この名称ではあまり聞くことはないと思うが、この楽器は小太鼓とも言える。あの、テレビで何かの発表前などのタララララララ……というのはこのスネアドラムの音である。（この技術のことをロールという）

「だって、それはどう見ても持ちにくそうじゃない」

ミニがさらつと言い出す。まあ確かにその通りなのだが。

「うっ、ちよつとくらい……」

エドが残念そうに呟く。かなり重そうだ。

「頑張つてよ、もうすぐ着くみたいだし」

ボルトが左の指で指さした先にはマップがあり、そのマップによると徒歩10分程度でセンター地区大ホールに着くようだ。

「そつなの？ それじゃあ頑張ろつと！」

エドが気合いを入れる。そのまま走りだし、ボルト達を追い抜いてしまった。

「僕も頑張るよ！ ポールはサックスぶつけないでね」

「分かってるさ」

なんだかんだいって、ルークとポールもやる気を出す。やはり目標が見えると気合いの入り方が全然違う。そして、2人も全速力で

ボルト達を抜き去る。

「私達も行こう」ねっ、ボルト!」

「うん!」

ボルトとミミも走り出してセンター地区大ホールに向かって行つた……。

一方その頃、ポケモン学園吹奏楽部の皆さんは――

「1、2年のコンクールメンバーは先にホールに行つていいわ」

「そのほかの1年! 楽器搬入するわ! パーカス(パーカッション)から運び込んで!」

「3年は1年に指示出して! 2年はティンパニのチューニング!」

ランクルス『副』部長がテキパキと指示を出す。普通こうというのは部長がやるはずなのだが。

当然疑問に思ったブイゼルはリーフィアにそのことを訊ねてみる。

「あの、何でランクルス先輩が指示出してるんですか? 普通こういうことは部長がやるのでは?」

「普通は、でしょ? ここは普通じゃないから。カビゴン先輩はいないわよ」

確かに部長不在のときもあるだろう。でも、コンクールなどのときは大抵いる。しかし、ブイゼルはまだにカビゴンという個人にほとんどあったことが無い。なんと、ファイヤートルネードでしかあっていないのだ。つまり、練習にも来ていない。

「というかカビゴン部長にほとんどあったことが無いんですけど」

「昔は練習量半端なかったのに、今年というかこっちの学校に来てからは全く練習をしなくなっちゃって。でもコンクールメンバーなのよね」

「それで大丈夫なんですか？」

「多分。上手かったからね」

リーフィアの能天気な発言に滑りそうになるブイゼル。――多分
って……――

取りあえず二人はランクルスの指示通り、会場に入ることにした。

――それと時同じく、とあるバスの中では――

「いいのか？　こんなところで油売ってて」

「大丈夫、オイラがいなくてもランクルスがどうにかしてくれる」

囲碁・将棋部部長のケッキング、その横にいるのは吹奏楽部部長

のカビゴンだった。

今2人、否、3人はバスの中にいた。しかし、肝心の3人目の姿が見当たらない。それもそのはず、彼はバスの一番後ろの右端にいたからだ。

「どうしてこうなった」

こう嘆いているのはピカチュウである。どうしてこうなったか？説明しておこう。

今日は土曜日、何故か部長によって囲碁・将棋部が集められた。

この際だから言ってしまうおう。この囲碁・将棋部は全くと言っていいほど活動をしてない。まず、顧問がデンリュウであること。これがまず問題だ。

更に部長のケッキング。彼は囲碁も将棋もルールさえ知らない。ただ楽しうだから入っただけだ。

この部活の部員は4名。ケッキング合わせて5名である。しかし、今日集まったのはピカチュウとケッキングだけだ。

「そうだ、コンクールに行こう」

で、集まって最初のセリフがこれである。

「いいですよ」

ピカチュウは当初コンクールに行く予定だったためすぐに了承し

た。そこまでは良かったのだ。

「オイラも一緒に行く」

そこに現れたのがこのカビゴン。今までどこに行ってたかは知らないが、これから会場に向かうとのこと。ちなみに、ケツキングはカビゴンの旧友だったため、すぐにOKを出した。

「えー！！ 確かカビゴンさんは吹奏楽部の部長じゃなかったのですか？」

キリッ、というような効果音が聞こえそうなくらいカビゴンがピカチュウを睨みつける。

実はこのカビゴンは大食いに関しては負け無しかったのだが、つい最近その記録破ってしまったポケモンがいる。あえて名前は挙げていない。それで、カビゴンはそのポケモンに嫉妬しているのだ。

そんな経緯があり、今の風景につながるのである。

「そうじゃなくて、お前がだよ。練習してないのに出来るもんなのか？」

ケツキングが当たり前のことを問う。普通なら無理だろう練習していない曲を吹くなんて。

ピカチュウもそれは無理な芸当だと思った。あの光景を見るまでは……。

「もお！ 遅いよ4人とも！」

ボルト達は顧問であるメロ。ツタ先生に怒られていた。ちなみに、メロ。ツタ先生は音楽を愛し、音楽に愛されている先生だ。

「すみません……」

楽器を持ってたからだコンチキショー！ と言いたかったが、スネアドラムより思いビブラフォン（鉄琴の一種）を持っていた人が先についていたので何も言えなかった。

「まあ、間に合ったからいいわ」

取りあえず、メロ。ツタ先生から許しが出たので安心する4人。

「それじゃあ皆！ 楽器搬入するわよ！」

メロ。ツタ先生の呼びかけで全員で楽器搬入をする。

「先生優しいわよね♪ 全員出場させてくれるなんて！」

自分の楽器と譜面台を持ったミミがボルト達に話しかける。

「本当だよな。武者震いしてきたぜ」

「ポール。それは緊張してるんじゃない？」

ルークが優しく訂正する。訂正していることは優しくない。

「いや！ 多分武者震いだ！ ……あつ」

ポールが武者震いの前に多分とつける。やはりどこかが抜けているポールである。

「ほぐら、やっぱり緊張してるんじゃないの？」

「緊張してない！」

などと言い争っているうちに楽器搬入も終わり、自分達の番まで舞台袖で待機ということになった。もちろん静かにしていなくてはならない。

しかし、ボルトは気になるものを見つけた。

「ん？ あれってこの前の？」

そこにいたのはこの前コンビニでボルト達に突っ込んできたポケモン。リーフィアの姿があった。

「ねえルーク、あれってこの前の人じゃないかな？」

あの出来事はインパクトが強くて、相手の顔をしっかりと覚えていたボルト。

「本当だ、確かにコンビニでぶつかった人だ」

ルークの記憶にもかなり残っているみたいで、すぐに思い出すことが出来た。

二人がまじまじと見つめていると、リーフィアもその視線に気づ

いた。そして、近寄ってくる。近くにいたブイゼルと一緒に。

「あつ！ あのブイゼルって確か……」

ポールも何かを思い出したみたいだ。

「この前は本当にごめんなさいね。このブイゼルと勘違いしちゃって」

と言ってリーフィアが連れてきたブイゼルは、確かにルークと身長も変わらない。瓜二つであった。

「あら、本当に似てるわね。それじゃあ私が勘違いしても当たり前よね」

勝手に自己正当化するリーフィア。ボルト達は少し呆れ気味だ。

「君達名前はなんていうの？ 私はリーフィア。ポケモン第2中学校2年生クラリネット担当よ」

勝手に自己紹介を始めるリーフィア。相手が先輩だということも分かり、ボルト達も自己紹介することにした。

「僕はボルトです。ポケモン学園1年生でトランペット吹いてます」

「僕はルークって言います。ボルト君と同じ中学校でサックス吹いてます」

「俺はポール。ポケモン学園1年のパーカス担当だ」

リーフィアの はっぱカッター！

「痛いっ！ 何故に本家ポケモン風！？」

「先輩には敬語でしょ？」

確かにリーフィアの言うことは正論だが、やり方は間違っている。

「ごめんねポール君。あれは痛いよね……」

ブイゼルがポールに手を差し出す。同じ葉っぱカッターを受けたことのある身として、放っておけなかったのだろう。

「あ、こっちの発表がそろそろ始まるから行くわね」

勝手に話を切り上げ退散していくリーフィアとブイゼル。

「何がなんだっただか……」

そう呟くボルト。今のみんなのを代弁していたであろう……。

コンクール当日！ ～前編～（後書き）

ピカチュウ「何故伏字？」

メロ。ツタのこと？ 一応公式には発表されてないから伏せた方がまだいいかなと思って。

というか、ブイゼルさんの方にはもう名前が出てるので、気になる方はそちらで確認を。

コンクール当日！ ～後編～（前書き）

まず、携帯でこの小説をお読みの方。最初の方はすつとばしてもらって構いません。演奏の様子をずっと描写しているだけなので。

パソコンでこちらの小説をお読みの方。おめでとうございます！
まず、新しいウィンドウかブラウザを開き、YOUTUBEへ接続してください。

作中で出た曲目はYOUTUBEにおいてありますので、それを視聴しながら文章を読んでいただけると嬉しいです。面倒であつたらすつとばしてもらっても構いません。

では、前置きが長くなりましたがどうぞ！

コンクール当日！ ～後編～

真ん中にステージがあり、その後ろ、前、左右、どこにも客席があった。その客席の右端の方に黄色いポケモンと紫色のポケモンがいた。ピカチュウとムウマである。

「次ね、ブイゼルの出番」

ムウマがパンフレットを見ながらそう呟く。

「だね。頑張れブイゼル！」

ピカチュウが少し大きめの声を出す。何故このピカチュウがここにいるのかを説明するでしょう。

ケッキング達とコンクール会場にやってきたピカチュウ。着いた途端にカビゴンが会場内に入って行き、それに混じってピカチュウも自慢の足の速さ（とはいっても平均的）でケッキングを置いてきたのだ。

今頃はケッキングも会場内にいるだろう。

「次はポケモン第2中学校です。曲目はフォレットス作曲『惑星』から『火星』戦争をもたらすもの』です」

会場内にアナウンスが鳴り響く。それと同時に楽器を持ったみんなが入場する。

最後に指揮者のプクリンが一に就き、こちらに振り向きお辞儀を

する。その後、生徒達の方を向き、タクトを振り上げる。

最初は木管楽器やコントラバス（大きいバイオリンを想像してください）の緊迫感あふれるリズムから始まった。

その次に金管楽器、つまりカビゴンの担当するチューバやトロンボーン、トランペットのメロディが入ってくる。

ピカチュウは正直上手くできるとは思っておらず、半ば諦めてたが、カビゴンはものすごい重圧感のある出だしだ。練習していないとは到底思えない。

その後はホルンなどにメロディを受け渡し、場をどんどん盛り上げていく。

パーカッションの迫力もかなりある。ティンパニ（音程のある大太鼓みたいなもの）はその代表格だ。

その後、金管と木管のメロディが交互にでてきてどんどんヒートアップしていく。

場が上がりきった時、曲の雰囲気が変わり全楽器が綺麗にそろい、リズムを刻み始める。少しした後、トランペットが格好いいメロディを吹く。これを吹いているのはブースターだ。

トランペットのメロディが終わり、代わりにクラリネットが出てくる。ブイゼルとリーフィアの出番だ。

「……」

2人とも声は出せないが、心の中でブースター、リーフィア、ブイゼルのことを応援していた。

その間も全く乱れないテンポを奏でるのはランクルスとカビゴン。さすが副部長と部長ということもあり、全体のリズムを支えている。

結構な時間が経った後に全体の雰囲気が変わり、不穏な感じで低音の楽器が仕切り直す。バックで流れているクラリネットが、更に不穏な感じを出す。

同じフレーズを繰り返しているが、いつの間にかトランペットがバックについたり、クラリネットもメロディに加わったりしている。そのせいかボリュームもどんどん上がっていき、雰囲気が変わってから初めての盛り上がりを見せる。

盛り上がりの部分は、全員で演奏する最初のリズムのような感じだ。

そこにトロンボーンがすごい音量で入ってくる。それは人数の差を感じさせないほどだ。

それを境に今まで聞いてきたフレーズが流れ出す。

だんだんと規模が縮小していき、終わりへと近づいていく。

かなり縮小した後、クラリネットやフルートが一気場面を盛り上げ、最後は完璧に終わった。

プクリンが前を向きお辞儀をする。それで、ポケモン第2中学校の演奏は終了だ。

「凄い……」

二人の今の感情を一言で言い表すところだ。これ以外の賛辞の言葉は思い浮かばないだろう。

「ありがとうございました。次で最後の演奏となります。ポケモン学園で、曲目はM・アーマルド作曲『第六の幸福をもたらす宿』第3楽章『ハッピーエンディング』です」

ポケモン学園と聞いてムウマが目をキラキラさせている。

「ピカチュウ。ポケモン学園よ。聴いてから帰りましょう」

ピカチュウはポケモン学園の何が凄いのかよく知らなかったが、取りあえずムウマと一緒に聴くことにした。

先程と同じように並んでいく生徒達。ピカチュウはその中にピカチュウとブイゼルを見つけた。

「へえ、同じピカチュウ族でも楽器やっている人もいるんだな」

当たり前なことを呟くピカチュウ。そんな中、指揮を務めるのはメロ。ツタだ。

「いいのかしら。公式発表されてないのに……」

そんなことを思われているとはいざ知れず、メロ。ツタはタクトを振り上げる。

出だしは華麗なファンファーレから始まる。その後、ホルンのメロディが始まった。

メロディも優雅な足取りだ。そんなメロディがどんどん受け渡されていき、場が盛り上がっていく。

シンバルとはまた違った轟音が鳴り響き、先程までとは全く違った曲調に移り変わる。なんだか面白い感じになっている。その後、どんどんゆっくりになっていく、不気味さが出てきた。

メロディが金管楽器主体になり、速度も増してくる。その勢いがまた衰え始めるとひと時の静寂が辺りを包みこんだ。

静まり返った後、木管楽器がその沈黙を破り、おしとやかに、けれども元気な感じでピッコロがメロディを奏で始める。スネアドラムのリズムの刻みも完璧だ。

それにだんだんと他の木管楽器の音が混ざり始めにぎやかになっていく。

ついには打楽器や金管楽器も混ざり始め、最初にでてきたメロディも聞こえてくるようになった。

しばらくはメロディが交互に聞こえてきたが、それが止まり、優雅で盛大な場面を迎える。

色々な楽器が鳴り響き、盛大に盛大に場面を盛り上げる。

最初に出たメロディを、もう一度盛大に吹き終え、最後バシッと伸ばして華麗に決まった。

メロ。ツタ先生がこちらに振り向きお辞儀をする。

これで、今回のコンクールは終了だ。

「ムウマ。なんでポケモン学園の演奏を聴いていこうと思ったの？」

ピカチュウはさっき気になったことを聴いてみる。

「あ、ピカチュウは知らないのね。ポケモン学園と言えば全国大会出場するくらい上手いところなのよ」

「そうだったのか！ どおりで上手いわけだ」

ピカチュウも納得の表情をする。

「審査結果が出るまでもう少しあるわね」

「だな。どうなるのか全く分からないけど」

——静まり返った舞台袖。黙々と楽器を外のトラックまで持つていくポケモン学園とポケモン第2中学校の生徒。

「上手いねえ」。私達なんかより全然うまいじゃん」

「いえいえ、そんなそんな」

そう小さな声で誉めているのはリーフィアだ。ボルトが気に入っ

たらしい。トランペットを吹いていたり、一年生だったり、どこかブラスターと重なるところがあるのだろう。

「あ、ちよつと僕トイレ行ってきます」

「分かった。ルーク君にでも伝えておくね」

ボルトはお願いしますとお辞儀をしながらトイレのある方向へ去って行った。

「トイレはこつちだよな」

ボルトは記憶と看板を頼りにトイレへと進む。で、トイレを見つけたのだが、そこで不可解な現象が起こった。

「あ、ピカチュウ。何で先行ったんだ？」

「へ？」

そこに現れたのは、丁度トイレに来ていたケッキングだった。もちろんピカチュウとボルトのことを見間違えてる。

「へ？　じゃなくて、何で俺を置いて行ったか説明してくれって言ってるんだ」

——絶対にこのケッキングはやばい。ボルトはそう確信していた。となれば逃げるが勝ちだ。

「すみません！　よく分からないです！」

「逃げるなっ！」

ケツキングの声を聞く間もなく、ボルトは急加速し逃走した。もちろんそんな彼にケツキングが追いつけるはずもなく、簡単に逃げられてしまう。

ケツキングはその場で軽く舌打ちをし、会場の出口へ向かった。

楽器の運び出しも終わり、がらんとした舞台袖。しかし、人影が2つある。1つはリーフィアのもの。特徴的な耳としっぽのおかげですぐに分かった。

もう1つはエドのものだった。何故2人がここで話しているのか、真相は本人達にしか分からない。

「分かったわ。私も気に入ってたしね♪」

「それじゃあお願いします」

それだけを言い残し、リーフィアとエドは去って行った。

扉を思い切り閉めるリーフィア。辺りには大きな音が響き渡る。

「ふう〜、それじゃあボルト君を探さないと……」

「はあはあ、あれ？ 僕のこと探してましたか？」

そこにはケツキングから全速力で逃げ切ってきたボルトがいた。

「あ、ちょうどいいところに」

リーフィアは体中から喜びに満ち溢れたようなオーラを放っている。

「それより、結果発表がそろそろ始まりますよ」

リーフィアの尋常じゃないオーラを感じ取ってか、結果発表にリーフィアの関心をずらすうとしているボルト。

「あら、本当ね。それじゃあ行こうか」

二人は会場内に入っていく。リーフィアからは至福のオーラが、ボルトからは緊張のオーラが放たれたまま。

一方その頃、ピカチュウと言えば

「zzz……」

コンクールの結果発表を待つ間に眠ってしまったピカチュウ。ムウマはそのことには気付いていない様子だ。

「さて、これから結果発表を始めたいと思います」

ピカチュウが深い眠りにについているまま、コンクールの結果発表が始まる。

「今回の参加数は25校でした。この中から1校を金賞にしたいと思います。銀賞は4校、銅賞は10校です。それでは銅賞から発表していきたいと思います」

司会のガブリアスが次々に入賞校の名を挙げる。このガブリアスはいつたい何者なのだろうか。

選ばれた学校の生徒からは、歓喜と落胆の入り混じった声が聞こえてくる。

「えー、それでは次に銀賞の発表に参りたいと思います」

これも順番に名が呼ばれ、残り1校となった時、ガブリアスが読み上げるのを少し止める。だが、すぐに再開された。

「最後の1校は、ポケモン第2中学校です！」

ブイゼル達の方から歓喜の声が聞こえる。初めてのコンクールで銀賞を取れば当たり前前の反応かもしれない。

「となると……。優勝は決まったわね」

ムウマが得意そうに言う。

「最後に金賞の発表をさせていただきます。栄光ある金賞は……。ポケモン学園です！」

ムウマの席の向かい、つまり左端の席にいるポケモン学園の生徒達。彼らは盛大に声を張り上げ、体中を使い嬉しさを表現していた。電気を放ったり、水を飛ばしたり。

周りのうるさが静まらないまま、ガブリアスは閉会のあいさつを終え、コンクールは終了となった。

「さてと。ピカチュウ、起きなさい」

ムウマはピカチュウに大きめの声をかける。もちろんそれっぽっちでは起きない。

「あ、ムウマちゃん。ピカチュウは起こさなくていいわよ」

そこに現れたのはリーフィアとエド。何故かピカチュウを起こさなくていいという。

「? どうしてですか?」

「実は、……」こによこによ

エドがムウマの耳らしき部分に顔を近づけ、ひっそりと用件を伝える。

「なるほど、分かったわ」

ムウマも納得し、ピカチュウを残してその場を去る。

「これでいいんですね?」

「うん、ありがとうエド君」

リーフィアとエドはその場でゆっくりとうなずき、エドはその場

に残り、リーフィアはどこかに行ってしまった。

「これから本番だよ。ピカチュウ君」

エドは眠っているピカチュウにひっそりと告げたのであった。

ポケモン学園inピカチュウ！

「どうしてなんだよ！」

開始早々そう叫んだのは、毎度おなじみのピカチュウである。彼は今、色々と厄介事に巻き込まれたのだ。

「うーん、どうしてって言われても……ねえ？」

「文句があるなら、例のキャベツに言ってくれ」

ピカチュウの悲痛の叫びに応えるルークとポール。

「あ、キャベツとか言つとそこら辺に穴開けて文句言いに来るぞ」

そう言つて何もない背景に指をさすピカチュウ。詳しいことは仮入部の話を参考にしてほしい。

「それより、どうして俺がポケモン学園にいるんだ？」

ピカチュウの叫びの原因、それは何故かポケモン学園に来ていたことだった。

「エドにボルトがそこで寝てたから連れてってあげてといてと言われて、家まで連れてきたんだ」

「それで、その日はそのまま寝っぱなしだったんだろ？ それで、疲れてるのかと思って迎えに行ったら、ボルトじゃなくてお前がいたわけだ」

きちんと説明するルークとポール。ちなみにまだホームルームも始まっていないので、ピカチュウがこの学校にいることはこの2人以外は知らない。

「で、俺はどうすればいい？」

ピカチュウの単刀直入の問い。彼が今一番聞きたいことだろう。

「うーん。普通に授業受けて、普通に部活して、普通に帰って自宅に電話すればいいんじゃない？」

「授業は受けられるけど、部活は無理だ！ 楽器なんて吹部の仮入に行った時にも触ってないぞ！ せいぜいリコーダーが吹けるぐらいだし！」

ピカチュウは平凡な人生を送ってきたため、楽器などはろくな経験が無かった。

「じゃあ部活は休もう。事情を話せば分かってくれると思う」

「それより、向こうとの連絡手段はないのか？」

「うーん……」

しばらく思案する3人。なかなかいい案が思い浮かばない。

あと数分でチャイムが鳴るという所でポールが何かひらめいたようだ。

「お前携帯は持ってないのか？」

「携帯なら家に置いてきたけど。それが？」

「ならさ、俺の携帯から電話してみたらどうだ？　こんなことを思いつく俺ってサイコー♪」

最後の方は聞かなかったことにし、ポールから携帯をひったくるピカチュウ。

「あつ！　物を借りるときは一声かけるー！」

そんな叫びはことごとく無視し、自分の携帯番号を入力していく。

発信ボタンを押すが、着信音が流れ続けるだけだ。見切りをつけ、電話を切る。

「ダメだ。誰も出ない」

「ちえ、俺の最高の案が大無しに……」

ポールは真面目に落ち込んでいる。

丁度チャイムが鳴り響く。ホームルームが始まる合図だ。

「それじゃあ、ピカチュウ君はばれないように注意してね？　ばれると色々と厄介だから……」

ルークがピカチュウに軽く注意する。

「分かった、ボルトになりきる」

ピカチュウはその注意をしっかりと受け止め、席へと向かう。席自体はルークの隣なので、ルークについて行くという感じだが。

ピカチュウ達が席について間もなく、ジャローダという先生が入ってくる。

「皆さんおはようございます。今日は皆さんにお知らせが一つあります。実は、理科の授業のときに、ある先生と一緒に授業をしてくれます。楽しみにしててくださいね！」

全員の返事が教室内を木霊する。

「それでは、ホームルームを終わります。礼！」

そう言い残し、扉を開けて出ていくジャローダ。今日の理科の時間は1時間目だ。

「誰が来るんだろう？ ボルトはどんな先生だと思う？」

ルークがピカチュウに向かって問いかける。

「……、あ。でも、嫌な予感しかないんだよな」

返答が少し遅れたピカチュウだが、自分の思ったことをルークに言う。ボルトの口調などは分からないので標準的な話し方をしてみたようだ。

「どんな予感？」

「大きい声じゃ言えないけど、俺の学校の方にいるセレビィ先生みたいなのがやって来るのかなと思ってる」

セレビィ——。天然で忘れっぽい教師だ。ある程度なら許せるのだが、さすがに授業に支障をきたすのはどうかと思う。現在はルギア校長の権力だけで教師をやっているようなものだ。

「へえ、そんな教師もいるんだね。面白そう」

ルークの第一声は面白そうだった。

「ヤッホー♪ ボルト、ルーク、ポールおはよう！」

扉を勢いよく開け、クラス中の視線を集めながら登場したのは、ミミロルのミミだ。彼女はまだボルトとピカチュウが入れ替わっていることを知らない。

「あ、ミミ。おはよう」

「朝からうるさいぞ」

「……。おはよう」

全員思い思いの返事をする。誰が誰だかは書かなくてもお分かりであろう。

あいさつに元気が無かったため、心配そうにボルトのふりをしたピカチュウを目の前で見つめる。

「今日のボルト、元気ないけどどうしたの？ 何かあった？」

「ん？ べ、別に何もないけど？」

「そお？ なんかあるんなら相談してよねっ」

「いやいやいや！ 本当に大丈夫だから！」

ピカチュウは、ミミみたくないわゆる『普通の女の子』とは面識がほとんどないためかなり焦る。ピカチュウの学校には調査好きな方とか、腹黒い方とかしかない。

「あれ？ ミミ、エドは来てないのか？」

「ん？ エドは休みだけど？ 昨日のコンクールで疲れたんだって」

ミミはそれが？ と言わんばかりの視線をポールにぶつける。

「いや、とくに深い意味はないんだけどさ。気になって」

慌てて弁解するポール。

「それじゃ、私は次の授業音楽だからもう行くね」

ミミは教室から出ていく。ふと時計を見るともうすぐ次の授業が始まる時刻だ。

「そろそろだね。一体誰が来るのかな？」

ルークはどんな先生が来るのかわくわくしているようだ。

クラスのメンバー半分程度が戻ってきた頃、チャイムが鳴り、ジャローダと……。

「こんにちは、ポケモン第2中学校から来ましたセレビィです！」

本当にセレビィが来た。どうしてこっちに来たのかは全く分からないが。

「ボルトの予想通り本当に来たね」

ルークが感嘆の声を漏らす。

「えっとお、私の勤めてる学校で迷ったらこっちに来ちゃいました、てへっ」

そう言って、おでこに手で叩くセレビィ。

相変わらずの天然を発揮している。確かにピカチュウの通う学校は広くて、迷うことはあるが、ここまで来るのはある意味奇跡だ。

今のしぐさを可愛いと思った男子は多いだろう。

「いいねえ、ピカチュウ君の学校にはあんな先生がいるんだあ」

ルークが『ピカチュウ』に対して話しかけてくる。

「今のうちただぞ、可愛いと思えるのは」

ルークは頭にクエスチョンマークを浮かべているように見えた。

「それでは、今日はセレビィ先生と一緒に授業していきたいと思えます」

「はい、それではみなさん！ 教科書の26ページを開けてください！」

「セレビィ先生、26じゃなくて28です、28！」

セレビィの間違いをすぐに指摘するジャローダ。

「あれ？ ごめんなさい。気を取り直して29ページ開けてください！」

「だから28ですって！」

こんなやり取りが続き、授業開始10分からやつと授業が始まった。やり取りを見ていて、ルークなどもこの先生の恐ろしさに気づいたようだ。

「気孔は葉の表にたくさんついてますからね」

「セレビィ先生、表じゃなくて裏です」

セレビィの言動に半ば呆れているジャローダ。

「ピカチュウ君も大変だね」

ピカチュウの苦勞を悟ったのか、心配するよう声をかけるルーク。

「まあな、最近はまだ慣れたけど」

ピカチュウの理科の勉強法は、頭の中で教科書とセレビィの言動を比べて、セレビィの言ったことは真実かを調べているという方法だ。はつきり言って、真実を言う割合の方が少ない。

「それでは、気孔が裏にたくさんついてることを証明する実験をやりたいと思います！ まずはガスバーナーを使って、葉の表を焼いてください！」

「いやいやいや、そんなことしたら葉が燃えちゃいますって！」

もう暴走しているセレビィ。それに便乗する人ももちろんいるわけ……。

「よし！ 葉を燃やすぞ！」

「絶対ダメ！ セレビィ先生の言うことを真に受けたらだめだよ、ポール」

ルークはいつでも水鉄砲が出せる状態で待機してながら言う。

「問題ないって、先生が言ったんだし」

悪乗りして葉っぱに火をつけるポール。もちろん葉は燃えてしま
う。

その瞬間、ルークから小さな水流が発射され、火は消火された。

その後、更に強い水流がポールを襲い、教室端までふっ飛ばしてしまった。

「ふう、悪乗りしちゃだめだよポール」

「だからってハイドロポンプは反則だろ……」

どちらも言っていることは正しい。

「えー、セレビィ先生が言ってることは危ない行為なので、真似してはいけませんよ！」

ジャローダが全員に注意する。セレビィは素でこついつことを言っている為、本人には全く自覚が無い。

「え？ 私何か間違ったこと言いました？」

「はい、思いつき言いました」

こんな調子でジャローダとセレビィの漫才は続き、ほとんど勉強しないまま終わってしまった。

「それじゃあ、これで授業を終わります。礼！」

全員の『ありがとうございました』が木霊し、ジャローダとセレビィは教室を去る。次はどの教室が被害に遭うのだろうか。

「なんかセレビィ先生の天然度がパワーアップしたような……」

ふとそう思ったピカチュウ。確かに前回の登場回より数倍天然に

なっている。

「そう言えば、セレビィ先生ってピカチュウ君と同じ中学校でしょ？」

「そうだけど？」

「ならば、セレビィ先生について行けば帰れるんじゃないかな？
さすがに付添いの先生も何人か着くと思うからさ」

ルークの考えは確かに合理的だった。

「なるほど、そうしてみるよ！　ありがとうルーク！」

ピカチュウもその案が気に入ったようで、あっさり承諾する。

ちなみに、コンクール会場まで送ってもらい、バスで帰るという
考えに至るのは、事件から2日後のことであった――。

ポケモン学園 in ピカチュウ！（後書き）

今回はボルト視点でお送りいたします。

こっちはカオスになりそうで怖いww

P.S.

たまにルークがブイゼルに変身していたので、そこを修正しました。
もう無いはず。

ピカチュウ「誤字脱字ならともかく、キャラクターを間違えるのは
さすがにないだろ」

誤字脱字もダメなような……。とにかく！ 変なところを見つけたら、感想かメッセージにてお伝えください！ なるべくそのようなことはないようにしていますが……。

ポケモン第2中学校inボルト！

ポケモン学園にピカチュウがいるということは、もちろんこちらの学校にはボルトがいるわけで……。

「ピカチュウ君と入れ替わったの？ 僕が？」

前回のピカチュウの慌てようとは裏腹に、落ち着いて話をするボルト。

「そう言うこと。取りあえず今日は学校にいなさいよ」

「そうしよっかなあ」

ボルトは、ムウマの提案を軽く承諾する。しかし、彼の周りにはすでに人だかりが。ムウマが話しているうちに、サンダース達が寄ってきたからである。

「ボルトって言うんだろ？ ここは賑やかというか、うるさい緑色の奴が2年にいるけど、ゆっくりしていけよな」

サンダースはリーフィアのことを軽く皮肉る。忘れているかもしれないが、サンダースとリーフィアは従兄である。

「サンダース〜！ 何先輩の悪口言ってるの？」

突如出現したのは、話題にでていたリーフィアだ。

「えっ？ どうしてあんたがここに？」

いきなりの登場に困惑するサンダース。

「ブースターから話を聞いて背景ぶち破ってきたわ」

リーフィアの前足の指さす方向を見ると、確かに大きな穴が背景に開いていた。

「そう言うネタは連発すると寒いし、そろそろやめようぜ」

一応リーフィアに忠告するサンダース。端からみれば何を言っているか分からないだろう。

「自重する気はないわ」

「もうダメだな……」

反省の色が見えないリーフィアを見て、手遅れだと確信する。サンダースは、前足を器用に使いリーフィアを教室の外へ連れて行く。

「あはは……。相変わらずですね」

初対面の時と変わらない印象だったようだ。

「私のテンションはこれなの！ だれにも止めさせないわ」

完全に暴走モードのリーフィア。サンダースはそんな彼女を見てやれやれと思いながら、そのまま教室の外へ投げ出した。

「ふう、うるさいのがいなくなったな」

「そうだね」 お姉ちゃんも少し上級生の自覚を持てばいいのに…」

付き合いが長いこともあり、リーフィアの扱いには慣れている2人。

「そうかな。リーフィア先輩は結構上級生っぽいけど」

ブイゼルは。リーフィアと同じパート（クラリネットパート）ということもあり、彼女の意外な一面を知っていた。

「いやいや、お姉ちゃんよりランクルス先輩の方が凄いつて」

「そう？ 確かに、ランクルス先輩も凄いきどさ」

「えーっと、口をはさんでもいい？」

不意にボルトが向かい合っていた2人に向かって声をかける。言葉の意味を理解した2人は、軽く頷く。

「リーフィア先輩って、なんでそんなに評判が違うの？」

リーフィアの数々の暴走を知らないボルトにとっては、当然の質問であろう。

2人ともしばらく思索していたが、先に口を開いたのはブイゼルだった。

「部活のときと、そうでないときの裏表が激しいのかなあ」

ブイゼルの結論を踏まえて、ブースターも自分の意見を述べる。

「お姉ちゃん、以外に部活と勉強は真面目だしね。私生活はめっちゃくちゃだけど」

「そうなんだ。ちなみに、勉強ってどのくらい出来るの？」

2人の話を聞いて、相槌を打つボルト。ボルトは私生活面のリーフィアしか見ていないので、勉強面でのリーフィアのが気になるのは当然だろう。

「うーん……、成績は上の中ぐらいかな。ブイゼル談だけど、部活のときは性格が正反対になるんだって」

実の姉のことなのだが、知らないことの方が多いようだ。ブースターは前足を顎の所に当てて、かなり思案していることからそのことが読み取れる。

「へえ、文武両道ってやつだね」

確かにボルトの言う通りなのだが、私生活が壊滅的なため、そこまでのいい評価を受けているわけではない。

「あ、そろそろチャイムが鳴るわね。そろそろ席に戻りましょ」

ムウマがそう言ったので、みんなの視線が時計に集中する。

「うん、もうすぐ鳴るね。あの先生だから問題はないだろうけど、取りあえず席にはすわっておこうか」

ブイゼルの言葉を聞くより前に、みんなは席に戻っていた。取り残されたことに軽くショックを受けたブイゼルだが、自分の席は目と鼻の先なため、それも仕方がないと思い、着席する。

「ういゝす。出席を取るぞ」

教師とは到底思えない挨拶で入ってきたのは、最近出番のなかったデンリユウだ。

「よし、全員いるな。それじゃあ朝のホームルームを終わるぞ！じゃゝな」

適当に生徒の数を数え、適当に朝のホームルームを終わらし、適当な挨拶で教室から去るデンリユウ。ここまで適当がそろつとある意味凄い。

「……。ここの教師ってみんなあんな感じ？」

ボルトが、一番席の近いブイゼルに身を乗り出して訊ねる。

「まあね、音楽のプクリン先生と数学のジバコイル先生以外はあんな感じ」

それが普通とでも言わんばかりにブイゼルは答える。

「あ！今日の1時間目学年集会があるから！忘れるなよ」

適当に終わらせすぎて、大事なことを伝え忘れていたデンリユウ。ドアから顔だけ出し、用件を伝えたらそのまま去って行った。

「学年集会か」。エンテイ先生から何かあるのかな」

ブイゼルが呟いたエンテイ先生とはこの学年の主任で、学年色のテーマ色にもなっているのだ。

この1年は『赤』が学年色で、エンテイの炎タイプから由来する。それで、必ず1年の生徒は赤いスカーフを、どこかに身につけなければならぬ。

話が脇道にそれたが、そろそろ本筋に戻そうとしよう。

「エンテイ先生もやっぱり変なの？」

今までの会話の流れからみて、その可能性が高いとみたボルト。

「うん……、少しね」

やや迷いがあつたが、やはり肯定するブイゼル。

「どこら辺が？」

「それはみれば分かるよ。取りあえず体育館に行こうか？」

「そうだね」

エンテイのことが気になるボルトは、軽い足取りで。一方ブイゼルは重い足取りで、体育館を目指した。

「ちょっと待ってよお！」

そこにやってきたのは、デンリュウと同程度空気が進んでいたチルタリスだ。

「あ、チルタリス君。ごめん、忘れてたよ」

今のチルタリスにとっては致命傷とも言える言葉をぶつけるブイゼル。もちろん本人に悪気はない。

「空気って言わないでよ……。それよりムウマちゃんは？」

「ムウマちゃん？ 先に行ってエンテイ先生を質問攻めにしてると思うよ」

質問攻め。この言葉が、ムウマのことをよく知らないボルトにはやはり気になるようだ。

「ムウマさんってどんな人？」

ここぞと言わんばかりにチルタリスが羽を挙げ答える。

「えーっと、気になったことを凄く追及する人で、ピカチュウ君の話だと、ストーリーカーまがいなことをするそうだよ。それで、この学校にはいないけれど、前の学校の人にはムウマちゃんが後ろにいる様な気がして不眠症になった人が多数いるんだって」

「確かにそんな感じだけど、喋りすぎじゃない？」

冷静にチルタリスに突っ込むブイゼル。

「うっう、たまにしかない出番なんだからいいじゃないかあ」

チルタリスの反応を見て、なんか悪いことしたなあと思うブイゼ
ル。

「ふーん、この学校って面白い人しかいないんじゃないの？」

ボルトがさり気なく核心を突く。

「それを言ったらおしまいだよ。この学校の特色ってことでいいん
じゃない？」

「それならいいけれど……」

そんなことを話していると目の前にピンク色の体をしたポケモン
が現れる。

「何をしているんですか！ ブイゼル君にチルタリス君！ それに、
そちらの方は一体どちら様なのですか？ 我がポケモン第2中学校
の生徒とはお見受けできないのですが……」

相変わらずの口調で登場したのはミュウだ。どうやらピカチュウ
とボルトが入れ替わっていることに気づいてしまったようだ。

「へ？ 僕？ 僕はボルトで、ポケモン学園の生徒だけれど、ピカ
チュウ君と入れ替わっちゃったみたいなんだ」

ボルトの話聞き、驚きの声を上げるミュウ。

「つまるところ、貴方はボルトさんで、ポケモン学園に在学中であ

ると。それで、我が校のピカチュウ君と入れ替わってしまったという訳ですね」

「う、うん。そういうこと」

ミュウの口調に若干引き気味のボルト。

「それなら話が早いですね。今日は我が校の教師であるセレビィ先生がポケモン学園の方へ迷い込んでますので。それで、セレビィ先生にご連絡を入れさせていただきますので、明日にはボルトさんの通うポケモン学園に戻れると思います」

「そう？ 良かったあ！」

ポケモン学園に戻れると聞き、舞い上がっているボルト。今にも誰かにぶつかりそうだ。

「それまでは、我が校で普通に授業を受けていただき、情けないピカチュウ君の為にノートを取ってはいただけませんか？」

「そのくらいなら別にかまわないですよ」

ミュウの影響でちょっと敬語混じりになっている。

「そうですか。ご協力感謝します。それと、ブイゼル君にチルタリス君。ボルトさんをエスコートしてくださいね」

「分かってるよ」

「もちろん！」

2人と即答する。

「ありがとうございます。で、最後に質問なのですが、何故ここにいるのですか？」

「何でって、学年集会に行くためだけど……」

特に何も考えずに答えるブイゼル。

「何で勝手に行くんですか！ 常識的にもクラスでまとまって行くでしょう？」

「それはそうだけど、さあ」

「反論は聞きたくありません。それでは一緒に1年1組までテレポーションしますよ」

反論しようにもミュウの気迫で出来そうにない。ここは素直に従う方が得策だと考えたブイゼル達は、だまってミュウに従う。

数瞬後、一瞬にして4人の影が消え去った……。

「ラティアスさん。2人とも連れて参りました。それと、ピカチュウ君は今日は休みです」

今度はラティアスの目の前に現れるミュウ。

「え？ でもピカチュウさんならそこにいるじゃないですか」

そう言ってボルトの方を指さす。

「あ、こちらの方はボルトさんと言いまして、ポケモン学園在学中の1年生です。何故か我が校のピカチュウ君と入れ替わってしまった為、今日に限り我が校で授業を受けていただくということになりました」

「そうなんですか、私はラティアスで、1年1組の学級委員をやっています。よろしく願いますねボルトさん！」

「うん、今日だけだけどよろしくね」

ラティアスはボルトと軽く挨拶を交わす。

「それじゃあ、集会行きますよ！」

その後、全員の方を振り向き、号令を出して進みだす。

「あれ？ ムウマさんは？」

ボルトの気になっていたポケモン。ムウマの姿が見つからず、辺りを見回すボルト。

「あー、ムウマちゃんをクラスみんなと行動させるのは至難の業だからね。もうミュウ君もラティアスさんも諦めてるみたい」

「そんなに自由奔放なのか……」

まあね、と笑って答えるブイゼル。

そんな話をしている間にも、体育館についたようだ。1組が最後だったようで、彼らが来たことを確認すると、すぐに集会が始まった。

「全員そろったな、今から学年集会を始めるぞ」

出てきたのはデンリユウ。やはり適当だ。

「それじゃあ、エンティがなんか生徒に言いたいことがあるって言うてるから、ほどほどに聞いてやれよ。まともに聞いて感染するなよ」

感染という言葉が引っかけたボルトだが、ブイゼル達は笑って聞き流しているため、あまり気にしないことにした。

デンリユウがステージから降り、代わりになんだか神っぽいやつがポケモンが出てくる。雰囲気だけは立派なエンティだ。

「この学年を統一する俺、つまりエンティから話がある」

この学園の教師、絶対に自分だけの特技を持っている。エンティはいわゆる痛いことばかり言う人だ。世の中ではこういう人のことを中二病。または邪気眼と呼ぶ。

「まず、この学校の風紀が乱れていおるといふ噂を耳にした。風紀が乱れているとなれば、外の世界から邪悪な怨念などを呼び込む可能性が高い。そこで、君達生徒諸君にはこれからの学校を憎しみや殺意で満ちた怨念などに乗っ取られないようにするため、風紀改善に取り組んでほしい。それと……」

「うつわー、なんだか痛々しいね……」

ボルトの第一感想だ。

「でも、言っていることは正しいからね。あまり聞き流せないんだよ……」

確かに、エンテイの言っていることを要約すると、風紀改善に取り組めということだ。間違っではない。

「ムウマちゃんが質問攻めにする理由も分かった気がする……」

エンテイの長い長い演説も『廊下を走るなど言語道断！ それでは悪意に満ちた何者かが、君達を転ばそうとするからやめろ』という話で終わった。

教室に戻ろうと廊下を進んでいると、プクリンに出会った。

「あれ？ 君ってこの前金賞を取ったポケモン学園の子だね？ 何でここにいるのかな？」

このプクリンは二重人格ではないかといわれるほど、顧問のときとその他の時の態度が違う。

「いやあ、この学校のピカチュウ君と入れ替わっちゃいましたねえ……」

隠す必要も既になくなったボルト。包み隠さず、真実を話した。

「そうなんだ！ それは災難だね……。そうだ！ 僕が送ってあげようか？ 授業はまだないし……。問題ないよ！」

「そうですか？ ありがとうございます！」

プクリンの魅力的な提案を素直に受け取るボルト。

「じゃあ、決まりだね！ 早速行こうか！」

「はい！ あ、短い間だったけどありがとうね！ 他の人にも伝えておいてくれるかな？」

「うん。いいよ。それと、プクリン先生。ピカチュウ君とセレビィ先生。被害者を増やさないうちに連れ帰ってきてください」

「分かってる。あの先生は放っておくと危ないからね」

プクリンもあの先生の恐ろしさを知っているようだ。

「今から行けば1時間目の終わりには付きそうだね。2時間目が終わるころには帰ってきているよ」

プクリン先生はそう言い残し、ボルトを連れてポケモン学園に向かった。

その後、何故かボロボロのセレビィと酷く疲れているピカチュウが帰ってきましたとき。

ポケモン第2中学校inボルト！（後書き）

報告

『TIPS2：この世界の歴史』は読まなくてもいいのですが、もし気になるのならばどうぞ。

後書き

これにてコラボコンクール編は終了です。

こんなコラボに協力して下さったブイゼルさん。ありがとうございました！

体育祭準備その1！ バトル部門に誰が出る？

徐々に日差しが陽気になり、気温の上昇とともに学校内のテンションも上がる5月中旬。今から、体育祭のメンバーの選出を行うところである。

この学校の体育祭は大きく分けて二つの部門がある。リレー、1500m走など、走ることを主体とした『陸上部門』。もう一つは『バトル部門』である。

このうち、バトル部門にでられるのは各クラス2名。3クラスで計6名の参加となる。

今は、バトル部門にでる2人を選出中なのだが……。

校内の北。ここにはバトル用のフィールドがいくつか設置しており、昼休みであればこの場所でバトルもすることができる。バトルフィールドは多種多様で、水で覆われたフィールド、たくさんの岩が突き刺さったフィールド。そして、何もない平地なフィールド。その平地フィールドに1年1組の影が。

「えーと、なぜこうなってしまったのかは私にも理解不能ですが、急遽ムウさん対サンダー君の試合をすることになってしまいました。司会を務めさせていただきます。ミュウと申します」

「いや、そんなことは知ってるから」

ミュウの野球の司会みたいな喋り方に突っ込むピカチュウ。……彼は突っ込み担当の道を歩ませる方がいいのかもしれない。

「それと実況のラティアスです。よろしくお願いします」

「ラティアスさんも……。今日はどうしちゃったの？」

ラティアスが何故実況をしているか。実は彼女には異様にバトルセンスがあり、それでみんなから推薦で選ばれたのだ。今は残りの枠をかけてサンダースとムウマが勝負しているというところである。

「それでは試合を始めさせていただきます。ルールはどちらかが戦闘不能になり次第終了のルールです。それではバトルスタートさせていただきますー！」

「サンダース。後悔しないでね？」

ムウマはこのバトルにかなりの自信があるようだ。

「それはこっちのセリフだぜ！」

サンダースの言葉がバトルスタートの合図となり、両者ともに動き出す。

「まずはシャドーボール」

ムウマの周りに突如黒い球体がいくつか発生する。その球体はムウマを囲うように回り始めた。

「高速移動からの電磁波！」

一方サンダースは自身のスピードを上げながらムウマに急接近し、相手をしびれさせることの出来る微量の電撃をムウマに当てようとした。

「そんなの食らわないわ」

ムウマに向かって飛んできた微量の電撃はムウマを囲う黒い球体によって阻まれる。

「ちっ！ あのシャドーボールが厄介だな……」

サンダースは一旦距離を置き、離れてムウマのすきをうかがう。

「あら、かかってこないの？ それじゃあこちらから！」

ムウマは、自身の周りを浮遊していた球体のいくつかを地面に勢いよくぶつける。そのせいで砂埃が立ち込め、周りを視界がかなり悪くなってしまった。

「ムウマさんは自身の出したシャドーボールを地面にぶつけましたが、これにはどのような意味があるのでしょうか？」

司会のミュウ、彼にはバトルセンスは皆無なため、行動の解説は全てラティースに任せている。

「視界を悪くすれば相手は迂闊に動くことはできません。そのため自分の攻撃が当てやすくなり、更には作戦の布石としても使える。やはりムウマさんのバトルセンスは群を抜いていますね」

冷静にムウマの行動を分析し、的確な解説を入れるラティアス。

視界を悪くしたムウマは、新しく作りだした黒い球体を3つほどサンダースに向けて打ち出す。

「うおつと！ 危ない危ない……」

視界の悪い中飛んできたシャドーボールをギリギリのところではやがんだり、横に動いたりして、回避するサンダース。さきほどの高速移動のおかげで全て避けきることができた。しかし、視界が悪いため反撃することは出来ない。

視界がある程度開けてくると、そこには大量のムウマとそれを取り囲む大量の黒い球体が目の前にあった。

「おそらく、影分身で自分とシャドーボールの数を割り増しにしていますね。本物は一つだけだと思いますよ」

ちなみに、バトルしている二人には解説の声は聞こえないようになっている。

「どお？ これが私の戦法よ」

「影分身か！ それなら放電だ！」

サンダースを中心に強力な電撃が周囲に放たれる。その電撃に当たったムウマの影は瞬く間に消えていく。そして残ったのが一人だけになった。しかしそのムウマは緑色のバリアに囲まれていて無傷だ。

「くそっ！ 守るを使えるのかよ！」

なお、補足的説明だが、この世界においては守るという技には使用制限がある。通常のバトルでは1回が基本だ。なお、見切りとは別の技なので、見切りと合わせれば、2回使うことができる。

「あ、さっきのシャドーボール、どこに行ったか分かる？」

「は？」

ムウマの質問の意図が分からないサンダース。しかし、ムウマからあふれ出るとす黒いオーラを感じ取ったので、辺りを見渡してみた。

辺りには何もなかったので、頭上を見してみる。見てみるとさっきかわしたはずのシャドーボールがすぐ近くにあった。

「マジかよ！」

しかもその黒い球体はサンダーススピードも早く、既に目の前まで近づいていたシャドーボールを避ける術などサンダースが持ち合わせているはずもない。その黒い球体をもろに受けてしまう。その衝撃で辺り一面に砂埃が舞う。

「ふう、まだまだ行くわよ。って、え？」

「隙ありい！ 雷のキバ！」

ムウマが追撃しようとした隙にサンダースは一気にムウマの背後まで回り込んでいた。そして雷のキバを決めたのだ。それに気付か

なかったムウマに直撃してしまう。衝撃でフィールドの端まで吹き飛ばされてしまった。

「ラティアスさん。一体今のは何があったのでしょうか？」

司会のミュウがラティアスに訊ねる。

「はい。ムウマさんは、最初の方にサンダース君に向けて放ったシャドーボールを操作し、上空へ移動させました。その後サイコネシスで固定しておき、頃合いを見て発動したでしょう。サンダース君はシャドーボールを受けた後、その衝撃を利用してムウマさんの背後まで回り込んだのだと思います。シャドーボールを受けながらも攻撃する姿勢は素晴らしいと思います」

「ふーん、やっぱりそのくらいはできるのね」

自分に攻撃が当たったことに感心するムウマ。

「なめてかかると痛い目を見るぜ！ それ、10万ボルト！」

サンダースの体から、先程の放電よりも少し範囲の小さい電撃がムウマに向かって直進していく。

「ふん、そんな単調な攻撃には当たらないわ。サイコネシス」

ムウマめがけて飛んできた10万ボルトを、超能力を使ってその場に止める。普通なら跳ね返すのだろうが、サンダースには電気を吸収する特性がある。それを知っていたムウマは、その電撃をビゼルの方へ軌道をずらす。

「うそ！ ちょっと何で！？」

まさか自分に攻撃が飛んでくるなんて夢にも思わなかったブイゼル。左右にバタバタ動きながら、非常に慌てている。

電撃がブイゼルに当たる直前、突如現れた謎のエネルギー体につかり、相殺した。

「危ないですねえ、大丈夫でした？ ブイゼルさん」

駆けよってくるラティアス。このエネルギー体を放ったのはラティアスのようだ。

「大丈夫だけど……」

その言葉を聞いて胸をなでおろすラティアス。

「よかった。それじゃあ私には解説がありますので！」

そう言って、ラティアスは元の席に戻って行った……。

そんなことをしている間にも、飛び交う電撃と黒い球体。

「シャドーボール。サイコキネシス。未来予知」

ムウマはその場で目を瞑り、集中力を高め3つの技を同時に繰り出す。

最初に作りだされた黒色の球体はサンダースめがけて飛んでくる。しかし、軌道が単調で簡単に避けることが出来た。

「なんだ？ あいつどうかしたのか」

「甘いわね。上空くらいは注意しなさい！」

サンダースが油断していると空の彼方に黒い球体が。しかし、スピードが並大抵の速さではない。サンダースの走る速度以上の速さがあつた。

そう、ムウマの繰り出した黒い球体だ。更には紫色の念力でコーティングしてある。不規則な動きをしながら近づいてくるそれに反応できるはずもなく、球体に直撃するサンダース。かなりの威力だったのかフィールドを区切っているフェンスまで吹き飛ばされてしまう。

「私には何が起こったのか全く分かりません。ラティアスさんはどうですか？」

「サイコネシスでコーティングしたシャドーボールをぶつけましたね。しかし、シャドーボールはどこから作り出したのでしょうか？ 私にも見当が付きません」

ラティアスの不思議そうな目線に気づいたムウマ。自分が今やったことについて説明する。

「あ、あれね。シャドーボールを飛ばして、サンダースの後ろに回り込ませた後、サイコネシスで操作してぶつけたのよ」

どこか得意げなムウマ。

「しょうがない。切り札出すか。身代りから穴を掘る！」

サンダースは自分の身代りを作りだし、それと一緒に穴の中に入り込む。

「サンダース君は何をやっているのでしょうか？ ムウマさんの特性は浮遊。当たるはずの無い技を繰り出してしまいました」

フィールドには2人のサンダースが開けた穴がたくさん。地上に出てはまた掘り返しの繰り返しである。心なしか、2匹以上いる気もするのだが。

「危険な気がするわ。保険かけておいてラッキーだったかも」

何やら怪しい笑みを浮かべるムウマ。彼女ほどの実力なら今攻撃するのもいいが、サンダースの放つ技に興味があったので、ずっと見守っている。

「そろそろ良いな」

一斉に飛び出してきた、サンダース達。その数はざっと見ても10匹程度だ。

「なるほど。質より量というわけかしら？」

「もちろん！ 俺の得意戦法さ！」

サンダース達全員が自分の口辺りに黒い球体を作りだし、ムウマに当てようとする。これで勝負を決めるようだ。

「さすがにこれは食らえないわねえ。ということで、保険発動するわ」

今まで見せたこともないような笑みでサンダースを見つめる。ムウマがそんなことしているとは夢にも思わず、真正面まで突っ込んでいくサンダース。

全員のサンダースから黒い球体が放たれる。ムウマのよく使うシャドーボールだ。その球体はムウマめがけて飛んでいく。そして直撃するはずだった。

しかし、何故かムウマは上空にいて、攻撃をかわしていた。そして、サイコキネシスで全員の動きを止める。簡単にできることではないらしく、目をつむって集中力を高めている。

「サンダース君は地面から出る前に身代わりを使い人数を増やしましたね。ムウマさんは確証はないですが、多分未来予知を応用してテレポートしたのだと思います。これは決着がつかしましたね」

ムウマは得意技であるシャドーボールの操作で、器用に攻撃を身代りに当てていく。

そうして、本体のサンダースを見つけることのできたムウマ。

「はあ……、もう降参だ。お前には恐れ入るよ……」

「ふむ。サンダース君は戦闘続行の意思が無いとみて終了。この勝負ムウマさんの勝ちとさせていただきます」

ミュウのその言葉を聞き届けた後、ムウマはサイコキネシスから

サンダーズを解放した。

体育祭準備その1！ バトル部門に誰が出る？（後書き）

この小説始めてのバトル描写。 疲れました。

まあ、体育祭に向けてもう少し腕を磨いておきたいですね。 今回は完全に頭脳戦でしたから。

次回はテスト関係のお話です！

迫りくるテスト、目前の体育の授業……

5月の温かな日差しも少しずつ陰りを見せる5月の下旬。雨が多くなる少し前の季節である。

この頃、新入生を待ち構えているのは、初めてのテスト期間だ。

「ついことで、初めてのテストは6教科。国語、数学、英語、理科、社会、ポケ学だ」

ポケモン学——。これはポケモン達の使う技、タイプなど、ポケモンに関することを取り上げる。なお、ポケモンの体内の器官などに関しては理科で取り扱っている。

「範囲は配った紙の通りだ。勉強するかは個人の自由だけどな」

デンリユウが言うと、サボっていいと言っているようにしか聞けない。

「ホームルームはこれで終わりだぞ」そのまま堂々と去っていくデンリユウ。このクラスでは、デンリユウが面倒だからと言い、号令をかけないまま終わることになっている。

「テストか、どうしよう……」

テストに対して不安を抱いているのはお馴染みピカチュウ……ではなく、学級委員のラティアスだ。

ラティアスは、ラティオスからテストは大変だと前々から聞かさ

れてたため、かなり不安な状態になっている。

「どーしたの？ テストのこと？」

そこに現れたのは、ラティアスの親友でもあるシャワーズだ。彼女は3組の生徒のはずだが、既に1組の教室にいた。移動時間、わずか3秒である。

「あ、シャワーズかあ。そう、テストのことなの」

「天才なラティアスなら問題ないっしょ？ あいつ（グレイシアのこと）もちゃんと対策すれば問題ないって言ってたし」

完全に口調が男勝りなシャワーズ。

「シャワーズ……、励ましてくれるのは嬉しいんだけど、もう少し口調にも気を遣おう？ それより！ 私は天才じゃないもん！」

天才という言葉を頬を赤く染めながらも、否定するラティアス。やはり天才は言われるのは嬉しいのだろう。

「天才だって。少なくともうちよりは頭いいじゃん」

「そうそう、俺よりも頭いいしな」

そこに突如現れたのはラティオスだ。彼には光を屈折させ、姿を見えなくする特技がある。それを利用して授業を抜け出したり、夜中まで外で遊んだりとしている。今回もそれらと同じようだ。

「あゝ！ また朝のホームルームを抜け出てきたでしょ。いい加

減にしないと、 그레이シアさんにこのことを教えるわよ！」

「それはないだろ！ あーもう、分かったよ」

그레이シア、という単語が出ただけで、ラティオスはすぐさま教室を出ていく。

「ラティオスが可哀想に見えてきた。だって、お姉ちゃんには頭が上がないもん」

シャワーズがラティオスを憐れむ。ため息をついているところを見ると、自分とラティオスが重なったらしい。

「お兄ちゃん是不真面目すぎるの。 그레이シアさんにもっと鍛えてもらわないと」

ラティアスは、ラティオスのことを親目線で心配しているように見える。ラティアスの方が年上のようにだ。

「まあ、話は戻すけどさ、うちでテスト勉強でもする？」

「どうしようかな……。まだ2週間もあるし……」

今日は範囲が公開された初日なので、まだまだ時間には余裕があった。しかも今日は木曜日なので、ラティアスは部活もある。

完全に悩みこむラティアス。唸り声をあげながらずっと思索している。

一方シャワーズはのんきなもので、悩んでいるラティアスをよそ

に、携帯をいじり始める。どうやっていじっているかはあえて言わない。

シャワーズが携帯でメールを打ち終える頃、ラティアスはそつと口を開いた。

「グレイシアさんが良いって言ったら行くわ」

「お姉ちゃんならいいって言うでしょ。なんなら今聞いてみる？」

シャワーズをお願いするねと一声かけたラティアス。シャワーズは、高速で文字を打っていく。シャワーズは電子機器は非常に使い慣れているので、このくらいは楽勝だった。

「今送った。帰りまでには連絡来てると思う」

「分かった。それより、何で教室にみんながいないのかな？」

ラティアスにそう言われて、キョロキョロと辺りを見渡すシャワーズ。確かにクラスの人たちは一人もいなくて、授業表には1時間目、体育と書いてあった。

「「あー！ 忘れてた！」」

二人の声が木霊する。この学校の生徒数と学校の広さの兼ね合いにより、体育は全クラス合同で行われることになっている。

時計を見ると授業が始まる3分前。今まさにカチツと鳴り響き、残すところ2分となった。

「あ、うちは体育見学するから！ よろしく伝えといてね！」

そのまま保健室の方へと退散していくシャワーズ。一人取り残されたラティアスは、急いで校舎の南にあるグラウンドを目指し始めた。

「遅れましたあゝ！」

そう言いつつ登場したラティアスであったが、まだ体育の教師が来ていないためセーフだ。

「あれ？ ラティアスさんどうかしたの？ 遅刻するなんて珍しいよね」

話しかけたのはチルタリスだ。ラティアスとは同じドラゴンタイプということもあり、結構仲が良かったりする。シャワーズという共通した友達がいたのもその一因だ。

「あ、チルタリスさん。実はカクカクシカジカ……という訳なの」

今までのことを手短に話すラティアス。何故か身振り手振りも加わって、かなり分かりやすい説明だった。

「テスト勉強かあ、そんなのまだしなくても大丈夫じゃない？」

これが1年性の大半のテストへの感想だろう。終わった後に聞くと、これと正反対の答えが返ってくるのがまた面白い。

「私は心配で……。お兄ちゃんから色々聞いていたせいかも」

そう言って笑うラティース。

「そうだよ、心配しすぎるのは良くないよぉ」

「それより、デンリユウ先生はまた来てないの？」

体育の教師は、実はあの適当なデンリユウだったりする。もちろん授業内容も適当だ。

ラティースがまたと言ったのは、前にも遅刻してきて授業を潰したことがあったからである。

「デンリユウ？ そのうち来ると思うよ」

一応礼儀正しいチルタリスでも、デンリユウには語尾に先生とつけない。

「はぁー、本当にここの学校には、適当な教師が多いですよね」

「セレビィ先生もかなり適当だね。あれは地でやってるみたいだけど」

「そうそう！ それより、エンテイ先生も……」

しばらくは、その話題でチルタリスと盛り上がった。話のネタが尽きてくる頃、やっとデンリユウが出てくる。チャイムが鳴ってから実に30分が過ぎていた。

「おーい、体育祭のメンバーについての話があるからこっちに来いよー」

下駄箱の日陰になっている所に腰をおろし、自分で発電した電気
でメガホンを使っている。環境にとっても優しいメガホンだ。

「あ、呼んでるね。行こうかラティアスさん」

「あ、そうだね」

二人は飛んでデンリユウ達の方へ向かう。

「よし、全員集まったな。いきなり本題に入る。まずは体育祭のメ
ンバーだが、俺が勝手にきめといた。そこら辺よろしく。後で教室
に張ってある紙を見とけよ」

「おいおい！ ちょっとまって！」 「勝手に決めるなこの似非竜^{えせ}
！」 「俺たちに決めさせるー！」

上記のような罵声が飛び交ったが、デンリユウは気にするそぶり
も見せず、そのまま続ける。

「もひとつ、バトル部門にでる生徒達の発表を今するぞ。1組から
ラティアスとムウマ。2組からはシャンデラとオノノクス。3組か
らはガブリアスとバンギラスが出る」

「異議あり！」

そう叫んだのはムウマだ。

「どう考えても2組と3組がガチすぎます。種族値の上限を決めるべきです！」

種族値とかわけのわからない単語がムウマの口から飛び出す。

「ムウマさん。何故種族値という言葉を知っておられるのですか？
高校1年生で習う内容だったはずですが」

ミュウが割って入ってくる。彼には自覚はないだろうが、秀才をアピールしているようにも見える。

「え？ 種族値のことはゲンちゃんに聞いたわ。2組は攻撃特攻140以上の超火力メンバー。3組は600族のチームだわ。砂パっばいし」

ムウマの口から聞きなれない単語で続出し、困惑するミュウ以外の生徒と、デンリュウ。

「確かに2組と3組のメンバーは強いです。でも、戦略を持っていれば勝てるのでは？」

「うっ……」

痛いところを突かれ、言葉に詰まるムウマ。

「おい、種族値ってなんなんだ？ 140以上とか600族とか、俺マジ訳分かんないし」

デンリュウがミュウに訊ねる。もう教師でも何でもない。

「先生……。高校で習ったはずなのですが……。丁度いいです。この際説明いたしましょう。種族値とは、ポケモンの種族ごとに決まっている……（長すぎるため省略）」

「なるほど。分かった。ありがとなミュウ」

お礼の言葉を述べ、頭を下げる。どっちが教師なのか本格的に分からなくなってきた。

「いえいえ、知識を持っている側として、当然のことをしたまでです」

謙遜するミュウ。あくまで当然のことをしたまでだと思っているらしい。

「ムウマの意見も一理あるが、ここの体育祭は勝てれば正直何してもいいので、このメンバーで決定することにする」

何してもいいという言葉に反応したポケモンが2人。ムウマとサングラスである。

二人は何やら黒い笑みを浮かべ、よからぬことを考えているようだ。どちらも同じようなことを考えているのは、顔で分かる。

その時チャイムが鳴った。ミュウの説明と、デンリュウの遅刻によつて、ほぼ何もしないまま体育の時間が終わってしまったようだ。

「んー。チャイム鳴ったな。それじゃあここまでにするか。気いつけて戻れよ」

そう言ってそそくさと下駄箱から上がっていくデンリュウ。下駄箱であるが、ほとんどの人が上履きも運動靴も使っていないので、かなりきれいな状態で保持されている。

「なんか何もせずに終わっちゃったな」

そう呟いたのは、今回出番のなかったピカチュウであった……。

迫りくるテスト、現在の体育の授業……（後書き）

色々やっちゃった感のある16話ですが、後悔はしていません。

種族値関係の話はもう出ないと思います。今回はたまたまネタとして使えそうだったので出しました。

テスト勉強は大変だ（前書き）

パロディ要素、ここら辺から本領発揮です。

早速一つ仕込んでありますので、暇な方は見つけてみてください。

テスト勉強は大変だ

体育の授業は何もせずに終わり、その後は特に何事もなく全て終了した。

「部活が活動休止になるのは3週間前からだからね！ みんなサボらないように！」

「セレビィ先生、3週間じゃなくて3日前からじゃね？」

シャワーズの突っ込みに、クラス全体が笑う。

「ま、あんまり変わらないし、いいよね」

「いやいや、全然違うから！ そこら辺気をつけようよ！」

二度目の突っ込みを合図に、勝手に下校を始める3組の集団。

その中で、ぽつんとクラスに残っているポケモンがいた。青い体にひれのような尻尾、クラスの突っ込み役を担っているシャワーズである。

「さーて、ラティアスはこっちに来ることになってるから、その間ケータイでもいいじってよ」

どこからともなくケータイを取り出し、いつもの奴にメールを送る。

教室にはもう誰もいないため、カチカチとケータイで文字を入力

する音だけが教室内を包み込んだ。

そう時間も経たないうちに送信ボタンを押す。

「送信完了つと！ 早く返信来ないかなあ」

相手のことが凄く気になるようだ。その顔は何やら満足げな表情。

「シャワーズ！ 行きましょ」

そこに彼女の親友であるラティアスがやってきた。

「あ、ラティアス。そのままうちに行くから！」

つまり、勉強会をやるということがラティアスにも分かり、小さな声でやった♪ と呟いた。

その間にも、ラティアスに駆けてくるシャワーズ。既にラティアスのすぐ近くまで来ていた。

「お待たせ！ そんなじゃ行きますか」

「だから、喋り方が最近どんどん悪くなってるよ。直さなくていいの？」

ラティアスの注意も、はいはいと軽く受け流し、話題を勉強方面に持っていく。

「なんの勉強するの？」

「秘密にしておこうかな。これ言ったら多分逃げちゃうし」

シャワーズの当たり前の問いかけを、黒い笑みで返すラティアス。グレイシアに少し似てきているようだ。

ラティアスからの言葉を聞いた途端に逃げ出そうとしたシャワーズだが、すぐにサイコネシスで捕えられる。

「逃げちゃだめだからね、それじゃあ、Let's go!」

「変なところに英語使うな〜!」

そんなこんなで、シャワーズ家へとたどり着いたラティアス御一行。外見は普通の一軒家とさほど変わらない。屋根は薄い青色だ。おそらくシャワーズとグレイシアの色から来ているのだろう。

「あれ? おかしいなあ、グレイシアさん、まだ帰ってないのかな」

扉が施錠されっぱなしのことを不思議がるラティアス。それもそのはず、今までグレイシアはラティオスとは違い、真面目で遅刻など1回もしない人だ。その人が遅れているのだから、ラティアスの反応は正常だろう。

「しょうがない、秘密の暗号入れて開けるから」

「秘密の暗号?」

ラティアスは、シャワーズの口から出た不審な言葉を繰り返す。以前まではそんなものは一切なかったはずだ。

「そ、セキュリティ強化のために取り付けた。2種類あつて、鍵を開けた後に入力する奴と、鍵がなかった時に入力する奴」

言いきるよりまずは、暗号を入力するシャワーズ。扉の向こうから、カチャリと鍵のはずれる音がした。

「開いた。じゃ、入ろう」

「う、うん」

中は、今開けた扉の外から差し込む光がなく、非常に薄暗い状態だった。

「あ！ 玄関以外のブレーカーが落ちてる！ あいつまたやったな」

シャワーズはブレーカーのある部屋へと向かう。

「大丈夫かなあ、確か来年には中学校へ入学だよね……」

ラティアスは、シャワーズがあいつと呼んでいたポケモンの心配をしている。

「あゝごめんなさいごめんなさい。もうしないから許してー！」

「それ何回目？ 同じ言い訳は通用しない！ あんたもう6年だし、自覚を持てー！」

何やら叫び声と怒声が上から聞こえてくる。叫び声の方はもう訳の分からない状態になっている。

「大丈夫、じゃないのかなあ……」

ラティアスの心配しているポケモンの名はイーブイ。この家の末っ子であり、長男である。

いたずら好きで、よく家の電化製品を全部起動し、ブレーカーを落とすいたずらをする。今回のように。

「ラティアス〜！ 上がってきていいよ！」

「分かった〜、今行く！」

ラティアスは勉強のことより、イーブイのこの方が心配なようだ。心配な表情のまま階段を上がって行った。

2階についたラティアス。シャワーズはお茶を出してテーブルの近くに座っている。一方イーブイの姿は見当たらない。

「お邪魔します。あれ？ イーブイ君は？」

「イーブイ？ そこにいるよ」

シャワーズの尻尾がさした先にはベランダがあった。窓は施錠されているようで、扉をガリガリとひっかいているイーブイの姿もある。

声は聞こえないが、多分開けてと言っているのだろう。

「あ、大丈夫大丈夫。いつものことだし、お姉ちゃんが帰ってくるまでだから」

「ふん」

そっけない返事を返すラティース。目は完全にイーブイの方を向いていた。そのうち目だけではなく顔も、しまいには体もイーブイの方に向けている。自分より年下の子だし、昔から仲良くしてたので、心配しているのだろう。

「大丈夫だって、お姉ちゃんももうすぐ帰ってくるし。それより勉強始めない？」

「それなら、いいんだけど……」

それでもイーブイのことが心配なようで、勉強を開始しても、時々イーブイの方に目を向ける。

お喋りを交えながら、数学のプリントを1枚終わらせた頃、扉の開く音がする。

「あ、お姉ちゃん、おかえり」

「ただいま。それより、またイーブイを外に出してるでしょ？ うるさくて近所迷惑だし。中に入れるからね」

イーブイを中に入れる理由はこれらしい。

グレイシアは窓を開け、イーブイを中に入れる。

「これからはもう少し静かにしてよね。甲高いから響くのよ、声が。次うるさくしたら、三途の川に流してやるから」

脅しモードのグレイシア。暗に殺すと言っているようなものだ。

「へいへい、分かりました」

そんな脅しも軽く受け流し、下に向かって駆けていくイーブイ。

そんな様子にやれやれという感じのグレイシアは、今度はラティアスの方を向き、悪戯のような笑みを浮かべてラティアスに話しかける。

「そうそう。ラティオスが入り込んできたみたい」

その言葉を聞いて、空気が一瞬ねじれる所があった。

「ばれるの早っ！」

ラティオスはばれてしまったら仕方がないとしてもいうかのように、姿を現す。窓側の方にいるところを見ると、さっきグレイシアが窓を開けた途端に入ってきたらしい。

「お兄ちゃん！」

ラティアスが、怒ったような感じでラティオスに駆け寄る。

「あ、いや、うん、えー、俺も勉強しに来たんだが」

「嘘だっ！！！」

ラティアスのいきなりの大声に、ラティオスは固まる。外の小鳥

たち（決してムツクルなどではない）は木から飛び出す。

「あ、ごめんなさい。いきなり大声出しちゃって」

周りの空気を感じ取ったのか、謝罪の言葉を述べるラティアス。

「……びつくりしたけど、まあいいじゃん。それより勉強も飽きてきたし、息抜きにテレビでも見ない？」

「俺は賛成」

ラティオスがテレビの前に向かおうとするのをさえぎる 그레이シア。
ア。

「あんたは勉強してないでしょうが。私達はそっちでテレビ見てるから、あんたは勉強してなさい」

「いや、 그레이シアも勉強してな」問答無用。行くわよラティアスちゃん、シャワーズ」

ラティオスの言葉さえさえぎり、さつさとテレビの前を陣とる3人。シャワーズだけはラティオスを気使うそぶりを見せたが、テレビの誘惑に負け、テレビを見始める。

「俺、3年の内容は1つも分かんないんだが、どう勉強すればいいんだ？」

本音を口にしたラティオス。彼は非常に頭が悪く、ラティアスに追い抜かれそうな位置にいるらしい。

そんなラティオスの心情を知るはずもなく、3人は適当にチャンネルを回している。

『書きやすい！ 手の疲れないシャープペンシル発売中』

『絶対に無くさない消しゴムも発売中！ お買い求めはお近くの文具店へ！』

3人の目についたのがこのCMだ。上はともかく、下の無くさない消しゴムは欲しいようだ。既にシャワーズがお金を持って出て行った。

「無くさない消しゴムねえ、胡散臭いわ」

「ごもつともな意見を出す 그레이シア。」

「そうですね。シャワーズは買いに行っちゃったけど」

そこで2人の会話は途切れる。つまらないテレビを流し見して、結構な時間がたった時、シャワーズが帰ってきたようだ。扉を開ける音が聞こえる。

「たっ だいま〜！」

出てきたのは、シャワーズより一回り小さい茶色の……。

「イーブイ君だったの？」

「ん？ ラティ姉ちゃん、シャワ姉どこ行つたの？」

子供らしい喋り方をするイーブイだが、これでも現在6年生。来年には中学校に入学するのである。

「うん、無くさない消しゴムを買いにね」

「無くさない消しゴム！？ それ凄いじゃん！」

目をキラキラさせて、無くさない消しゴムを想像しているイーブイ。子供らしい発想で、自分の後ろを付いてくるとか、ずっと目の前に浮かんでいるとか、面白い話をラティアスにしていた。

その間、ラティオスは、ラティアスの数学の問題を自分のノートに写し、それを解いていた。普通なら1年の問題などスラスラ解けるはずなのだが、かなり悪戦苦闘しながら解いている。どうやら重症のようだ。

「ただいま〜！」

今度こそシャワーズが帰ってきた。

「消しゴム見せなさいよ」

帰宅後すぐに詰め寄る 그레이シア。結構気になっていたようだ。

「私にも見せて」

「ボクもボクも！」

結局ラティオスを除く全員がシャワーズに詰め寄る。

「待って、だから待ってって！ 今開けるから」

周りの人ばかり、と言っても3人だが、それらを尻尾で振り払い、消しゴムの袋を開ける。外からみると、普通の消しゴムにしか見えない。

「えっと、説明書によると、『その消しゴムに糸を通す穴が開いています。そこに糸を通して、アクセサリー感覚で身につけてください』だって。ふざけてんのかなこれ」

かなり良く見ると、確かに両端に穴があいている。ただ、お世辞にもアクセサリーのようなデザインとは言えない消しゴム。はつきり言って詐欺商品だ。

「電話する？」

グレイシアがシャワーズに悪魔の誘惑をする。グレイシアが電話をかければ、確実にこの商品の発売は中止になるだろう。

「しよっか。じゃよろしく」

シャワーズは、後をグレイシアに任せ、自分はテレビの画面を切り替え、ゲーム画面にした。

「2人ともやる？ まだ空いてるけど」

「やろっかな。かなり久々だしね」

「ボクもやる。ラティ姉ちゃんには負けないんだから」

数時間後、既に外は漆黒となっており、9時は余裕で過ぎていることが分かる。

「だから、このデザインでそれは無理だと言ってるでしょ？ 分かんないのこの脳筋。あんたじゃ話にならないから社長出しなさい。出さないなら乗り込んでやるわ」

「負けるかぁ！ うちの無敗記録を更新する！」

「それなら、ボクと……」

「私は……」

「それを破る！」

3人はゲームに熱中し、グレイシアはまだ電話中。

ただ1人、ラティオスだけがずっと勉強をしていたようだ。

「お前ら勉強しろよ！」

そんな彼、ラティオスの悲痛の叫びは、誰にも聞かれることのないまま消え去っていった……。

テスト勉強は大変だ（後書き）

今回、パロディネタも仕込んであります。知っている人ならだれでも分かるようなネタです。

それでは〜！

ブイゼルの水やり奮闘記（前書き）

注意点があります。

これは前から予定していたことなのですが、この話、途中は1人称で進みます。最初と最後は3人称です。

ブイゼルの水やり奮闘記

6月と言えばいわゆる梅雨の季節だろう。もちろんそれはこの世界でも例外ではなく、今もしとすると雨が降り始めた所だ。

雨の音を聞き、不安になるポケモンが1人。家庭菜園の好きなブイゼルである。

「あ、また雨かあ」

彼は最近、というかこの季節には毎回同じことに悩む。それは育てている木の実の水やりだ。

ブイゼルの家には屋上はあるがベランダなどはない。つまり屋根がある所に木の実を置いておくことが出来ないのだ。

「はあ、家の中に入れたっていいじゃないか」

ブイゼルの母は綺麗好きのため、木の実を中に入れることを許してくれない。玄関も汚れるからダメだと言われている。

屋根がないということは、雨が降れば水を与えてはいけなく、雨が降らなければ水を与えなければならない。しかし、親はこのことを認めていないので、自分でどうにかするしかないのだ。

ペットボトルを土に刺して置いたり、一か八かに賭けて水をやらないでおいたり（その日は雨が降らなかったことなど言うまでもない）したが、どれも失敗続きである。

そのことがこの季節、ブイゼルの悩みだ。

注意：ここから先はブイゼル視点の話となります。この小説始まって以来初めての一人称です。

「ありがとうございました〜！」

今部活が終わった。全員の声が響いてとても気持ちいい。音楽室の構造上そうなっているから当然かな。

僕の所属している部活は吹奏楽部。仮入部の人に聞いた演奏がすごく、勢いで入部したところだ。

「ブイゼル〜、一緒に帰ろーよー」

隣から話しかけてきたのは、この部活の1年で唯一の男の子であるブースターだ。どっちが上手いかって？ ブースターの方が上手いに決まっている。

「ごめん、木の実を見なきゃいけないから。じゃ〜ね〜」

「あ、じゃあまたね〜」

そのまま走りだす僕。雨が降っているが水タイプなので気にならない。今頭にあるのは木の実のことだけだ。

この世界の木の実は、1日2日では実らない。どこかのゲームとは違うとだけ言っておくよ。

だからこそ、愛情をこめて育てている。今僕が育てているのはクラボの実とオレンの実、後はピカチュウ君が大量に食べるモモンの実を多めに作っているかな。

大変なのはクラボの実だ。モモンの実は多少水が多くてもおいしく食べられるけど、クラボの実はそうはいかない。何故なら、クラボ特有の辛さが無くなってしまいうから。

「あーもー！ 家までが遠く感じる〜！」

そんなことを言いながら、雨の降る街を全力で駆け抜ける僕。

全力で走っていたから覚えていなくても、大体5分ぐらいで家についたと思う。

その勢いのまま階段を駆け上がり、屋上へ向かった。

「なんとか間にあった……」

そこには、雨避けと思われる傘のもと、濡れていないクラボの実があった。

今回の作戦は傘をさしておいて、雨避けにするといいものだったんだ。成功して良かった。

それなら何で早く帰ってきたのか？ 風で傘が飛ばされる危険もあったからだよ。

「明日もこの方法で行こうっと！」

今日は月曜日。今週はいい感じだと思った僕であった。この日から5日間、雨に関する日記をつけてみたんだ。ここから下はその日記の内容だよ。

次の日、火曜日。

今日は雨が降らなかった。その日の夕方、モモンの実に多めに水をあげたんだ。その後は自室に籠ってテスト勉強。9日後にはテストがあるから勉強しないとね。

更に翌日、水曜日。

今日は色々あって、雨が降ったりやんだり忙しい日でした。先生のかくせに喧嘩するのは大人げないと思うなあ。

そのまた翌日、木曜日。

今日は塾があるから、部活終了後そのまま塾へ向かいました。練習しないとうまくなれないしね。早退はあまりしないようにしていきます。

雨は夜に結構降りましたが、クラブの実は無事でした。無事に花も咲いて、実がなるのも時間の問題。楽しみで仕方がないです。

1週間日記の最後、金曜日。

……。僕は傘を過信しすぎていたみたいです。今日は雨に加えて風もありました。それで傘が飛んで、なんと音楽室の方まで飛んできました。それを見た僕は急いで帰りましたが、そこにあったのは

土がぐしょぐしょになったクラブの実のプランターでした。

かなりショックでしたが 一応実らしきものはあったので、このまま育てたいと思います。おいしくなるといいなあ。

注意その2：ここから3人称に戻ります。

日記を書いた次の日、つまり土曜日だ。ブイゼルは部活があるので学校へ向かった。

音楽室に着き、クラリネットを取り出して練習を始める。しかし、どこかおぼつかなく、いつものような練習が出来ていないブイゼル。昨日のことをかなり引きずっているらしい。

「大丈夫かな、ブイゼル」

ブイゼルのことを心配するポケモンが1人。ブイゼルが家庭菜園が好きなことを知っていて、昨日の傘の件も知っているブースターだ。わざわざ隣の教室にいるブイゼルを見に来るほど心配している。

「あ、ブースター！ちゃんと練習しなさいよ！」

彼の姉、リーフィアが怒る。ブースターは昔からよく音楽室に来ていて、楽器を始めたのもかなり小さいときからだ。歴はここにいる先輩よりも長い。

しかも、かなり上手なので、彼が練習を少し抜け出しても誰も文句を言えない、否、言わないのだ。

そんな彼を怒れるのは、ブースターよりも楽器経験が長く、上手いリーフィア。つまり彼の姉だけなのである。

「分かってる……。でも、ちょっと来てもらっていいですか？」

一応彼らのルールで、公の場では敬語を使うというものがある。リーフィア曰く、1人でも例外がいないと、他もダメになってしまうから、だそうだ。

ちなみに、ブースターはリーフィアにブイゼルのことを話すつもりなのだ。

「ちょっとだけよ。そうね……。3分だけ」

リーフィアの条件をのみ、こくつと頷くブースター。誰にも話が聞こえないよう、階段の近くまで来た。

階段の近くまで来た2人。2人きりなのでここでは敬語を使わない。

「ブイゼルのことなんだけど……」

ブースターの思い口の開き方とは対照的に、リーフィアは軽く口を開く。

「木の实のことでしょ？ 私一応先輩なんだから。そのくらい知っているわよ。そして、手も打っているわ」

リーフィアは既に解決済みだと笑う。その言葉を不審に思いなが

「らも、姉の言うことなら本当だろうと思い、ありがとうとだけ言ってその場を去った。その姿が見えなくなったところから歩き始めるリーフィア。カバンのおいてある準備室へと向かう。

「さて、練習が終わったらいっぱいを渡そうかな」

そう言って取りだしたのは、水避け用のビニールハウスのような物の付いているプランターだった。

なお、後日判明したことだが、そのプレゼントはリーフィアの自作だったそう。そのことを聞いて、ますますリーフィアに感謝するブイゼルであった。

ブイゼルの水やり奮闘記（後書き）

ピカチュウ「水曜日のあれはなんだ？」

あ、喧嘩のこと？ あれはもともとこれにくつついてる予定の話。
しかし、ブイゼルだけで話がこんなに長くなったから、2つに分けた。次の話で出る。

ピカチュウ「りょーかい」

邪気眼解禁？ 厨二パワー炸裂！

前回の話、覚えていてくださっただろうか。そう、『ブイゼルの水やり奮闘記』だ。その中にこんな一文があった。

『水曜日に教師同士の喧嘩があった』と。

今回の話は、そのことについてである。

その出来事の発端は朝へとさかのぼる。まだ雨も降っていなかったその日。6月とは思えない灼熱の太陽が、教室の窓から顔をのぞかせている。

「あゝかったりいな。お前らも学校休めばいいのに」

今回ばかりは本当に教師の発言とは思えない一言が炸裂する。発したのはもちろんデンリユウだ。駅前などで配っているうちわで自分を扇いでいる。扇風機はまだつけてはいけないとの命令がルギアからあったそうだ。さすがのデンリユウでもつけていない。

「先生。その発言ばかりはいただけません。学校とは学びの場であり、私たちは学ぶために学校へ来ているのです。なので、もっともな理由がない限りは休むことは許されないと私は考えます」

口うるさく反論するのは、天才であり、1年でありながら科学部の部長を務めるミュウだ。

「いいんだよ。点数取ればどうにかなるっつーの」

最近は口も悪くなってきたデンリュウ。これではミュウが教師をした方が良くのかもしれない。

「点数とはテストの点のことでしょうか？ それとも内申書の内定の方でしょうか？ 内申の方ならば、普段の授業態度、関心意欲なども参考にされますので……」

長ったらしいので割愛する。

「分かった分かった。お前らは真面目にやっとけ！ 俺は職員室で涼んでくるし」

そう言つてさっさと撤退するデンリュウ。

「暑い暑い。ブイゼル、水鉄砲撃つて」

ブイゼルに水鉄砲をねだるピカチュウ。暑くて動く気力もないのか、机に突つ伏している。

「やだ。教室がぬれて掃除させられるのがオチだよ？」

ブイゼルもピカチュウと同じような感じだ。手でパタパタと扇いでいる。その分手が疲れるし、暑くなるのは言うまでもない。

「そっかあ、だからって教室出る気もないし……。次の授業なんだっけ？」

「音楽だよ。第1音楽室まで行くならそろそろ出ないと間に合わないね」

その時、ピカチュウの中にある考えが思い浮かぶ。音楽室なら涼しいのではないかと。

「よし！ 行こうバイゼル」

「ん？ いいけど……」

急に立ち上がったピカチュウに驚きながらも、自分もしぶしぶと立ち上がる。

「僕も一緒に行つていいかな？」

そこに声をかけてきたのは、周りより数倍元気のあるブースターだ。炎タイプが故に暑さに強いのだろう。

「いいよ。ただ、俺達急ぎで行くからな？」

それでも構わないと首を縦に振るブースター。

「じゃ、行こっか」

バイゼルを先頭に、全員は駆け足で音楽室まで向かつて行った。

一方、職員室に辿り着いたデンリュウ。第1音楽室の下にあるため、けっこうな距離がある。

そんなことは百も承知だったので気にしないデンリュウだが、今の職員室の状況には気になるものがあつた。

「は？ 俺様の作った物語がダメだと言うのか貴様は？」

「何度もそう言ってるでしゅ。そんな健全じゃない物語を教科書代わりには使えないでしゅ」

あからさまに喧嘩している。それも職員室のど真ん中で、堂々と。

「どこが健全じゃないというのだ？ 俺さ……じゃなかった。この主人公が敵をバツバツとなぎ倒していく爽快感！ それに加えて、完璧なまでに強い主人公！ とてもいい物語ではないか」

「だ……から。それがダメなんでしゅ。そんな物語面白くもなんともないでしゅ」

二人とも国語の教師だ。片方は、1年の学年主任でもあるエンテイ。もう片方は、ここの職員の中で唯一まともな先生、シェイミである。

「うるさいな。静かにしろよ」

「私も同意します」

珍しく注意するデンリユウに便乗したのは、ここの所全く出番のなかったジバコイルだ。忘れていた方も多いことだろう。

「何がうるさいだ。いつもうるさい貴様みたいなやつには言われたくもない」

実際にはエンテイの方がうるさい。特に独り言がだ。

「は？ 何言っただお前。ちょっとバトルフィールド来い」

「いいだろう。貴様如き、俺様の烈火の炎で溶かしつくしてやる」

そう言っで職員室を後にする2人。そんな2人を見ていたポケモンがため息をつく。その数は2つだ。

「しょうがない人たちでしゅね。ルギア校長、あの二人を止めてきてくださいでしゅ」

「しょうがない、あいつらどうにかしてくれ」

本当に久しぶりに登場した校長。種族はルギアだ。彼の声かけた先には、3年の学年主任の先生、スイクンがいた。

「しょうがないですね。私が行ってきますよ」

そう言っで、その場から『消える』スイクン。しかし、その後に聞こえてきた衝撃音によって理由分かった。

スイクンがいるのは、天井だった。頭が綺麗に天井に刺さっているスイクンを発見する。幸い顔は刺さっていないようだ。

「やれやれでしゅ」

そんな光景を見て、大きくため息をついたシェイミであった。

所変わり、音楽室。ピカチュウ達が音楽室に着いてしばらく経った後、轟音とともに床から何やら水色の物体が現れる。なんだかクリスタルのような形だ。

「ええ！ 何これ！」

「もしかしてスイクン先生？ スイクン先生じゃないですか！」

ブイゼルに言われ、始めてスイクンだと気が付くピカチュウ。驚いた拍子に1歩下がってしまい、ブースターに軽く当たる。

「う、う、う、ごめん」

相当驚いているのか、ごめんというたった一言を言うのに何回も言いなおすピカチュウ。

「別に大丈夫だよ」

それに対してブースターは何事もなかったかのように振舞っている。

さっきの轟音を聞きつけたのか、準備室で楽器の手入れをしていたプクリン先生も慌ててこっちに来た。

「何があっただんですか？ あ、スイクン先生！」

聞こえていない、というか気絶しているらしく、全く返事がない。

ちなみに、スイクンは美術を教えている先生だ。

「気絶しているのですしゅか？」

シェイミがやってくる。ルギアに救出して来いと言われたそうだ。

「はい、というか何があったんですか？」

プクリンに聞かれ、先程まで職員室で起こっていたことについて話す。

「またですか、いい加減どうにかしてほしいですね」

どうやら普通の出来ごとのようだ。スイクンが突っ込んできたのは異例のことだが。

「取りあえず、スイクン先生は下に連れて行きましゅ」

「どつやって？」

本当に綺麗に刺さっており、簡単に抜ける気もしない。それよりも、シェイミの力ではスイクンを引き上げるなんて到底無理だ。

「いつするんでしゅよ。それ！」

そう言い、スイクンのクリスタルらしきものにダイブするシェイミ。

「痛い！ ああああああ！」

スイクンは悲鳴と共に下へおちていった。

「これで終わりでしゅね。それじゃあ、ミーは職員室に戻るでしゅ」

「……今の誰？」

ピカチュウはブイゼルに聞いてみる。あんな緑色の先生は初めて見たからだ。

「あ、シェイミ先生だよ。2年生になるとエンテイ先生じゃなくてシェイミ先生の授業になるんだ。評判はいい方みたいだよ」

今の行動しか知らないピカチュウにとっては理解できないが、人気の先生だということは分かった。

「あ、スイクン先生動けないから、私が見に…じゃなくて止めに行かなくちゃ」

そう言って音楽室から出ていくプクリン。何故か鼻歌交じりにスキップまでしている。

「気になるね、追ってみよう」

その後を追っていくブースター。彼もまた楽しそうだ。

「あ、ちょっと待って！」

「俺達を置いてくなあ！」

更にその後ろを追いかけるピカチュウとブイゼル。2人だけは楽しそうではなかった。

「食らえ、煉獄！」
ヘル・ファイアー

真っ赤な炎が渦を描くようにデンリユウに迫っていった。

「ただの炎の渦だろ。10万ボルト」

軽々しくエンテイの攻撃を避けたデンリユウ。さすがは体育教師といったところか。そのまま前進しエンテイとの距離を縮めてから電撃を放つ。

「そんな攻撃、アブソルート・ブロック断絶壁で受け止めてやる」

「そんな技名言ってて恥ずかしくないのか？」

ちなみに、今回の技は守るである。それに受け止められ、デンリユウの放った電撃は消滅する。

一度間合いを置くデンリユウ。このまま近くにおいては危険だと判断したらしい。

「なんだ、俺様の気迫に恐れをなしたか。……しょうがない。禁じられた一手で終わらせてやる」

「どうせ大文字かなんかだろ？」

エンテイの言うことを半分も信用していないデンリユウ。戦闘態勢を崩し、リラックスしている。

「行くぞ、俺様の攻撃で最強で最凶の攻撃を見せてやる。業炎弾丸

リーゼンク・フレイム・ブレット

！」

直訳すると、荒れ狂う炎の弾丸だ。つまりフレアドライブである。

「は？ お前なんでフレアドライブ使えるんだよ！」

デンリユウが驚くのも無理はない。エンテイ族はフレアドライブは使えないはずなのだ。

そんなことを考えているうちにも、炎の弾丸と化したエンテイは、文字通り弾丸のごとく迫ってくる。

「しゃーない。守る！」

あの速さで近づかれてはかわすのは難しいと判断し、守りの体制に入るデンリユウ。緑色のフィールドが展開されたすぐその後、エンテイがぶつかってくる。

その衝撃は凄まじいらしく、緑色のフィールドにはヒビが、デンリユウはどんどん後退していく。

「先生方！ 何してるんですか！」

今辿り着いたように見せかけるため、わざと息を荒げてそう言うプクリン。実際は最初から観戦していたみたいだが、さすがに危ないと判断したのだろう。

プクリン先生の声を聞き、技を中断する2人。

「悪い悪い。こいつの挑発にのっちゃってさ」

指をエンテイの方に向ける。

「誰が挑発など小賢しい真似をしたというのだ」

たいして、自分は挑発などしていないというエンテイ。

「どっちでもいいですから、早く持ち場についてくださいよ……、痛た……」

スイクンもその場に現れる。先程の傷がやはり痛むようだ。

「そう言えば3組で授業があつた。悪い、今行かせてもらおう」

エンテイはそう言い、駆け足で3組へと向かって行つた。

「俺は何もないなあ、じゃ、職員室戻るか」

デンリュウも腕を後ろで組みながら歩いて行く。

「あ、そうだスイクン先生。実はこれ……」

プクリンは、何か手紙のようなものをスイクンに渡す。

「どれどれ……、！ 音楽室の床代、10万円!？」

それもそのはず、防音加工しており、なおかつ、けっこうな範囲の床を突き破ってしまったのだから。

「よろしく願います。それじゃあ、ブースター君達も授業行くよ。第2音楽室使っからね」

「はあ、ちなみに今日のことは……」

ピカチュウが一応訊ねる。もし言ってもいいのなら、かなりのネタだ。ムウマにでも高く売れる。

「あ、絶対に『他言無用』でね」

「ですよ〜」

多少がっかりしながらも、音楽室へと向かうピカチュウ達であった。

その後、スイクンはしつかり10万円払い、吹奏楽部は個別音楽室を使つての練習となったそうだ。

体育祭準備その2！ 2年生でも悩み事

以前、1年1組はバトル部門に出場する選手決めを行ったが、2年2組は一切そんなことをしていなかった。

そのことに気付いたのは体育祭の約一週間前の金曜日1時間目、学活の時間だった……。

「私出たい！ 出たい出たい出たい！」

「ふん」 (リーフィアさん。うるさいですよ) 「

はい……」

現在バトル部門に出場するポケモンを選出中だ。リーフィアがうるさくなってきたところを、プクリン先生が鼻歌で注意する。

顧問の先生ということもあり、黙り込むリーフィア。

もちろん他の生徒には何でリーフィアが黙ったのか訳が分からず、混乱している。

「え、それでは。改めまして、バトル部門に出たい方はいますか。リーフィアさん以外で」

リーフィアが黙ったのを確認し、場を仕切り直すプクリン。早く決めなければいけない。という焦りが見え隠れしているようだ。

「俺は出ても構わないが……」

「いや、こんなやつより私が出る！」

リーフィアがこんな奴扱いしたのは、囲碁・将棋部に所属しているポケモン、ザンゲースだ。

「うひひ、それなら俺が出るぜ」

登場からだいぶ時間がたっているポケモン。ヤミラミも声を上げる。

「3人ですか。それなら、バトルフィールドを借りて」

「先生ストップ！」

バトルで決着をつけようと言おうと思ったプクリンだが、リーフィアに止められる。

「どうしました？」

「この前もバトルやってるから今回は無しでいきましょう！」

久々に出ました。リーフィアのメタ発言。

もちろん今の発言には、全員クエスチョンマークが頭に浮いている。

「リーフィアさん？ 発言の意図が分からないですよ」

「分かんなくてもいいから！　ここでバトルとかやると、ネタ切れとか言われるの！」

更にぶちかますリーフィア。ここまで暴走したのは初めてかもしれない。

「全然分らないですよ？」

しびれを切らして、リーフィアと一緒に保健室に向かおうとするブクリン。確かに頭がおかしいと思われても仕方がないが。

「先生！　私は正常です！　ちゃんと掛け算九九だって言えますし、足し算引き算もできます！」

「そのくらい出来て当たり前でしょ？　さあ、保健室行くわよ」

2人の不毛な言い争いを見て、面白そうに動画を取るヤミラミと、心配そうに見つめるザンゲース。

「いやです！　授業サボりたくない！　内申下がります！　先生その勝手な行動で、高校落ちたらどうするんですか！」

「はいはい。リーフィアさんは公立志望でしょ」

ここで説明する必要があるだろう。

この世界、基本的に高校に行くことはできる。しかし、私立の学校へ行くには、受験が必要なのだ。普通に公立へ通う場合は受験の必要はない。

ヤミラミは相変わらず動画を取り続けているが、さすがにやばい
と思い始めたザンゲース。

リーフィアのバックから携帯を取り出し、彼女のストッパー兼弟
であるブースターに電話をかける。

「もしもし？ お姉ちゃん、授業中に電話かけないでよ」

「悪い、クラスメートのザンゲースというものだ。今、お前の姉ち
やんが暴走して危ないことになっているから、止めにきてくれない
か？」

「え？ はい、分かりました。それでは、後の人のケータイを勝手に
使うのは犯罪ですよ」

ブースターの最後のセリフが、ザンゲースの心に深く残ったので
あった。

一方、その電話を受けたブースターのいるクラス、1年1組はど
うなっているのだろうか。

「ふー、2年生なんだから犯罪の概念くらい覚えといてほしいよ」

愚痴をこぼすブースター。いつも元気な彼が元気でないと、やは
り心配するポケモンというのは出てくるものだ。

「どうしたの？ さっきの電話の相手、リーフィア先輩みたいだっ

「ただ」

「うっん、そのクラスメートのザングースさん」

ブイゼルが心配そうに声をかける。この後、木の実が悲劇的なことになることはまだ知らないで、他人の心配が出来るのだ。

「談笑中、申し訳ございません。現在は1時間目が始まっており、携帯電話、その他電子機器は先生に預ける規則になっているのですが」

やたらと堅苦しいミュウが出てきた。いつもに増して堅苦しい気がする。

「だって、先生どこ？」

「それはですね……」

そう。今1年1組には、デンリュウがいないので、ギャーギャー騒ぎまくっている状態だ。自習のときのような感じと言えば伝わるだろうか。

朝からずつとこない。もちろん職員室なども探したが、どこにも見つからないため、結局先生なしで学活を始めた。始めたのはいいのだが……。

「ねーねーピカチュウ。水曜日にさ、なんかあったんでしょ？
いい加減白状なさい！」

何のことは皆さんお分かりのことだろう。例のあれだ。

「口止めされてるから言えない！」

「そこを何とか！ 言わないと私が犯罪に手を染めちゃうわよ？」

ムウマが言うのと洒落にならないセリフである。

「待て、早まるな！ 知りたきゃブイゼルに聞け！」

「へっ？ 僕？」

いきなり矛先を向けられたブイゼル。彼も答える気はないらしく、全力で逃げ始めた。

「待ちなさい！ サイコネシス」

当然サイコネシスであっけなく捕えられるブイゼル。

「教えてもらおうかしら？ 水曜日何があつたのかを」

「絶対言わない！ 言ったらプクリン先生が怒っちゃうし……」

最後の方は虫の鳴き声でもかき消されそうな声だが、そこはさすがの地獄耳。しっかり聴いていた。

「プクリン先生がどうしたのね。ふーん、ちょっと2年2組行ってくるわ。アルもいるしね」

授業中なことも忘れて、ららんと鼻歌交じりに教室を窓から飛び出すムウマ。2年生の教室は1つ上の3階だ。飛んで行った方が

どう考えても早いのである。

「あー……。行っちゃったよムウマちゃん。ピカチュウ君どうしよう?」

「放っておけ、そのうち戻ってくるだろ」

完全に諦めたピカチュウ。犯罪に手を染めなかっただけよしとしているのか。

「ブースターもさあ、なんか言ってよ。あれ、電話してるんだ。授業中に珍しいね」

ジェスチャーでブイゼルに現在の状況を伝える。こうして、冒頭のシーンへと繋がるのである。

「先生は……。いないですね。失礼しました」

そそくさと去っていくミュウ。初めてミュウを言い負かしたので嬉しく舞い上がるブイゼルとブースター。

「じゃ、僕は上の教室のお姉ちゃん止めてくるから」

ブースターも教室から出ていく。ミュウはさきほどのことがショクだったのか、教室の隅にいて、何も注意せずにいた。

「リーフィア先輩って2年2組だよな? 僕も行く」

ブースターの後を早足で追うブイゼル。

「あ、こら待て！ 俺も行く！」

なんだかんだでムウマのことを心配しているピカチュウであった。

「そろそろ諦めて保健室行きましょうね、リーフィアさん」

「やだやだ！ あの先生は嫌いなー！」

リーフィアは既に駄々っ子にしか見えなくなっている。こうして見れば、プクリンが母親のようだ。

「プクリン先生。水曜日に何があったんですか？」

ムウマは、窓をシャドーボールで突き破り、そのままプクリンの方へ突き進む。

この窓は、後にブラッキー家が修理したそう。

「ムウマさん？ 何でここにいますか？」

びっくりしたような感じのプクリン。1年が、授業中に、窓を割って入ってきたらそういう反応になるだろう。

「あー！ ムウマストップストップ！ それ以上先輩方に迷惑かけちゃだめ！」

ピカチュウも、ドアを『突き破って』入ってくる。いつからそんな体技を使うようになったのか。

こちらもブラッキー家が修理したのは言うまでもない。

「ピカチュウ君！ ドアを突き破るとか何考えてるの？」

多少遅れてブイゼルとブースターもやってくる。

「いや、キャラ付けの一環で、こういうのにもチャレンジした方が
良いかなあと思って」

ピカチュウより目立っていないキャラはなど、たくさんいるのだ
が。ハンドピンポン部の部長や部員などは最近見なくなった。

「……それより、お姉ちゃんどうしたの？」

「私が、少しメタ発言をしただけなのに、頭がおかしいって先生が
言うんだよー」

首を横に振る1年一同。それはしょうがないと思ったのだろう。
ムウマだけは見向きもしないが。

「ねーねー！ 教えてくださいーい！」

「いやです。言ったらぶつぶつぶつぶ……」

ムウマですら聞きとれない声量で呟くプクリン先生。さすがは音
楽教師である。

「聞きとれないなんて初めてだわ。ねえアル。脅迫材料とかない？」

やはりムウマが言うとその道の人と思われても仕方がない。現実味がかなり漂っている。

「あるよ。これどーぞ」

そう言って渡したのは、さっきまでずっと動画をとっていた携帯だ。

「どれどれ……。なるほど、これは使えるわね」

音声が入手く入っていないこの動画。プクリンが無理やりリーフイアを外に連れ出しているようにしか見えない。

後は適当に言葉を並べるだけだ。それで水曜日になんかあったのか聞きだせる。

たかが事件一つでそこまでムキになれるのも才能の一種だろう。

「さーて。プクリン先生♪ 水曜日のことを教えてくれないと動画^{コレ}をバラまきますよ」

「あ、それは！……。しょうがないや。あれと比べればまだあっちの方がましだね」

しょうがなく折れたプクリン。言っにしてもデメリットがあるようだ、そっちの方がましらしい。

ということで、プクリンは、水曜日の出来事を包み隠さず話す。その間、緑色のキャベツと、ザングースがこそこそ動いていたが気にしないでおこう。

「そう言うことなのね。それじゃあ新聞でも出しましょう」アル、
良いわよね？」

「OKだよ。ただ、ネタが少ないからもっと集めないと」

どうやらこのことを新聞にするらしい。もちろんそんなことをされたらたまらないプクリンだが、例の動画のせいでなんとも言えない。

ムウマは完全に犯罪者に近くなってきた。誰かがどうも見てもちの道の人だと思われるような笑い方をしている。

「リーフィアとザングースだな？ これでバトルメンバー全員決まりと」

突如聞き覚えのある声が廊下の方から聞こえてくる。ピカチュウがドアを突き破ったため、声は丸聞こえだ。

「あゝ！ デンリュウ先生」

ブイゼルが廊下を見ると、手に何かを持ったデンリュウがいた。近くにはザングースとリーフィアもいる。

「あ、ブイゼルじゃんか。ちゃんと教室にいないとダメだろう？」

こいつにだけは言われたくないセリフである。

「それはお互い様です。それよりなんですか？ それは」

そう言い、デンリュウの持っているものを指さす。どう見てもお酒にしか見えないそれは何なのだろうか。もちろん校内は全面禁煙禁酒である。

「これか？　これはビールだ」

「学校内は禁酒ですよ！」

まんまの答えが返ってくる。さすがのブイゼルも予想してなかったことだろう。

「いいんだよ。ばれなきゃ。じゃ、ちょっと1杯飲んでくる」

そう言い残し、去って行ったデンリュウ。

ちなみに後日大量のお酒の空き缶が、使われていない教室で発見されたそうだ。

もちろん、ブイゼルはデンリュウを突きだした。これで一件落着である。

体育祭準備その2！ 2年生でも悩み事（後書き）

ムウマ「私、キャラ崩壊してるんじゃないかしら」

ピカチュウ「目立つだけまし」

ブイゼル「ピカチュウ君も十分目立ってるよ」

ムウマ「あ、なんか気まぐれな作者が、次話を考えてあるから次回予告するわ」

ピカチュウ「『ポケモン第2中7不思議』だ。誰視点かは分かるよな？」

ブースター「それでは♪ 次回また会いましょう！」

ポケモン第2中学校7不思議　く前編く（前書き）

書いてたらなんだか長くなってしまいました。ということであ々の前後編です。

ポケモン第2中学校7不思議　く前編く

突然だが、ここは新築の学校だ。まだ創立1年目である。つまり伝承などはない。

しかし、無いなら作ってしまおうと思う輩がいるのが現実だ。実際、掲示板にこんな張り出しがある。

『七不思議募集中！　気になることや、面白そうなこと、果てには創作でも全然構わないです！　どんどん応募ください！　by 捜査部』

「面白そう！　ねえピカチュウ君もどう？」

1人はしゃいでいるのはブイゼルだ。現在は昼休み。涼むためとブイゼルの楽譜を取りに第2音楽室に行こうとした途中、掲示板を眺めていたら、面白そうな記事があったのだ。

「俺？　捜査部ってムウマ達の部活だろ？　関わりたくないからやだ」

前回の一件で、捜査部に軽いトラウマを抱えている。

「えゝ、行こうよゝ」

「やだ！　っあ、離せ！」

何故だか異常にテンションの高いブイゼル。ピカチュウにくっついて離れない。うっとおしく感じながらも、教室へ向かって歩くピ

カチユウ。どう見ても歩きにくそうだ。

そんな彼らのすぐそばを、赤くて飛んでいるポケモンと、全体的に水色っぽい四足歩行のポケモンが通る。もちろん捜査部の張り出しに気づく訳で、今は2人してそれを眺めている状態だ。

「面白そうね。この設定使ってみる？」

「はい！ グレイシア先輩」

彼女らは、文芸部でおなじみのラティアスとグレイシアだ。妄想ワールドを広げ楽しそうにしている。

「ちょっと待ちなさい。あなた達、文化祭に出版するものを書きあげていないのでは？ そちらが終わってからやるべきだと思いますが」

突如、なんの前触れもなくレポートしてきたのは、文芸部副部長のフリーデインである。

「うるさい、この髭親父。部長である私に権限があるのだから文句言うんじゃないわよ」

「サボリ魔のあなたなんぞに言われたくありません」

「あんたこそ、新人のくせしてでかい顔をして。だから新入部員がそんなには言ってこなかったのよ」

2人の会話見れば分かるように、この2人は非常に仲が悪い。いわゆる犬猿の仲だ。

そんな2人の間に挟まれ、おどおどしているラティアス。だが、2人に気にしている様子はない。

言うしかないと思い、ラティアスは口を開く。

「グレイシア先輩……。放っておきましょうよ」

何気なく酷い一言がラティアスの口から発される。後輩からのこういう言葉が一番胸に刺さるものだ。

「そうね。じゃ、フーデイン“君”」

「……」

精神的ダメージが大きいのか、フーデインは何も喋らないでレポートした。慕われてはいなくても、嫌われてはいないと思っていきたい。

「1年目のくせして傲慢なんだから。3年生だろうが経歴はラティアスちゃんと同じくせしてねえ」

そう。実はこのフーデイン、入部して1年もたっていない。つまり、途中入部なのである。

以前いた部活は囲碁・将棋部。ケツキングが部長になる前から適当だったため、嫌気がさしやめたそうだ。

途中入部ながらも、副部長の地位に位置している。真面目な性格が好転したのかもしれない。

しかし、かなりの傲慢であり、何でも仕切りたがる。だから、自由にやるうというグレイシアとはかなり仲が悪いのだ。

フリーデインの態度と、考え方の違い。これが、二人の仲の悪さの原因である。

「ええ、まあ……」

さすがに先輩の悪口は言えないので、はぐらかすラティアス。

「そんなことはどうでもいいじゃない。早く捜査部の所行きましょう」

「はい！」

捜査部に向かうグレイシアとラティアス。その間、グレイシアの顔が怖く、まともに喋りかけられないラティアスであった……。

「あの張り出しでよく人が集まるものね」

ぼそつと呟くムウマ。あの張り出しは、ヤミラミが適当に仕上げてきた奴だ。

現在ここにいるのは、自信満々のブイゼル。それに連れてこられたピカチュウ。文芸部のペア。そして、なぜかしらここにいるフライゴンとオクタン、そしてバクフーン？

「いやいや、何で俺だけ疑問形？」

異論を唱えるバクフーン。初登場からこんな扱いなので、結構あせっているようだ。

「そんなことは置いといて下さい。それより、お集まりいただきありがとうございます。こここの進行を務めますムウマです。ですが、皆さん張り紙をよく読みました？」

そう言つて、サイコネシスで張り紙のコピーをみんなの前に持つていく。ムウマが言っているのは、張り紙の左下、開催日時のことだ。それは、6月13日。これはあっている。だがしかし、テストの3日前にこんなことをやるのも少しおかしい気もするが。時間は放課後である。現在は昼休みであつて、決して放課後ではない。

「放課後なの？　じゃ、また後で」

グレイシアとラティアスは、今はやらないことが分かった、さつさと帰ってしまった。グレイシア達以外も、放課後にまた来ると言つて、全員戻る。

「あ、ピカチュウ、ブイゼル。ちょっと待って。今行くから」

すぐさま放課後。授業風景は面倒なので割愛する。

「今度は時間通り集まってくれたみたいですね。それでは、意見どうぞ」

光の速さで意見が出てくる。何でもここまで盛り上がっているかは

誰にもわからないだろう。

「空き教室にあるビールの空き缶の謎」 ↑ ブイゼル

「調理室から聞こえてくる唸り声」 ↑ グレイシア

「ルギア校長のプライベート」 ↑ バクフーン

「何故かクビにならないセレビィ先生」 ↑ オクタン

「この7不思議の存在意義」 ↑ ピカチュウ

「学校の異常な広さ」 ↑ フライゴン

「そもそも捜査部って何？」 ↑ ラティアス

以上、7つの意見がでそろった。どれもこれも不思議と呼ばたものではないが。

「全部面白い！ ということで全部採用です」

ムウマのトンデモ発言に驚く一同。常識的に考えて、一番上と一番下はありえない気がする。やっぱり全体的にありえないが。

「あ、それでは捜査してきますので、各自セッティングをお願いします」

更におかしな発言をしていくムウマ。彼女もまた、あの人のように止まらないのだろうか。

「聞いてないんだけど」

反論するピカチュウ。確かにそんなことを書いてあった覚えはない。

「聞いてない、そんなこと当たり前です。書いてありますから」

そう言われるとやはり張り紙を眺めてしまう。一番近場にいたフライゴンが代表して見ているが、全く見つからない。

「無いけど。どういうこと？」

「よくよく見てください。右端の一番上ですよ」

一番上をよく見てみるが、それでも見つからない。

「あなたのその羽は飾りですか？ 飛んでみてください」

先輩に向かって言うべきことではないが、そこはムウマクオリティだろう。はつきりと述べる。それに多少イラつくフライゴンだが、こんなことではキレてられないと思い、飛んで見てみる。

「あ、もしかして、これ？」

それと思われる物を発見するフライゴン。ちなみに、黒地にかなりその色に似ている黒字で書かれており、本当によく見ないと分からない。文字サイズもかなり小さくなっており、気付かせない工夫がかなり凝らしてある。

「そう、それです。ということなので、今から1時間後に見て回り

ます。それまでは、7つ目の捜査部って何？　について説明したり、セレビィ先生について調べたりしてます。最初に空き教室に行きますので、ブイゼルさんは1年2組前で待機しててください。1時間後に入れば問題無いので、それまでは部活行くなりしていいですよ」

それを聞いて、教室を出て行ったのは、ブイゼルとグレイシアだ。残りの方は準備する必要が全くない。

「ゲンちゃん。ルギア校長に張り込みよろしく」

「りょーかい」

抜けた感じで返事をするゲンちゃん、もといゲンガ―。

「おいおい、先輩にやらせるって……」

ピカチュウが思ったことを受け流されると思いながらも言う。

「いいのいいの、張り込みはゲンちゃん担当だから」　セレビィ先生の件はフェクトに頼むわ」

「分かったー」

「ついでに、学校の大きさの件も出来たらよろしくー」

「おっけー」

なんだかミカルゲとは思えない性格をしている。温厚な性格だ。

「ハッキングの腕が鳴るぜえ！」

……そうでもないかもしれない。

「じゃまずは、捜査部について説明するわね。捜査部、これは通称で正確には捜査同好会。顧問の先生がいないから、結構自由気ままにやってるわ。部員は、私を含めて4人。張り込み、侵入したりするゲンちゃん。ハッキングの得意なフェクト。騙したりするのが得意なアル。ちなみに、張り紙もアルが書いたわ。そして、尾行が得意な私で構成されてるわ」

犯罪まがいなことが色々入っていたりするが、二人とも突っ込んだら負けだろうと思いつまなかつた。

「いつもは、落し物探したり、人を探したりするわ。ちなみにお金さえ払えば、気になる人のプライベートな情報を捜査したりもするけど、どうする？」

「いや、どうするもなにも犯罪じゃん」

「見つからなければ問題なし」

こんな部活、存在させていいのだろうか。そう学校に疑問を持ったピカチュウであつた。

「それじゃ次ね。七不思議の存在意義。これは、捜査部をもっと知ってもらおうと思つてやったわ。何故か捜査部って知名度が低くて知られていないことが多いのよ。だから、ラティアスさんのような疑問が出てくるみたい」

へー、と思ったピカチュウ。どうせ思いつきだろうと思っていたからだ。

「ムーちゃん。セレビィ先生の件分かったよ」

「さすがー、で、どうだったの？」

早すぎる、始めてから5分も経っていない。

「ルギア先生の寛大な心で……、というのは嘘で、実際はアンケートの結果らしいよ」

「アンケート？」

アンケートなど、ピカチュウも聞いたことがない。受けている生徒を見たことすらない。

「そう、月に1回学級委員が受けてるアンケート。そこで、授業を受けて楽しいと思える先生は誰ですか？ 的な問題があつてさ、それで毎月1位に輝いてるからクビにならないみたい」

それはあの天然さと忘れっぽさで授業の大半が無いからだろう。とは思いながら、口に出さないピカチュウであつた。

「あ、尺の関係で今回はここまでだわ。後編に続きます！」

「ムウマ、それは今言つべきことじゃないだろ」

ポケモン第2中学校7不思議 後編

セレビィがクビにならない理由が分かった調査部。ただ、こんな微妙な結果から7不思議は作れるのだろうか？ もともと題材がダメなので、いまさら言うことでもないが。

「さて、私はこれを記事にしなくちゃね」

1人ノリノリで机に向かうムウマ。誰がどう見ても話を盛ることは目に見えている。

説明を聞き終えたピカチュウとラティースはブイゼルの所へ向かい、バクフーンはどこからともなく現れたグレイシアに連れ去られてしまった。ヤミラミは既に帰っている。

つまり、今いるのは捜査部のミカルゲ、通称フェクトと、ムウマ、フライゴンにオクタンである。

「ねーねーオクタン。この学校、やっぱりあれかな。おかしいのかな」

「取りあえず敬語を使えすわー、学校はおかしくないですわよ。学校自体は」

オクタンの言うことは的を得ている。確におかしいのは教師やら生徒やらだ。学校自体はものすごく立派で、どこか有名校に間違えられてもおかしくないはずなのに、大食いな生徒や街中でストーカーする生徒などのせいで、そんな噂は一向に立つ気配はない。

「学校がいいなら、やっぱり立地がダメなのかなあ……」

「そうですね。確かに高台に位置してるのは登校しにくいですし……ってそこじゃないですわ」

学校の立地は高台でずいぶん良いはずなのだが、行き帰りが面倒なようで、オクタンのには不満なようだ。

「じゃあどこ？」

フライゴンが真面目にオクタンに質問する。

「どう考えても、先生や生徒でしょう？　例えば……デンリュウ先生とか」

この学校一番の汚点、適当教師デンリュウの名が出る。

「えー？　デンリュウ先生の授業は好きだよ。だって、勝手にハンドボールやっても怒らないし」

「それはデンリュウが授業を放り出してるからでしょう？」

などと、くだらない話をしているフライゴンとオクタン。フライゴンは完全にボケキャラと化したようだ。

「ムーちゃん！　ルギア校長のプライベート、何となく分かったよ！」

ルギア校長をずっと見張っていたゲンガー、通称ゲンちゃんが壁を通り抜けて出てくる。

「でどんな感じ？」

ムウマは、記事を作りながらゲンガーに問う。

「来週の日曜日、つまり体育祭の次の日だけど、楽器屋さんに行つて、ファイヤートルネードで食事をするみたい」

楽器屋さん、ルギアと縁もないような単語が出てくる。

「本当に？ 鍵屋さんとかの聞き間違えじゃなくて？」

「本当。それに、誰かと一緒に行くみたいだよ！ これはスクープ確定！」

なんだか新聞部のような会話になっている。

「えー！ あのルギア校長が？ 彼氏？」

フライゴンも話に入ってくる。彼氏という単語は聞こえなかったことにしよう。

「フライゴン、ルギア校長は男性ですから、彼女の間違いですわよ」

「初めて知った。ルギア校長って男だったんだ」

あまり見かける機会がなくとも、性別を間違うのは珍しい。

「相手との結婚予定は？ それとも浮気相手？」

ムウマの質問に、首をかしげるゲンガー。そこまでは分からなかったようだ。

「分からなかったのね。それなら、浮気相手ということにしておくわ。みんなもそっちの方が興味あるだろうし」

話を仮定してどんどん進めていく。

「相手さんは楽器が好きみたいですわね。音楽関係者？」

「この際だから職場恋愛にしようよ。そっちの方がウケいいよ」

「となると、プクリン先生辺りが妥当ね」

オクタン、フライゴンの意見により、ルギアの浮気相手はプクリンに決まった。

「これも記事にしなくちゃ」

正しい情報は、楽器やとファイヤートルネードに誰かと行くというだけなのだ。その他は全て創作である。

「うーん、相手は女性？ それとも男性？」

「何でそこで悩むんですの？ ルギア校長が男性だから、必然的に女性ということになりますわー」

「あ、そうか。R-15ネタは持ってこれないもんね」

何の話かのご想像にお任せします。

「大丈夫、この小説にそういうシーンは無いから。というか、気持ち悪いでしょ」

このような感じで、しばらくはR - 15な話が続いた。

1時間後。そろそろブイゼルの所に行く時間だ。

「だからって、何で全員で行くわけ？」

「まあ、気になるからかな」

フライゴンの答えに頷くオクタン。

「それじゃあ行こう！」

ミカルゲを先頭に例の空き教室まで歩いて行く……？

「ムーちゃん、そう言えばどこの教室？」

もちろんブイゼルから何も聞いていないため、ムウマもどこかは知らない。

「じゃあ、ブイゼルは放っておいて、先にグレイシアさんのいる調理室に行きましょう」

進路を調理部の使っている調理室へ変更する。

「そう言えば、もう体育祭ですね。フライゴンは確かバトル部門にでますわよね」

やっとタイムリーな話題が出てきた。しかし、それよりも前にテストがあるのだが。

「そーだよ。バクフーンと一緒に“魅せる”バトルをするからね」

「それ、趣旨が間違ってますわー。勝たなきゃだめですわよ」

完全に方向性を間違えていたフライゴン。バクフーンも彼と一緒に“魅せる”バトルをすると思っていたのだろうか。そうならば、2人揃って頭がお花畑状態だ。

「あー、そう言えばそっちが本当の目的だったね。大丈夫、勝負には勝って、見ている人には楽しんでもらうようなバトルをするから」

非常に自信満々の答えが返ってきた。フライゴンじゃなきゃナルシスト確定だっただろう。フライゴンは天然な所があるので許されるが。

「へー、フライゴンさんもそうなんですか。私もそんな感じですよ」
「」

ムウマも“魅せる”バトルをしようとしていたらしい。

「そうなの？ それじゃあ決勝で！」

「もちろん！」

なんだか勝つこと前提の話をしているが、まだ決勝に出れるかも分かっていない状態。それなのにこんな話が出来るということは、よほど自信があるのだろう。

「調理室に着きましたわー」

未だに説明がなかったが、捜査部の部室は5棟にある。それに対し、ラティオスが言う調理部―（本当は料理部です）は6棟にある。こちらの調理室は授業では使わないため、調理部が独占しているよなもんだ。

ゲンガーが扉を開ける。中にいたのは……。

「いらつしゃいゝ 我が“調理部”へようこそ」

「正式には料理部だよ」

調理部のラティオスとシャワーズが出迎えてくれた。

「あれ？ グレイシアさん来てない？」

ムウマがシャワーズに訊ねる。グレイシアがいればシャワーズがこんなに元気なはずがない。それにしたがって、もしかしたらグレイシアは来てないんじゃないかという仮説をたてたからだ。

「お姉ちゃん来んの？ それじゃあうち帰る」

シャワーズの反応を見る限り、来ていないようだ。

「来てないなら来ないわよ。それじゃあ第1調理室の方かしら」

そう言って、光の速さで出ていくムウマ御一行。

「なんだったんだ？ あいつら……」

「さあ？」

その後、料理を投げ出して考え込む2人であった。

「着いたわ、第1調理室よ」

「ムーちゃん、早くない？ さっき向ここの調理室出たばかりだ
けど」

「どっかの誰かさんの都合よ。気にしたら負けだわ」

ゲンガーの悩みを軽くあしらい、耳を澄ませるムウマ。

しかし、数分経っても例の唸り声は聞こえてこない。

「もういい。突入よ」

ムウマ達の部活が何なのか、よく分からなくなってきた。今は立てこもっている犯人を追い詰める警察官のよう。

突入準備をするムウマ達。ゲンガーの手にあるものは……、プラスチック爆弾？

「ちょっと待ちなさいゲンガー。それどこで拾ってきたんですの？」

「ん？ 科学部の部室からちよこつと」

こんな代物を作る科学部、絶対に敵に回せない。もちろん捜査部の皆さんも敵に回せないが。

「それ使いましょう」 点火はフライゴンさん、お願いします」

「面白そうだからいいよ」

「フライゴン、やったら色々と大変ですわよ」

そんな理由で爆発させるフライゴンの天然さ。ある意味凄い。

「うん。セツト完了。それじゃあフライゴン。点火よろしく」

ゲンガーが扉の前に例のものをしっかり固定する。

「いっくよー！ 火炎放射！」

オクタンの制止もむなしく、フライゴンの口からとてもも火炎放射とは呼べないくらい細い炎が出てくる。それでも、点火させるには十分すぎる火だ。導火線はみるみる燃えていく。

「ん？ これはなんでしょう？」

丁度いい所……失礼、危険なときに現れたスイクン。もう爆発まで秒読みだ。巻き込まれるのはもはや当然だろう。

「これは導火線？ しかも、先に火がついてる……。つまり」

スイクンが全てを言い終える前に、廊下を轟音が包み込む。うるさすぎて何も聞こえないんじゃないかと錯覚するくらいの轟音が。

ムウマ一行は目を瞑っていたため、スイクンがそこにいるなどまるで気付かなかった。多分捜査部のことだ、気付いても声をかけないだろう。

「あ、スイクン先生だ。おゝい、スイクン先生？」

フライゴンが声をかけてみる。さすがのスイクン先生でもこれは危ないかもしれない。

「ここは……、あれ、何でここら辺黒こげなんですか？」

はっと目を覚ましたスイクン。よく見るとあまり目立った外傷はない。

「やっぱり無事ね」

ムウマの一言。最初からスイクンがいることに気付いていたようだ。

「ちょっと、誰？ こんないたずらしたのは？」

爆破されてバラバラになった扉を踏みながら、 그레이シアが出てくる。

「 그레이シア」。これはいたずらレベルではないですわ。スイクン

先生巻き込まれてますし」

「スイクン先生？　そこでピンピンしてるじゃない」

グレイシアの前足がさす先には、何事もなかったかのようにその場を去るスイクンがいた。

「……信じられないですわ」

ムウマ達は、爆破される瞬間が写されている写真を見ている。結局、全員スイクンがいることは知ってたが、無視していたということになる。

「そうだ。これを『不思議にしましょう』ということなので、これにて解散！」

バラバラに帰っていく捜査部。もうグレイシアの奴など興味もないようだ。

「私達も帰りましょう。オクタンと帰るのは久しぶりね」

「そうですわね」

「まだ来ないのかなあ、早く部活に戻りたいんだけど……」

結局、ムウマ達がブイゼルの所に赴くことはなかった。

ついでに。爆破された扉は、ブラッキー家が責任を持って修理し

ました。

ポケモン第2中学校7不思議　　〵後編〵（後書き）

ムウマ「七不思議は、捜査部新聞にて連載されてるわ。裏ポケ学へ
GOよ
」

テスト！ ゆっくりしていいね！（前書き）

パロディ満載の回です。おそらく次回のテストはまともになります。
おそらく……。

読者様参加企画だったのですが、期間が過ぎたため、後書きにて答え合わせを行っています。

どのくらい分かるか、試してみてくださいですか？

テスト！ ゆっくりしていつてね！

1時間目〱数学〱

今、教室は静寂に包まれている。聞こえるのは、シャーペンで文字を書く音と、デンリュウの寝息。

当たり前だ、テスト中なのだから。

「あ、これどうやるんだっけ……」

現在1時間目の数学。ピカチュウは難問に頭を悩ませていた。

難問といっても、所詮中1レベル。公開するのはかわいそうなので公開しない。

ちなみに、デンリュウが寝ていることにはみんな気付いているが、カンニングなどはしない。何故なら……。

「あの……。いったいそれは为什么呢？」

教室の四隅に何やら不審なものを取りつけているデンリュウ。テスト勉強の為、早く来ていたラティアスがそれに気づいて声をかける。

「ん、これ？ 監視カメラ。テストってさあ、見てる方はかなり眠いから。つーことで、監視はこれに任せて俺は寝る。そのための準

備だな」

受けている方も、全て解き終わると眠くなるものである。それはずっとというのだから、今回ばかりはデンリユウの言い分も少しは理解できた。

四隅につけ終わった後、四隅からの監視では届かない、中央部分にも監視カメラをつける。

このようなことが事前に生徒に報告されており、カンニングできない状態なのだ。

「あのカメラさえなきゃカンニングするのにな」

ピカチュウもある程度はそういう気持ちを兼ね備えているようだ。やっぱり平凡なのだろう。

カンニングは無理だとあきらめたピカチュウ。最終的に、解答欄には適当に書いた数字が並ぶこととなった……。

その後は順調に進み、数学のテストは大体終了した。大体というのは、一部の問題が分からなくて抜けているからだ。

しかし、時計を見るとまだ5分ほどの猶予がある。しかし、今まですっと考え悩んだ問題がものの5分で解けるはずがない。それなら他の見直しをすべきという結論に至り、空白の解答欄には適当な数字を記入する。

後は普通に時間が来るのを待つだけとなった。

「ぐー。なんでいびきにはガ行が似合うんだろ……」

そんなことは知らない。きっと昔からガ行だからだよ。うん。

デンリュウのいびきと寝言に吹き出しそうになるのを堪えていると、チャイムが鳴り、テストは終了した。

いつまでたつても起きないデンリュウの代わりに、学級委員のラティアスが答案を集め始める。

「先生、答案集めました」

「ん？ あー、そこら辺置いといて」

ラティアスも、この反応に慣れたようで、文句を言わずにそこら辺においておく。

「それじゃあ次のテストは10時だぞ。まあせいぜいあがいとけ」

やっぱり教師の言うセリフではないが、それを捨て台詞にして教室から去る。

「ピカチュウ君。どうだった？」

「大丈夫だ、問題ない」

もちろん大丈夫ではないピカチュウ。一種の強がりだろう。

「問題ありありだったでしょ、顔にそう書いてあるよ」

「マジか……。まあ、平均点は取れるさ」

「大丈夫大丈夫！ 小学校でも平均点ぴったりとってたんだから！」

結局はブイゼルに慰められるピカチュウであった。

2時間目～国語～

「闇のゲームの始まりだぜ！」

そう言いながら教室に突っ込んできたのはエンティだ。多分、テストのことを闇のゲームと言っているのだろ。確証はないが。

「おい、そんなに張りきらなくても、この部屋には監視カメラ付いてるから問題ないぞ」

2時間目のテスト。それは、あの邪気眼エンティの作った問題である。担当の教師もエンティ。実に最悪な組み合わせだ。

「？ 烈火斬？ 何て読むんだろ」

少なくともピカチュウより頭のいいブイゼル。彼でもこの問題には苦悩していた。

「普通に読めば『れつかざん』だけど、エンティ先生のことだしなあ」

取りあえずれつかざんと書き、保留にしておいた。

「次は……、狂戦士・魂？」

普通のテストならば、漢字の間に中点が入ることはないだろう。つまり、これは普通のテストではないということだ。

ちなみにこの問題、正答率は0%であった……。

「漢字は分からないからとりあえず置いといて、文章問題をやろう」
そう思い、文章問題に目を通す。しかし、ここにも問題があった。

「次の文章を読み、問題に答えなさい。良かった、普通だ」

以下、その文章をそのまま写したものである。

あ……ありのまま、今起こった事を話すぜ！

俺は奴の前で階段を登っていたと思ったら、いつのまにか降りていた。

な……何を言っているのか、わからねーと思うが

俺も何をされたのか、わからなかった……。

頭がどうにかなりそうだった……。催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチャなもんじゃあ断じてねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を、味わったぜ……。

「エンティ先生……」

これの問いは、『この文章を読みやすくしなさい』のみである。

「気を取り直して、次の問題っと。そろそろまともな問題来るかな

あ
」

問2

次の文の中から、ポケモンの歴史について書かれた書籍の冒頭部を見つけてなさい。

- ・やめたげてよお
- ・メンドーだな
- ・モエルーワ
- ・プラーズマー

「なんなんだ、この選択肢」

信じられないかもしれないが、答えはモエルーワである。

これは知っていたブイゼル。さっさと問題を解き、次の問題へとどんどん進んでいく。

これ以降は特に問題なく進み、ブイゼルは全て解き終わった。漢字は全て分からなかったが。

「闇のゲームの終了だぜ！」

ここの教師、テストをなんだと思っているのだろうか。まあ、答案を自分で集めたエンティの方がましか。

「なんなのですかこの問題は！ 実に不愉快です」

この硬さを見れば分かると思うが、ただいまの国語のテストへの

ミュウの感想である。

「まあまあ、エンテイ先生の作った問題なんだし、しょうがないんじゃないかな」

「そうだよミュウ。エンテイ先生が問題を作ったという時点で、それに気づかなきゃ」

ブイゼルとピカチュウに論され、ある程度KOOLになるミュウ。KOOLは誤字じゃないです。

3時間目は問題ない社会のテストだったため、割愛する。

次の日。テスト2日目

今日の予定はポケ学、英語、理科だ。おそらく理科が一番の難問だろう。

今日も一番乗りだったラティース。ちなみに、昨日のテストは国語がかなり不安だそうだ。

「今日は理科に注意しなくちゃ……」

先生のことをしっかり理解しているラティースであった。

場面は移り変わり3時間目。コロコロ視点が変わっているが気にしないでほしい。

問1、光合成をするのに必要なのは養分と何？

読者の皆様ならお分かりであろう。この問題文が問題として成立していないことに。

もちろん、この問題の正答率は0%である。テスト後、誰が異論を唱えようと訂正はされなかったという伝説を持つ問題である。

問14、最後に、このテストどうでした？（10点）

この学校のテストは、アンケートに答えるだけで10点もらえるそうです。羨ましいことこの上ない。

理科の問題数は少ないが、レベルが高いので（問題文の間違いな意味で）解くのにかなりの時間を要した。頭のいい奴らほど。

なんだかんだでテストは終了。以下はテストの答え合わせである。

数学、ピカチュウの悩んだ問題

$$\times (2 + 5) \div \times$$

$$\parallel (2 + 5) \times \div \times$$

$$\parallel 2 + 5$$

$$\parallel 7$$

$$A, 7$$

ピカチュウの回答：12

ブイゼルの回答：2x + 5

ミュウの回答：7

ムウマの回答：知らないわ♪

国語、『烈火斬』何て読むでしょう

答え：れっかざん

解説、実はこの問題シェイミが作りしました。深読みするとダメなことですね。

ピカチュウの回答：空白

ブイゼルの回答：れっかざん（書き間違え）

ラティアスの回答：れっかざん

ムウマの回答：インフェルノ・ソード（エンテイ先生の御好意で丸になってます）

『狂戦士・魂』何て読むでしょう

答え：バーサーカーソウル

ピカチュウの回答：きょうせんしてんたましい

ブイゼルの回答：きょうせんし・たましい

ミュウの回答：中点が入っている為お答えできかねます

ラティアスの回答：クレイジーバトラー・ソウル（英語にしてみた）

ムウマの回答：婆さん過疎る

次の文を読み、問題に答えなさい

あ………ありのまま、今起こった事を話すぜ！

俺は奴の前で階段を登っていたと思ったら、いつのまにか降りていた。

な………何を言っているのか、わからねーと思うが

俺も何をされたのか、わからなかった………。

頭がどうにかなりそうだった……。催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もっと恐ろしいものの片鱗を、味わったぜ………。

この文章を読みやすくしなさい

ピカチュウの回答：書き写すのが面倒です

ブイゼル：（これが正解です）

ありのまま、今起こったことを話します。

僕はあなたの前で階段を上っていたと思ったら、いつの間にか降りていました。

何を言っているのか分らないと思いますが、僕も何をされたのか分かりませんでした。

頭がどうにかなりそうでした。催眠術や超スピードなど、そのようなものでは決してありません。

それ以上に恐ろしいものの片鱗を、味わいました。

ムウマの回答：何それ？

理科、問1

答え：酸素と窒素

ピカチュウの解答：そもそも養分はいらない

ムウマの回答：日光

ミュウの回答：養分は必要ありません。二酸化炭素と水、それに日光を葉緑体に当てると光合成が出来ます。

ラティアスの回答：酸素（ボケたつもり）

問14

答え：書いてあれば丸だよ♪

ピカチュウの回答：問題文に間違いが多すぎ

ブイゼルの回答：テストじゃなければ楽しいと思います

ムウマの回答：もつとはっちゃんけた問題が欲しかったわ

ミユウの回答：これらの問題は正確性に欠けており、生徒の力量を計るものとしては不適切であると感じました。

ラティアスの回答：もっと正しい問題を出してください

結論。この学校では、頭が良くても点数がとれるとは限らない。

テスト！ ゆっくりしてってね！（後書き）

報告

『TIPS4：恩師』はこの話と同時刻のものです。次回の話に関わりますので、目を通していただけると幸いです。

答え合わせ

1 タイトル『ゆっくりしてってね！』

↓ ゆっくりしてってね！！のパロディ

2 デンリユウ「何でいびきにはガ行が似合うんだろ……」

↓ アニメ『星のカービィ』のパロディ。

デデデ大王「何でいびきにはガ行が似合うぞい……」

3 ピカチュウ「大丈夫だ、問題ない」

↓ 『El Shaddai エルシャダイ』のセリフ。ちなみに死亡フラグである。

4 エンティ「闇のゲームの始まりだぜ！」

↓ 『遊戯王 デュエルモンスターズ』のバクラのセリフ。

5 国語の問題…狂戦士・魂

↓ バイサーカーソウルのパロディ。と同じ作品で、かなり有名なので割愛。

6 国語の問題…あ、ありのまま（ry

↓ 『ジョジョの奇妙な冒険』のパロディ。これも有名なので割愛。

7 やめたげてよお

↓『ポケットモンスターブラック・ホワイト』のベルのセリフ。

8 ムンドーだな

↓『ポケットモンスターブラック・ホワイト』のチエレンの口癖。

9 モエルワ

↓『ポケットモンスターブラック』でのレシラムの鳴き声。

10 プラズマー

↓『ポケットモンスターブラック・ホワイト』のプラズマ団の口癖のようなもの。

11 ピカチュウ「そうだよミュウ」

↓『ファイアーエムブレム 紋章の謎』のとあるユニットのセリフ。
詳しくはニコ百の記事を参照してください。おそらく一番の難関。

12 KOOL

↓『ひぐらしのなく頃に』の登場人物である、前原圭一のおだ名。

13 (問題文の間違った意味で)

↓マイメロディの同人誌のパロディ。

以上です。11番の難しさは異常ですね……。完全に文に溶け込んでますもん。

今後も読者様参加企画はありますので、お楽しみに！

体育祭陸上部門！ 走れ飛び立てぶっ壊せ！

今日は体育祭、テストの次の日に開催というのも変な話だが、この日に開催される理由は、テスト後の息抜きのようなものらしい。

今日は快晴。いわゆる体育祭日和である。とはいっても、エンテイを筆頭に日本晴れを使って晴れにしているのだとか。

ただ、その息抜きに力を入れる生徒ももちろんいる。サンダースを筆頭に、運動系のポケモンは勉強よりも、今日の為に色々してきた部活を大事にし、練習に励んできたことだろう。

「えー、こつちを本命にしてた生徒も数多くいると思うが、これより、テスト後の息抜き企画、体育祭を開催する。司会は、俺デンリユウが務めるぞ」

デンリユウにしてはまともな開会の言葉だ。デンリユウが言うことは真面目なことの割合が少ないから、こんな感じで書けるのだろう。

「息抜きなのに、何で強制参加なんだろ……」

デンリユウの話など耳にも入っていないような感じでうつむいているのは、ブイゼルである。彼は運動が全然ダメ、とまではいかなくても苦手な部類だ。

「うちも苦手……。こんなことより家であれしたりこれしたりした方が良いのに」

シャワーズも運動が苦手な様子。彼女の場合は極度の運動嫌いなようだ。

「まあ、お互い頑張ろうか」

「そだね、それじゃ」

シャワーズはいつもの元気もないようだ。青色の火の球のエフェクトが出るくらい落ち込んでいる。そのまま3組の方へ戻る。何をしにこっちに来たのだろう。

「大丈夫かな……。っと、そろそろ話が終わるね。デンリュウ先生にしては長かった気がするなあ」

「それじゃあ準備体操をするから、各自散らばってくれ」

準備体操といっても、この世界には多種多様のポケモンがいる。そんな中、準備体操なんて出来るのだろうか。

「それじゃあ、音楽に合わせて適当にやってくれ」

デンリュウもそこは面倒だったようで、適当という言葉で紛らわす。

準備体操ではお馴染みのあの音楽が流れる。ピアノのあの曲だ。

「もっとバリエーションないのかな。最近飽きてきたかも」

「デンリュウのことだわ、そんなもん面倒で用意しないでしょうね」

たまたまブイゼル近くだったムウマが、ブイゼルと一緒に喋っている。

小柄な彼らは前の方にいる。ピカチュウ？ 彼はきつとど真ん中にいるだろう。実際、ムウマのいくつか後ろに黄色い体が見える。

「準備体操終わり！ 次は50m走だ。出場するポケモン以外は下がれよ」

ムウマもブイゼルもピカチュウも、この競技には出ないため、後ろの観戦席に下がる。

「ピカチュウ、何をしてもいいんだよな？」

突然、サンダースが声をかけてくる。

「ん？ 良いんじゃない？」

特に何も考えずに答えたピカチュウだったが、その後の競技を見てはげしく後悔するのだった。

く50m走く

「50m走1年は、サンダースとラグラージとガブリアスね。1レースだけの種目の審判ってなんか嫌だなあ」

審判であろうセレビィが並んでいる3人を見て、そう呟く。セレビィにこのレースの審判をさせたのは間違いではないだろう。

ぶつぶつ文句を言いながらも、ゆつくりと旗を上げる。

一瞬の緊迫。3人視線がセレビィの持つ旗に集中する。

「よい、スタート！」

旗が振り下ろされ……、無い。ただ、セレビィの声だけが空しく木霊する。

「あれ？ あ、旗下げ忘れちゃった」

こんな所でもちゃっかり天然なセレビィであった。

「あ、やり直す？」

「当たり前だろ！」

その後、レースではなんのハプニングもなく1位はサンダース、2位はガブリアス、3位はラグラージで終わった。

〈障害物競争〉

「これから障害物競走を始めるでしゅ。出場者はムウマ、オノノクス、シャワーズでしゅね」

今回の審判はシェイミだ。口でくわえて旗を持っている。どうやって振るのかは分からない。

「ひひにふいて（いちについて）」

口でくわえている為上手く喋れないようだ。ムウマから失笑が漏れている。

「ほーいドン！（よいドン！）」

シェイミは、自分がくわえていた旗を地面に向けて落とす。自分が台の上にいたことを利用した落差テクだ。

それに合わせて一斉にスタートする一同。最初の障害は校舎だ。

まず、コースを説明しよう。この障害物競走は校舎の目の前から始まる。その後、それを迂回するなり飛び越えるなりして、この先にあるバトルフィールドを目指す。後は、水上フィールド（水深25m）の奥底にあるビー玉を持つてくるというものだ。他にも仕掛けはあるが、それはその都度説明しよう。

「校舎……。うちは普通に迂回しようかな」

シャワーズは校舎の壁沿いを歩き、裏にあるバトルフィールドを目指す。ちなみにだが、校舎の端には有刺鉄線があるフェンスがあり、かなりの遠回りをしないと裏に回れなくなっている。

「俺は校舎の中を通って行くか」

校舎の中を通った方が早いと思ったオノノクス。ちょっと離れた入口を目指す。入口の扉を開けると、色々と仕掛けが作動する仕組みだ。

「みんな馬鹿ね。こんなもんぶっ壊すに限るでしょう?。」

そんな野蛮なことを言っているのは、もちろんムウマである。既に、目の前には巨大な黒い球体が3つほど浮いている。これらをぶつける気だろう。

「シャドーボール特大バージョン! これで校舎に大きな穴が開くわね」

その塊は、1つずつ順番に校舎に当たり、ムウマの言通り大きな穴が開く。それでも崩れない校舎の造りはかなりいいのだろう。

その中を通って行ったムウマ。途中でオノノクスと思われるのが倒れていたがスルーした。

「さて、水上フィールドの周りに電気が流れているフェンスね。10mはあるんじゃないかしら。このゲーム、結構鬼畜ね」

ムウマはお遊び感覚なようだ。どうやって壊そうか思考錯誤しながらフェンスを眺めている。

「ムウマちゃん、何してんねん」

先ほどの惨劇を見ていたシャワーズ。大分遠回りだったが、彼女もたどり着いたようだ。

「……面倒ね、サイコキネシス!」

シャワーズの言うことなど聞く耳も持たず、サイコキネシスでピ

ー玉を持つてくる。

そのビー玉、間近で見てもかなり小さい。はつきり言って探し当てるのはほぼ不可能だろう。

「これ作った奴はクリアさせる気ないのかしら」

本当、ムウマが正論である。でも、それをすっかりクリアしているものだから憎い。

「結果、ムウマの一人勝ちでしゅね」

こうして、今日で1番波乱万丈だったであろう競技が終わった。

く飛びつき綱引きく

「ルール説明だ。運動場の中心にある22本の縄を、先に自分のクラスの陣地に8本持ち込んだクラスの勝ち。簡単だろ？」

今回の審判は、珍しくまともなデンリユウ。体育教師だから、体育祭ぐらいはまともにやろうと思っているのだろうか。

説明には無かったが、この競技は3クラス同時に行う。だから、縄の数が22本なのだ。裁判官の法則と同じである。

「いいわね？ 『何をして』 いいのよ！」

クラス全体に大演説を行っているリーフィア。本気で勝ちに行く

気なようだ。

「それでは。よいい、スタート」

抜けた開始コールだったが、そんなことも気にせず各クラスとも縄に群がる。

「空中援護！」

「はい」

1組の作戦。それは空を飛べるポケモンを使い、空で逃げ切る作戦だった。

などと説明しているうちに、バクフーンが空に放り投げた縄を空中でキャッチするフライゴン。

「ザングース！ 飛んで取り返してきなさい！」

「無理だろ！ 俺飛べないし」

リーフィアは無理難題をザングースに押し付けている。

「しょうがないわね。葉っぱカッター！」

リーフィアから放たれる無数の木の葉。狙いはフライゴンの持っている縄だ。

その木の葉は縄だけに当たり、縄を半分にする。

「やったわね♪ ザングースとつてきて！」

ちなみに縄が切れた場合、長い方を持っていた方が得点となる。
そのため、縄の長さも奇数に設定してあるのだ。

「ふえ？ 縄が軽くなったような……。もしかして力が付いたのかな♪」

「こういう時まで天然發揮すんな！ 縄が切れてるから！」

バクフーンの声も、浮かれているフライゴンには届くはずもなく
そのまま自分の陣地の方へ飛んで行ってしまった……。

「とつてきたけど。これで何本目？」

バクフーンとフライゴンが漫才をしているうちに、ザングースが
落ちた縄を拾って持つてくる。

「これで8本目ね！ 私達の勝ちなはずよね、デンリユウ先生！」

皆さまも予想していたかもしれないが、デンリユウは寝ている。
そのくらいは予想できる範囲なので、リーフィアが葉っぱカッター
デンリユウに向けて飛ばす。

「ん？ 試合終わったの？ じゃ、そのチームの勝ちでいいし」

寝不足なのだろうか、適当に試合終了を宣言するデンリユウ。ま
あ、何はともあれ、2組の勝利となった。2位は空中作戦を使った
1組である。

（200m空中リレー）

これは、学年合同クラス対抗リレーである。つまり、1組グループ、2組グループと分かれ、その中に1年1組、2年1組、3年1組の走者が控えているのだ。分かりにくい説明で申し訳ない。

「それでは、よいスタートです」

ジバコイルの声を聞き、第1走者である2年生のフライゴン（1組）、ストライク（3組）、ウォーグル（2組）が飛び立つ。何故2年生からなのかは触れてはいけない所だろう。

結構な接戦になっている。ストライクを除いて。

「何やってんのよストライク！ もっと早く飛びなさいよ！」

まあ、羽の大きさに天と地の違いがある。ストライクが遅くなるのも仕方がないのだろう。

ストライクが選出された理由も、他に飛べるポケモンがいなかったらであって、決してストライクが早いわけではない。

などとしているうちにフライゴン（1組）と、ウォーグル（2組）がそれぞれ1年生にバトンを渡す。

ちなみに、1年生からの選出は、ラティアス、シャンデラ、ガブリアスである。

「バトンもらいます！ ついでにミストボール！」

ラティアスの方が数瞬早くバトンを受け取り、飛び立つ瞬間に地面に向けてミストボールを打ちつける。これにより、スタート近くには霧がかかり見にくく、というか見えなくなってしまった。しかし、シャンデラは霧がかかる前にバトンをもらっていたので、その霧の中を突きぬけてくる。

「審判！ あれ反則じゃないの？ 別に反則じゃなくても構わないけど。別のクラスだし」

「相手のポケモンに危害ヲ加工していナイので、問題無シです」

この学校では、相手のポケモンに危害を加えなければ何をしてもいいらしい。スポーツマンシップなど存在しないのであろう。実際宣誓もしていない。

「え？ ガブリアスはどこ？」

霧がかかってしまい、ガブリアスを目視できないでいるストライク。地面に降り立ってはいけないというルールがあるため、飛んだまま探している。

「コーコーでーすーよー」

うらめしやゝ的なノリで霧から出てくるガブリアス。霧もだいぶ収まってきたので、なんとか出られるようになってきたのだ。

「ひい！」

もちろんそんなノリで、霧の中から出てくればビビらないわけがない。すみあがってバトンを落としてしまう。

ガブリアスの狙いはまさしくそれで、まさかさまに落ちてきたバトンをしっかりキャッチし、そのまま飛び立つ。飛び立つとはいっても、かなり低空飛行だ。

「ごめんなさい、ストライクさん！ 幽霊屋敷のバイトも役に立つもんだな」

色々と精神的に参ってしまったストライクの横を、何やらものすごい勢いで二つの影が通り過ぎていく。

無論、ラティアスとシャンデラだ。ものすごい勢いで迫っていく。

そこに控えているのは、ラティアスの兄、ラティオスと、……ゲンガー。一体どうやって飛ぶつもりなのだろうか。

「お兄ちゃん！ 後はよろしくね！」

「どうやって飛ぶんですか!？」

二人とも、思い思いのセリフと共にバトンを託す。

「任せとけ！」

「科学部との結びつきがあるからね！」

ラティオスは飛び立ったが、ゲンガーはなにやら怪しげな機械に乗っている。

ラティオスとの距離は縮まら無いが、すっかり後ろについている
ことを見ると、結構凄い機械なようだ。

ゲンガーの機械は科学部からもらったものだ。その製作者の科学
部曰く「スイッチ一つで動く」のだそうで、ゲンガーはハンドルで
操縦しているだけだ。

「ウィンディさん？　どうやって飛ぶんですか！？」

「大丈夫！　機械がある」

何やらウィンディも機会を使うようだ。製作者はフーディンだと
か。乗り込む前にラティオスがゴールしていたことには突っ込まな
い方が良さだろう。

「あれが私の発明品。『空も飛べる』とでもしておきましょうか。
あの機械の上で走ると、色々と起こって空を飛ぶことが出来るので
す」

色々突っ込みどころのある機械だが、動いている所を見ると使
えないこともないようだ。

ちなみに、後日ウィンディにこのことについて尋ねると、フーデ
インが無理にこれを使わせたらしい。本当に傲慢である。

「あれ？　私の計算ではもっと早く飛べるはず」

機械が本領を発揮する前にゲンガーがゴールしてしまったので、
とくに見せ場もなく終わった。しかし、ウィンディは全速力で走っ

ていたが、かなり遅かったとだけは言える。

結局、1位はラティオスチームの1組、2位はゲンガーチームの2組。3位はウィンディチームの3組だ。原因はほとんどフリーディンにある。

後ほど、文芸部でフリーディンに色々聞いて見ると、時速150kmという、無茶なスピードで走れば30kmの速さが出るというものだった。どういう作りをしているのだろうか。

（各種リレー）

名（迷）場面を1つお届けする。

「シャワーズ！ 次お前じゃん」

「はいはい。あ、ちょっと待って、あいつからメールだ」

シャワーズが携帯を開く。なんで今持っているのかは分からない。

「やった！ 懸賞当たった！」

「どーでもいいから早くしろ」

「どーでもよくないし！ あれだよ！ 非売品の限定フィギュア。テスト週間が始まったときからずっと送り続けてやっと当たったんだから！」

結局、限定フィギアについて語りつくしたシャワーズ。気付いた時にはリレーは終了していて、3組はぶっちぎりの最下位だったそうだ。

〈昼食〉

「お弁当はこっちですよ」

ホウオウがお弁当を配っている。中身は、とてもタダとは思えないようなもので、かなり豪華だった。

「あ、見つけた。大食いチャンピオン」

「はい？」

ピカチュウに声をかける。もちろんピカチュウは振り向く訳だが、振り向いた先にあったのは、かなり高く積まれたお弁当。ざっと見て20箱くらいはある。

「これはチャンピオンの分。残さず食べよ」

「はあ……」

お腹は空いていたのでお弁当自体は嬉しいピカチュウ。しかし、『チャンピオン』という単語のせいで、周りの視線を一斉に浴びていた。これは嬉しくない。

「じゃ、俺はちょっとルギア校長と話してくるから」

ホウオウは、山積みのお弁当を残し、校長室へと向かって行った。

ピカチュウは、ホウオウの話とは、請求の事だろうなあと思いつつ、お弁当をすっかり全て平らげるのであった。

昼食後の競技は割愛する。次回からバトル部門！

「私の出番ね」

体育祭陸上部門！ 走れ飛び立てぶっ壊せ！（後書き）

ムウマがチートなのは仕様です。

今後、さらなる猛威をふるっていくことでしょうか……。

バトル部門！ ムウマとラティアス、混ぜるな危険

色々とはっちゃけていた体育祭だったが、ここからは心機一転。ちよつと真面目な体育祭になる。

「あんまり変わってないわね」

第1回戦は、ラティアスチームVSシャンデラチーム（2組）。どちらが優勢かは分かりであろう。

「ただいまより、第1回戦。1組VS2組の戦いを始め！」

今回の審判はエンティ。フェイント気味で試合開始の合図を出す。

「雨乞い」

ムウマは、せっかくエンティ一同が日本晴れを使い晴れにしていたのを雨に変える。しかし、バトルフィールド内でしか雨雲が発生していないのでそこまで周りに被害はないようだ。

「それじゃあ、日本晴れ」

日本晴れを発動させたのはシャンデラだ。彼は炎タイプなので、晴れ時の技の威力はかなり跳ね上がる。彼の特攻の高さからしても、十分危ないだろう。

「よそ見はダメですよ！ 竜星群！」

いきなりの大技。天気を雨にすれば日本晴れを使ってくると踏んでの行動だ。これぞダブルバトルである。

しかし、ラティアスの放ったそれはもはや竜星群と呼べるものではなかった。実際ならば大きな塊が破裂し、その破片を相手にぶつける技なのだ。が、ラティアスのはその大きな塊が大量に降ってくるというチート級の威力である。

「シャンデラ、あれマジやばいって!」

オノノクスは同じドラゴンタイプとして、すぐさまそれがとんでもない威力だと分かったようだ。守りの体制に入っている。というか、あの大きさの竜星群を見れば誰でもそう思うであろう。

「しょうがないか。一回避ければ威力も下がりますし。ここは守る!」

「俺も!」

二人とも守るで流星群を回避する。回避できたのが奇跡と呼べるくらいだ。

「あちゃゝ、やっぱりそんぐらいじゃ破れないか」

残念そうな仕草を見せるラティアス。守るをぶっ壊すつもりだったらしい。そして、性格が全然違うような気がしないでもない。

「ラティアスさん。今のは何割くらい?」

さり気なくムウマの訊ねた一言。後悔先に立たずという言葉があ

ることを知らないのだろうか。

「1割ぐらいしか出してないけど」

このときムウマは思った。絶対に彼女にだけは逆らわない方が良いと。

「……。あ、そろそろあれの効果出てきたんじゃない？」

ムウマの言うあれとは火炎球のことで、持っていると火傷になっ
てしまうとても熱い球だ。はつきり言って持つメリットがない道具
に分類される。

「そうね。じゃサイコシフト！」

ラティアスとオノノクスの体が薄く光り、その間を赤い何かが通
過する。光が消えると同時にラティアスは持っていた球を投げ捨
てる。

「熱い！ なにこれ？」

「火傷したんじゃない？ サイコシフトらしきものが見えたし」

「見えたなら言ってくれたっていいじゃん！」

バトル中とは思えないのどかな会話だ。しかし、ムウマ達の狙い
はまさしくこれだった。

「そろそろね。審判！ コール準備して！」

「は？」

エンティが驚いて2組の方を見ている。すると、そこには倒れているオノノクスとシャンデラの姿があった。

「貴様ら……。何か暗殺できるような物でも持つてるだろう！」

エンティの中二病がここで発症する。審判だからしないとは思っていたのだが……。

「あ……。予選は面倒だから。これのネタがばれると使えないし、今はノーコメントよ」

面倒くさそうな顔をして答えるムウマ。彼女も発症するとは思っていなかったらしい。

「貴様らが何か不審な動きでもしたら、すぐさま試合を止めるからな！」

結局は試合終了のコールしてくれたエンティであった。

もちろん、ムウマ達はこの手法を使って3組も倒した。それでは、このトリックをラティアスさんに解説していただこう。

「こういうのもなんですけど、私一人でも予選ぐらいは突破できるんじゃないんですね。ですから、神秘の守りと滅びの歌を組み合わせ、一気に倒しちゃいました」

後日、このセリフを聞いたシャンデラ達はラティアスに勝負を挑むが、結果が語られることはなかった。

続きまして2年生のチーム。注目の1戦であろうこの戦い。魅せながら勝つと豪語していたフライゴン達と、何をしでかすか分からない、リーフィア+おまけとの戦いである。

「俺っておまけ？」

「それは気にしたらだめよ」

そんな話をしている間に試合開始のゴングが鳴り響く。ライコウが準備してくれたものだ。なお、ライコウ本人の出番はない。

「バクフーン！ 手筈通りに行くよ！」

「おう！」

それが彼らの合図だったのだろう。バクフーンはフライゴンに乗り、2人揃って空へと舞い上がる。

一方リーフィア達は空を飛ぶ手段を持ち合わせていないため、地上で立ち往生している。

「空ね……。ザングース、飛びなさい」

それが普通と言わんばかりの顔だ。実際は無理だが、謎の自信がリーフィアからあふれ出ている。

「いや無理無理！ 跳ぶならできるかもしれないけど、飛ぶのは無理！」

「大丈夫よ、フーデインさんから空も飛べるを借りてきたから」

「何でそつちなんだよ！ ゲンガーさんが使っている奴の方がよかつたじゃん」

実にくだらない言い争いである。そんな様子を空から眺めているフライゴン達。

「のどかだねえ」

試合中であることも忘れて、下の二人の言い争いを楽しく見物している。

「そんなことより、攻撃しないでいいのか？ 試合中だぞ」

唯一、今試合中だということを覚えていたバクフーン。観戦しているポケモンも、リーフィア達のやり取りを見て笑っている。

「あ、そう言えば試合中だっけ。じゃあ、バクフーンからやつちやつていいよ」

「じゃ、遠慮なく！ 捨て身タックル！」

3階建ての校舎より更に高い位置を飛んでいるフライゴンから飛び降り、リーフィア達めがけて落ちていくバクフーン。

もちろん、未だに言い争いをしているリーフィアとザングース。

彼の接近に気づけるはずもなく、バクフーンの捨て身タックルが直撃する。しかも、上から落ちてきたバクフーンに抑えられ、二人とも身動きが取れなくなっている。

「じゃあ、こっちは火炎放射!」

バクフーンが二人にのしかかっているのを確認した後、フライゴンは火炎放射を放つ。

バクフーンが落ちてきたままのしかかっている為、火炎放射も直撃する。リーフィアには効果抜群なため、かなりのダメージになったようだ。

「え? 何でバクフーンはダメージ食らってないの?」

押さえつけるのをやめ、地に足をつけているバクフーン。確かに、その体には傷らしきものは一切見受けられなかった。

「あ、俺の特性、調べてもらったら貰い火なんだよね」

「うう……、既に私は戦闘不能だけど、ここで補足入れるわ。現実世界では夢特性って言われているけど、こちらの世界では、どちらの特性も半々の確率で持っているの。それを調べてくれるのが、ギヤロップさんが会長を務めるポケモン協会という所で、中学生以上なら無料で調べてもらえるわ」

「あ、補足ども。でも、無理せず寝てた方が良いんじゃない?」

ちなみに、貰い火とは炎タイプの技を無効にし、代わりに自分の炎技が強くなるという技である。

「なるほど……」

素直に感心しているザングースだが、試合中だということを忘れていたようで、考えている途中にプラスチックバーンを食らい、あっさりノックアウトしてしまった。

魅せるバトルをすると宣言していただけあり、フライゴン達も一つのチームも難なく倒して決勝進出を決めた。

3年生編でお送りするのは、ゲンガー率いる2組と、オクタン率いる3組との対決だ。

「それじゃあ試合開始です！」

学年主任のスイクンがコールをしたと同時に、オクタンから勢いのある水流、ハイドロポンプが放たれる。

「冷凍ビーム！」

放たれた水流に向かって冷凍ビームが放たれる。もちろん凍ってしまい、巨大な氷の柱がバトルフィールドに出現することになった。

「火炎放射！」

その水流と同じスピードで走っていたと思われるウインディ、グレイシアに向かって火炎放射を打ち込む。

不意を突かれた攻撃だったため、避けることもできずに直撃してしまう。

「熱い。という訳で、この恨み食らいなさい！ ミラーコート！」

火炎放射で受けたダメージの2倍に恨みも込めてウインディに跳ね返す。しかし、軽々と避けられ、その後ろにいたスイクンに直撃してしまった。

「痛っ！」

「不意打ち！」

さきほど、グレイシアに接近したときにウインディの陰に隠れていたゲンガー。頃合いを見て攻撃する。

「っ！ ニトロチャージ！」

炎を纏い、ダメージを受けながらも反撃に成功する。しかし、その後の突進する相手がいない。グレイシアには、恨みのこもった声を聴くのが恐ろしくて攻撃できないし、ゲンガーはまた陰に隠れてしまったので攻撃できない。

「すみません！」

結局、ウインディはスイクンへ突進することにした。

「何で〜！」

「グレイシア！ これ受けてみなさいですわー！ チャージビーム、

冷凍ビーム、火炎放射！」

オクタンは、電気、氷、炎と擬似的トライアタックを完成させる。それらは合体して……冷凍ビームは溶け、その水で火炎放射も火の粉以下の威力になってしまい、結局チャージビームしか届かないと思いきや、そのチャージビームさえも狙いが悪かったのか、スイクンに直撃した。

「わざとなの!？」

「霰、で吹雪」

先ほどは雨が降ったが、次はバトルフィールドに霰が降る。そのおかげで吹雪の範囲が広がり、一気に戦場を巻き込む。ちなみに、中にはまだゲンガーもいるのだがお構いなしだ。

「吹雪吹雪吹雪吹雪吹雪吹雪吹雪吹雪吹雪！」

絶対にPPが切れているような気もするが、吹雪を連打している中はずっとおぞましいことになっているだろう。

その後、吹雪の中から出てきたのは、ウインディとオクタン、ゲンガーの氷像と、何故か凍らずに倒れていたスイクンの姿だった。

次の試合はケッキング率いる1組とゲンガーチームだが、ケッキングが「面倒」とか言って試合を棄権したため、ゲンガーチームが決勝へ進むこととなった。

バトル部門！ ムウマとラティアス、混ぜるな危険（後書き）

今回は決勝戦です。予定表には書いていないサプライズが仕込まれるかもしれません。

それと、試合の展開が一方的過ぎる点はすいません。決勝ではまともになるはず。

バトル部門決勝戦！ 緊急参加の教師軍！？（前書き）

先にお詫びしておきます。今回のバトル、この章の最初に行われたサンダースとのバトル以上に頭脳戦です。

バトル部門決勝戦！ 緊急参加の教師軍！？

激しい戦いを勝ち抜き、決勝に残ったのは、ラティアスチーム、フライゴンチーム、グレイシアチームだ。

「それでは、これより決勝戦を開始する。と言いたいが、俺たち教師も急遽参戦することになった」

これにはさすがにどよめき上がる。「それじゃあ試合が長くなるね」とか、「あのデンリユウが参加するって、いったい何をたくらんでいるんだ？」とか。

「静かに！ 参加するのは、俺と、スイクン先生の代理のシェイミ先生だ」

前代未聞の組み合わせである。色々とおかしなことになりそうだ。

ちなみに、スイクンは保健室でお休み中である。吹雪の後遺症で凍ってしまっているらしい。受けた時は凍っていなかったのに、おかしい後遺症だ。

「というわけで、参加チームが4組でキリが良いので、トーナメントを行う。第1試合が1年チーム対教師チーム、第2試合が2年チーム対3年チームだ」

デンリユウは、最後に早速始めるぞと言い残し、準備をしに職員室へ戻って行った。

「ラティアスさん。どうやって倒しましょうか？ 教師チームを」

「そうですねー、双方に共通する弱点もないですし、ここは片方を集中攻撃して2対1に持つてくるのが一番じゃないですか？」

ラティアスの提示した作戦は、ダブルバトルでの主流の作戦だ。

「後、相手の狙いは多分滅びの歌を使えるムウマさんに集中すると思うので、守るはあまり使わないようにしてくださいね。私になるべく相殺しますから」

「大丈夫よ、いざとなったらいたみわけで体力を回復するわ」

その後、2人はどちらからでもなく軽く笑い、バトルフィールドへ向かうのだった。

「試合終了！ 勝者2年代表！」

審判のルギア校長の高らかに響くコール。

「やったね♪」

「おう！」

フライゴン達も舞い上がっている。まさか3年生に勝てるとは思っていなかったのだろう。

一方、グレイシアとゲンガーは既に試合に興味を無くしているらしく、どこかへ消えてしまった。可愛げのない奴らだ。

「あら？ 何で先に第2試合をやっているのかしら」

丁度、試合が終了したタイミングでバトルフィールドに到着する。

デンリュウの説明にはなかったが、決勝戦は運動場ではなく、正式なバトルフィールドを使用する。観戦する場合は、フィールドの大きさ的にも安全面的にも生徒をフィールドの近くに入れるわけにはいけないので、カメラ越しでの観戦となる。

「うーん、教師の方達の準備がまだだからでしょうか」

そんなことを考えても答えが出るわけではないので、あまり深く考えず、フィールドにいるルギアに話しかける。

「こっちの試合ってまだですか？」

「教師チームはまだ来ないから出来ないんだよねー」

やっぱりこのことが原因だったようで、さすがのルギアもため息をついている。よほどデンリュウには苦労しているのであろう。

「ルギアー！ 準備終わったでしゅー！」

ルギアに対してタメ口なシェイミ。目上の人にそんな態度でいいのだろうか。やはりこの学校、色々な意味で不安である。

「それじゃあ始めるかー。両者バトルフィールドへ！」

ルギアの掛け声とともに、両者少し緊張した顔つきで前へ出る。

しかし、観戦客のいないこのバトル。なんだか面白い光景である。

「1年代表対教師代表！ バトル開始！」

今、戦いの火蓋が切って落とされた――。

「まずはムウマちゃんの方を狙うでしゅ。分かってましゅね、デンリユウ」

「んじゃ、光の壁！」

デンリユウとシェイミを囲うように、あまりよく見えない壁が現れる。特殊攻撃、つまりはラティアスの竜星群やムウマのシャドーボールの威力が半減される。

「おゝ！？ あの適当なデンリユウが後先を考えて行動したぞ！」

解説をやっているのはルギアだ。これ以降、ルギアの解説には突っ込み入れない。

「シードフレア！」

シェイミが一番得意とする技を繰り出す。形容しがたい緑の渦がムウマとラティアスめがけて突進してくる。

ぶつかるその瞬間、その間も2人は薄く笑みを浮かべ、その渦に突っ込んでいった。もちろん、緑色の渦は彼女らを吸い込み、爆発する。

「おや？ 1年チームが突っ込んでいったぞ？ シエイミの攻撃程度耐えられると思ったのか？」

もちろん、かなりの威力のある技だ、さすがのラティアス&ムウマでも、さすがにこれは危ないのではない、か……。

「あれ？ こんなもんですか？ 自己再生で全然回復できちゃいますけど」

「私もデンリユウから頂いたわ」

薄く笑っていたのはこれをするのが楽しみだったからみたいだ。

「なんか疲労を感じると思ったらそれか！ ゆるさねえぞ！ 放電！」

電気がデンリユウを包み込む。そして、そのままデンリユウはムウマ達に突っ込んでいった。

不意打ちにもほどがある、と思いつつ軽くかわすムウマとラティアス。空を飛べるから当たり前なのだろうか。

「甘い！」

デンリユウが彼女らの下で止まると、包んでいた電気が突如刃のように変形し、上に飛ばす。飛ばす？

不意打ちに続く不意打ちで、さすがにかわしきれなかったのか、彼女らの体に傷がちらほら見える。

「更に不意打ちでシードフレアでしゅ！」

さきほどの渦がまた近づいてくる。電撃のせいで軽く麻痺しているラティアス達にはかわしにくいものだろう。

と思いきや、シードフレアの渦が一瞬にして消え去り……否、高速で保健室のスイクンまで飛んで行ったのだ。

「私、実は麻痺が一番大っ嫌いなんですよ。あの体の動かない感覚が嫌で嫌で。受けると感情制限が効かなくなっちゃうんですよー、あははは」

「ラティアスさん、顔は笑ってないわよ」

そんなことを言っているムウマもちろん笑っていない。デンリユウとシェイミも死ぬほど後悔しているような顔をしている。

「私優しいですから。竜星群一発で終わらせてあげますね」

この地獄から響くような声を聴いて、誰が優しそうという感情を抱くのだろうか。誰もいないだろう。

既に竜星群ではなく、ラティアスの頭上にはバトルフィールド2つ分はあるエネルギーの塊が浮いている。いわゆるチート技だ。

「いやそれはさすがにマジでやばいんじゃないかしら」

ムウマがこのような感想を残す所で、ラティアスの凄さがお分かりいただけるだろうか。

「多分死にはしないわ」

そう言いつつ、何か遺言ある？と聞くのはどうかとムウマは思った。

エネルギーは分裂し、バトルフィールドを埋め尽くせる程の小さな球体となったしかし、それは前に比べてなので、普通の竜星群の原型と比べてもはるかに大きい。

「デンリユウ先生。これってホーミング性能もあるんです。さてさていくつ受けたら倒れるんでしょうね？」

その後、デンリユウとシェイミの悲鳴と共に、バトルフィールドが半壊した。

「試合終了！ 勝者1年代表！」

そんな中、冷静にコールするルギア先生。ある意味凄い精神の持ち主だろう。

「……っは！ 私何してました？」

「えーっと、バトルフィールドを見ればわかると思うわ……」

ラティアスの視線の先には、もちろん先程破壊されたバトルフィールドがある。デンリユウらは保健室に連れて行かれた。

「私またやつちやいましたか……。本当この癖直さないといけないんですけどね」

悲しそうな表情を浮かべるラティアス。過去に何か辛いことでもあったのだろう、と思い、ムウマはあえて口を挟まなかった。

「ムウマさん。次の試合、私棄権します」

「……分かったわ。私1人でどこまでできるかは分からないけど、頑張ってみる」

それが彼女なりの覚悟だと思い、ムウマは1人で次の試合に臨む。

ムウマ視点の1人称になります。話の途中で変えてすみません！

「さて始まりました決勝戦！ 今回の試合は1年代表、ムウマと2年代表チームの試合です！」

ラティアスさんが事前に伝えておいたのだろう。私だけで試合に出てきても何も言われなかった。

「ムウマちゃん！ 僕達、相手が誰だろうと手加減はしないからね！」

大人げないセリフに聞こえるかもしれない。けれど、私は約束したのだ。だから、この言葉には全力で頷いて応える。

「それでは、試合スタート！」

「バクフーン！ 乗って！」

「おう！」

バクフーンがフライゴンに乗り、空から攻めてくる作戦のようだ。

「火炎放射！」

「ソニックブーム！」

ソニックブームの刃に火炎放射が装飾される。さながら炎のブーメランを見ているようだ。

ここはシャドーボールで全部打ち落として、ついでにシャドーボールをフライゴンさん達の後ろに配置しておこう。

「シャドーボール乱れ撃ち！」

ソニックブームは全て相殺され、私のシャドーボールがある程度フライゴンさん達に向かっていく。

「そんな攻撃当たらないよ！」

もちろん避けられるわけだ。その瞬間、後ろにサイコネシスで固定しておく。これで不意打ちが出来るわね。

「さすがというべきかしら、フライゴンさん」

「まあね。バトルは好きでよくやってたから」

一瞬の間。もちろんこの間を利用しないわけがない。今のうちに

自身に未来予知をかけておく。ついでにバクフーンさんにもかけておこう

「フライゴン、気をつけろよ。あいつ結構やるぞ」

フライゴンさんは、それにもちゃんと答え、後ろを向きソニックブームを発射する。

「ごめんね。この前のサンダース君との戦いを見てたから」

「強いわね……、さすが3年生チームを破ってきただけはあるわ」

私の率直な感想を述べる。この技初めて戦う相手には大抵通用する技だ。それが通じないなら、私も全力で小技を仕掛けるしかないだろう。

一瞬、考えに気を取られていた隙だった。いつの間にか彼らは接近していて、バクフーンの捨て身タックルが直撃する。

「うっ……、未来予知！」

私は前もってしかけていた未来予知を使って上空へ避難す……！

「待ってたよ！ ドラゴンクロー！」

ドラゴンクローと言えば、ドラゴンタイプの得意とする技だ。それをまともに受ける。直後、私の体に激痛が襲い、風を切る音が聞こえる。凄い勢いで落下しているのだろう。まずはサイコキネシスで落下の勢いを抑える。

その間に考えよう。彼らは、コンビネーションで攻めてくる。ならば、それを崩すのが得策だ。

「サイコネシス！」

私は砂を巻き上げ、上空から地面を、地上から空中を見えなくする。これで2人のコンビネーションは絶たれたはずだ。

「うおっ!？」

私はその砂嵐の間に入り、痛み分けてバクフーンさんから体力を分けてもらう。

まずはシャドーボールを辺りに配置する。これで不意打ちは防げるし、今後の不意打ちにも使える。

「火炎放射！」

下から何か攻撃が飛んできた。これは利用させてもらおう。

サイコネシスでこれを止めて、中にシャドーボールを詰め込んで、バクフーンさんに送り返す。多分、フライゴンさんが撃つたものと勘違いするだろう。

「ぐはっ！」

予想通りだ。そろそろバクフーンさんは限界だろう。私の作った砂煙も晴れてきたし、私は上空にいるフライゴンさんの方へ行く。

「やっぱりやるね。2対1だったのにもう1体1かあ」

「そうですね」

彼には気を抜いてはいけない。バトルのときに集中力をかなり使っているように見える。私と同じ感じがするのだ。

「ツバメ返し！」

フライゴンさんは絶対に避けられないと言えるほどのスピードで近づいてくる。ならば、私も正面からぶつかるまでだ。しっかりシャドーボールならまだ仕掛けてある。

「ツバメ返し！」

後は我慢比べだ。どちらが長く集中できるか。先に集中力を切らした方の負けだ。

フライゴンさんの顔に、腕に、翼に、尻尾に、足に。確実にダメージを与えているが、私も確実にダメージを受けている。

「今よ！ シャドーボール発射！」

綺麗に直撃し、私とフライゴンさんの距離が開いた所で、私はそれをフライゴンさんめがけて発射する。

「えっ？」

フライゴンさんは、今までの集中も切れてしまったようで、私のシャドーボールを確実に受ける。最後に痛み分けて体力をもらって完璧だ。

フライゴンさんが落下した砂煙が晴れ、その下にあったのは、バクフーンさんの上に落下したフライゴンさんの姿だった。

「勝者！ 1年代表ムウマ！」

ここから3人称に戻ります。お騒がせしてすみませんでした！

ムウマはフライゴン達に単独で勝ち、今はトロフィーをもらっている。

本当なら学級委員であるラティアスがもらはずなのだが、ラティアスがどうしてもというのでムウマが代わりに取りいったのだ。

「さて、初めての体育祭、無事終了して何よりだ」

ルギア先生の声に、保健室から3つほど、反対する声が聞こえたが気のせいだろう。

「この後、何があるか分かっているな？ そう、片づけだ。全員参加すること！」

ピカチュウ達は嫌そうだったが、ムウマとラティアスのご機嫌で片づけに向かった。

そんな後姿を見て、成長したなあと呟くピカチュウとブイゼル。

「ムウマちゃん。大分成長したね」

「これでまともなポケモン付き合いが出来るんじゃないか？」

「そうだね。それじゃあ僕達も片づけに行こう！」

「……はい」

バトル部門決勝戦！ 緊急参加の教師軍！？（後書き）

さてさて、体育祭編も終わりました。既に現実からだいぶ遅れてますねw

後、今回の話、体育祭編の最後ということで、色々と解答的な内容にしています。解答的というと語弊がありますが、そんな感じで作りました。

また、伏線も結構張りました。次の章で回収されたりTIPSで回収したりしますので、楽しみにしておいてくださいね！

アップグレードを搜索せよ！

体育祭も過ぎ去り、何事もなく6月を満喫したピカチュウ達。その出来事が起こったのは、夏休みが1週間前に迫った火曜日のことだった。

「アップグレード？」

「そうです」

不審そうな顔をして、ピカチュウはもう一度聞き直すが、答えは変わらなかった。

「はあ……、でも何で俺に？」

ピカチュウとジバコイルには、生徒と教師という関係くらいしかない。その疑問が出るのはもったもなことだ。

「リーフィアさん、出番が無くて嘆いてイル、ピカチュウに頼んでみたらどうですか、と提案されマシたのデ」

「こういう時に限って何で気が利くんだよ……」

教師の頼みだし、別段断る理由のないピカチュウは、快くとは言わずともその願いを引き受ける。

「お願いしマスね」

ジバコイルは次の授業があるらしく、そのままどこかへ行っ

まった。

「どうしたの〜？」

その代わり、調理室の方からシャワーズとチルタリスが出てくる。チルタリスの羽には何やらお菓子のようなものが乗っている。

「あ、シャワーズにチルタリスか。なんだか久しぶりだな。特にチルタリスは」

「とか言いつつお菓子食べないでよ。抜け目ないんだから」

チルタリスの言葉に軽く謝罪しながらも、もう一つもらっていくピカチュウ。昼食を食べたばかりだというのに凄い食欲である。

「実は、ジバコイル先生にアップグレードを探してきて欲しいって言われてさ〜。……これおいしいな」

「いや、食べすぎでしょ。ラティオスに持っていくクッキーなのに。アップグレードの件は頑張ってね、それじゃ」

お皿の方に目を移してみると、既に3割程度は無くなってた。

「じゃあな〜。今度俺にもクッキーくれ」

しっかり約束していたピカチュウであった。

クッキーで腹を満たし、少しはやる気になったピカチュウ。とにかくジバコイル先生の依頼の要件を思い出す。

——えーっと、確かアップグレードと言う機械は、第2理科室にあって、鍵は校長室に保管されてると、ミュウの持っている奴だけだろ。関係ないけど、なんでセレビー先生は持ってないんだろ。ミュウから借りるのが手っ取り早いかな——

ピカチュウは、いつもミュウのいる図書室へ行ってみることにした。

さすがに7月ともなれば暑くなるのは当然。以前にまして太陽が照りつけている。

「夏だなあ」

毎年来るものなのだが、やはり季節の変わり目というのは感慨深い。時間の過ぎ去り方の早さを教えてくれる。

廊下を歩いているピカチュウだが誰にも会わない。それは当然だ。こんな暑い中外に出ようとする者など、そうそういるものではない。

出るとしたら炎タイプのポケモンぐらいだろう。彼らにとって暑さはあってないようなものだ。

「さて、ここに来るのも久しぶりだな」

以前、本など興味も無いピカチュウがここに来たのは仮入部の時だ。既に2カ月も経っている事となる。

改めて時が経つのは早いなあと考えてつつも、図鑑を読んでいるミュウを発見した。

「ミュウ？　鍵を貸して欲しいんだけど」

「ピカチュウ君ですか。ここで会うのも珍しいですね」

返答にならないような返答をしてくる。

「うん、本とかは興味ないからなあ。それより鍵」

一瞬、鍵という単語に眉をひそめるミュウだが、なんだか自分で納得したようだ。そばにあったカバンから理科室の鍵を取り出す。

「このことでしょうか？　何か忘れ物でも？」

「そうじゃなくて、ジバコイル先生にアップグレードを取ってきてって言われてさ」

別に隠すことのことでもないので、ピカチュウは普通に打ち明ける。

「アップグレード？　大変申し訳ないのですが、おそらく廃棄処分に出してしまったと思います」

大事なものじゃないのかよ、と突っ込みを入れたくなるピカチュウ。実際に突っ込みを入れるとミュウのメチャクチャ長い講座が始まってしまふので言わない。

「じゃどうすればいいのさ」

「そうですね……。取りあえず理科室に言ってみましょうか。まだ捨てたとは断定できませんからね」

結局理科室へ向かうことにしたピカチュウとミュウは、図書室を後にする。

「あ、そう言えばアップグレードってどっちの教室においてあるの？」

この学校には理科室は2つあり、1つが生物などの観察に使うもの、もう1つが実験などに使う薬品などが置いてある教室だ。

「あれは第2理科室にありますね。薬品などのおいてあるほうです」

「そうなんだ、ってか前に何かいるんだけど」

そこにいたのは、先程ピカチュウがであったシャワーズ&チルトリスと、ラティオスだ。クッキーを食べているらしい。

「料理部の皆さまですね。お揃いでクッキーを食べているようです」

料理部、という言葉にラティオスが反応する。

「おーい！ 料理部じゃなくて調理部だぞー」

調理部に固執しているようにしか感じられないが、彼なりのポリシーなのだろう。

「それよりクッキーくださいな」

すぐさま3人に近づき、クッキーを食べようと輪に入るピカチュウ。

「嫌だね。あげないよ」

クッキーが盛ってあるお皿を持ったまま、チルタリスは調理室に逃げ込む。こちらは第2調理室と呼ばれている所で、調理部の活動場所の1つとなっている。

「あ、逃げられた」

もちろん、ピカチュウはその後を追っていく。食へのこだわりだけは半端ないようだ。

「それより、皆さまはなぜ廊下でクッキーを食べていたのです？教室の中で食べる方が衛生面の観点ではよろしいと思われませんが、どうなのでしょう、ラティオスさん」

ラティオスだけに質問を投げかける。何で名指しなのかは分からない。

「俺？ 特に理由はないが……」

「それならば教室等、比較的衛生的な所で食べることをお勧め致します」

それよりもこの学校では飲食禁止なのを突っ込むべきだろう、と心の中で思っていたピカチュウ。やはり突っ込みはしたくないようだ。

「ああ、分かった。それよりも、どうしてお前たちはここにいるんだ？ こっちの教室は授業で使わないだろ」

ここは6棟。普通の授業では使わない第2調理室と理科室、それに保健室がある。

「いや、理科室においてあると言われるアップグレードを取りに行こうと思って」

「ピカチュウ君、いつの間に戻ってきたのです？」

どうせ帰ってくる答えは1つだろうなと思いつつも、ミュウはピカチュウに質問する。

「ん？ もうクッキー食べたから」

やっぱりとは思いつつも、やはりピカチュウの食欲には感心するしかない。

「そうなのか。頑張れよ。アップグレードなんて聞いたことないけど」

アップグレードとは珍しい部類のようだ。それとも、ラティオスがただ無知なだけなのか。

調理部3人とお別れする。既に第2理科室は目の前だ。

「こちらが第2理科室となります。使用法を誤ると死亡する恐れのある道具や、塩酸などの危険な薬品はこちらで保管してあります」

「つまり、アップグレードって危険なものなのか？」

「はい」

ジバコイル先生はそんなものを何に使うのだろう。とは思ったが、デンリユウじゃあるまいし適当なことに使う訳ではないのだろうと前向きに理解する。

ミュウが扉を開ける。中から理科室特有の薬品がほのかに漂う。中に入れば更にきついものになるだろう。

「ゴミ袋は確かここにまとめて置いておいたはずです」

と言い、理科室の一角を指す。確かに、無造作に投げ込まれたような感じでゴミ袋が置いてあった。

「どこら辺？ まさかこの中から探せってことはないよな」

ピカチュウは、自分に言い聞かせえるようにその言葉を発する。

「あ、申し訳ありません。無造作に投げ込んだものなので、どこにあるか全く見当もつきません」

本当にこの中から探さなければ行けないようだった。こんなことをやっていたら地味なピカチュウが更に地味になってしまう。

「マジか！？ しょうがない。ムウマに頼むか……」

「教室に戻るならば、次の休み時間にこちらに来ましようか。時間的に厳しいですし」

「その問題はないわ。もうここにいるもの」

ピカチュウ達が声のした方——窓の方を見る。そこにはシャドーボールで割られた窓と、空中に固定してあるガラスの破片、そしてムウマの姿があった。

「おい！ お前窓ガラス割るの何枚目だよ！」

「私？ 校舎1つ分と2枚くらいかしら」

ピカチュウの質問をさらっと受け流すムウマ。その答えは常識では考えられないものだ。

「窓の代金、請求してもよろしいでしょうか？」

「ブラッキーさんが直してくれるから問題ないわ」

「いや、そういう問題ではなく……」

さすがのミュウでもムウマにはたじたじのようだ。こういうときには悪知恵の方が働くのだろう、生憎ミュウは悪知恵は持ち合わせていない。

「で？ アップグレードを探してほしいんでしょう？ こういうときは逆に考えるのよ。逆に」

ムウマが言うとなんをいするか分からないから怖い。普通の人なら安心して任せられるのだが。

「つまり、アップグレード以外のものをすべて捨てればいいわけよ

」

言うのが早いか、既にサイコネシスを使い割った窓からどんどんゴミを放り投げていく。

「ミュウ、あれはいいのか？」

「この校舎の下はゴミ捨て場になってます。分別されていれば問題ないでしょう」

ムウマの行動を止めない理由はこれのようだ。ゴミを捨てる手間も省け、一石二鳥というところだろう。

「あ、見つけたわ。これじゃない？」

ムウマがピカチュウの目の前まで持ってきたのは、箱にマジックペンで『アップグレード』と書かれた怪しげなものだった。

「多分そうじゃない？ もう面倒だからそれでいいや。ありがとうなムウマ」

「どういたしまして」

そう言つと割った窓から出て行った。何故扉から出て行かなかったかは謎である。

「それではこれを届けに行きましょう。この時間ならば職員室にいるはずです」

「了解。でも今からじゃ間に合わないんじゃない？」

その質問を待っていたかの如く、こうするのですよと一声かけ、職員室前にテレポートした。

「……あのさあ、テレポートってせこくない？ 絶対に授業に遅刻しないじゃん」

「これもエスパータイプの特権ということでお見逃してください」

ピカチュウに受け答えしながらも、職員室の扉をノックし、ジバコイル先生を呼び出す。

「オや、見ツかりましたか？」

「はいこれです」

ピカチュウがアップグレードと書かれた箱を渡すと、ジバコイルは一礼をした後、それを持って職員室に戻っていった。

「待ちます？ 出てくるはずですし、どう使うのかも興味がありますし」

「そうだな。テレポートで授業には間に合っただから見てってもいいか」

待つこと3分。やっとジバコイル先生が出てきた。

「はい、アップグレード完了です」

見た目こそ変わっていないが、確実に変わったものがあった。

「片仮名が混じってない！ やつと聞きとりやすくなったな」

「そのような感じで使うのですね。参考になりました」

上機嫌のまま授業に臨んだジバコイル。生徒からもウケが良かったらしい。

アップグレードを搜索せよ！（後書き）

報告

『TIPS5：傲慢』『TIPS6：私の正義』は、この話の少し前にあった、とあるポケモンの夢です。

本編に直接な関わりはありませんので、目を通さなくても結構です。

後書き

ジバコイル先生のセリフの書きにくさ&読みにくさから考えられた話です。

でも、キャラが薄くなったような……。

終業式前日　く明日に行事って本気なの？く（前書き）

題名からは予想できないかもしれませんが、後半シリアス風味にな
っております。

途中3行あく所があります。そこから下がシリアス場面なので、読
まないという手もあります。まだ、本編には絡んできませんので。

終業式前日　く明日に行事って本気なの？

7月半ばに差し掛かれば、気分はもう夏休み気分。もちろんピカチュウも例外ではなく、2日後に来るであろう夏休みに心を躍らせていた。

「ブイゼル。もう夏休みだな」

「僕たちはコンクールが近いからずっと練習かな。8月頃から夏休みになる感じ」

そして、夏休みと言えば部活間で練習差が激しい時期でもある。ブイゼルの所属する吹奏楽部はコンクール目指し突き進んでいるし、サンダーズの所属する陸上部も2年連続全国大会出場を目標にしていた。

「何で俺は暇なんだよ！」

一方、ピカチュウの所属する囲碁・将棋部の活動予定は無しだ。いや、無しではなく一度集まる機会がある。

「お祭りで模擬店を開いて金稼ぎ。違つかしら？」

ブイゼルと話しているときに現れるのはお騒がせな悪戯娘、ムウマである。彼女の部活も夏休み中は活動ありのようだ。不敵な笑みからそう見てとれる。

「なんで知ってんだよ。囲碁・将棋部しか知らないはずなのに」

ムウマは知らないとしらをとおしていたが、ブイゼルの口から零れた『夏バトン』という単語でピカチュウもなんとなく察したようだ。

「それは良いけど、夏休み中いつなら遊べる？ 俺は暇だぞ」

それはそうだと華麗に突っ込みを入れる2人。色々あり3人だけで集まるのも久しぶりだが、やはり幼馴染。意思疎通は完璧だ。

「私も基本的にいつでも良いわよ。部活なら休めるし」

「出来ればコンクール終わってからが良いなあ。結果が出ないからまだいつ終わるか分からないし」

結局、ブイゼルの結果待ちということで落ち着いた。

その時、チャイムが鳴ると同時にデンリユウが入ってくる。彼にとしては非常に珍しいことだ。

「明日は終業式のほかに何があるか分かるか奴いる？ そう、この学校の特別行事があるぞ」

「お待ちください。そのような趣旨の文は月間予定表にも記載されておりませんが。何かの間違いではないでしょうか？」

口うるさく反論するミュウをうざったく思いながらも、ルギアから渡されたその紙を見せつける。

「ルギア校長が今さっき、終業式の後暇なんだしどう？ と思いつき始めた企画だぞ。書かれるわけないじゃん」

その紙には、明日の終業式、オリジナル行事があることを生徒に
通達することと書かれていた。

「……サプライズじゃなくて、本当に思いつきなね。字の汚さか
らうかがえるわ」

「まあ、ルギア校長だからなあ。無理も通せるし」

ピカチュウもムウマが投げ捨てた紙を拾って読んでみる。が、行
事の内容は書かれておらず、本当に何かやるのか不審に思わせるほ
どだ。

「そんじゃ帰れ帰れ。それと、夏休みの宿題欲しい奴！ 今少しあ
るから貰ってくか？」

すぐさま秀才グループや、少しでも夏休みを満喫するべく宿題を
終わらせようとする輩が食いついた。

ムウマも食いつくかと思ったが、彼女の場合は宿題を無かったこ
とにしてしまうのでそのようなことは心配ないようだ。

「あ、ねえねえ、」 ブイゼルなら分かると思っけどさあ、8月の1
3日から15日まで暇かな？」

そろそろ部活に行こうとブイゼルが動こうとした矢先、ブースタ
ーが声をかけてくる。

「あ、例の話ね。僕は大丈夫だよ」

「俺も問題無しだ」

「私も暇ね」

それを聞くと、ブースターもホッとして胸をなでおろす。

「じゃあさ。僕の従兄のブラッキーが別荘……じゃないかな、島を貸してくれるんだけど行く？」

一瞬、ブースターの口から飛び出た島という単語に困惑していた。話の脈絡から察すると、つまりはそう言うことなのだが、あまりにも話の規模が大きすぎる。

「ダメかな……」

いくらなんでも返事が遅いので、都合が悪いのかと思ったらしい。

「あ、問題ないよ全然！ ピカチュウ君もムウマちゃんもそうだよね？」

ブイゼルに合わせて相槌を打つピカチュウとムウマ。

「ホント！？ よかったあゝ」

本当に幸福感に満ち溢れた顔をしている。

「それと、他にも結構な方が来るけど屋敷は広いから問題ないよ！
というか2つくらいあったよ」

やはり、ブラッキーの財力は侮れない。彼が持っていないものは

ないんじゃないかとピカチュウは思った。

それじゃあねとブイゼルとブースターは部活に行ってしまった。吹奏楽部から何人か来るだろう。

「私も捜査部があるから行くわ。7月号、終業式の日に出すからお見逃しなくね」

最近、捜査部改め新聞部にした方がいいのではないかと思い始めたピカチュウ。まあ、本業の方もそれなりに繁盛しているらしいのだが。

「俺も部活行ってみるか。どうせやってないだろうけど」

ピカチュウは期待しないで活動場所である教室へ急ぐ。

「……やっぱり誰もいないかあ」

そこにはピカチュウの予想を裏切らない光景があった。明かりのついていない教室に、鍵の閉まった扉。部長が役割を破棄しているから仕方のないことだ。

——どうせなら裏切って欲しかったなあ——

ピカチュウも、ブイゼルやムウマの活動を見ているうちに、真面目に部活してみたいと思うことがたまにあった。

つまり、ピカチュウは今後悔しているのだ。やりたいことではな

く、楽かどうかで部活を決めてしまったことに。

でも、ピカチュウに得意なこととはなかった。良くも悪くも平均的得意なことなければ不得意なことない。本当に平均的だったのだ。

そんな彼が唯一平均的ではない特技と言えば、やはり大食いしかないのだ。彼の父も大変な大食いで、これは遺伝によるものだとピカチュウは知っている。

「あ、つまらないこと考えちゃったな。……もういいや。帰ろう」

この学校にも転部というものは存在している。だが、それが出来るのは進級時のみ。つまり、今じゃどうすることもできなかったのだ。

結局、自分の思いと現実が重ならないことを思い知り、その場を後にするのだった。

終業式！　　夏休みの幕開け

快晴。終業式はこの快晴の中行われた。とはいっても、体育館での式なので天候はあまり関係ない。

入学式と同じように、ルギアの一言で終業式は終わってしまった。だが、その後に今回の行事『部活対抗大食い大会』が開催される。

今後の話になるが、文化祭などでも部活対抗で行うことはたくさんあり、部活内での団結力が重要になってくる。

そして、今は囲碁・将棋部の部室にいるピカチュウ。彼の胃袋ならおそらく優勝間違いなしだろう。

しかし、今回はカビゴンが部長をやっている吹奏楽部。いつも自分で料理を作り食べている調理部。優勝の為には何をしてくるか分からない捜査部。怪しげな機械を発明して優勝を狙ってきそうな科学部など、何が起ころうともおかしくないような状態である。

「なあ、ガブリアスは結構食べれる？」

「うーん、あまり食べることはない」

部活で人数に差があるため、食べた総量÷食べた人数で計算し、1人当たりの量で優勝が決まる。なので、食べる側に回るポケモンの人数を調整できるのだ。

食べるポケモンに属さなかったポケモンは、食品を自分の部活の所まで運ぶという役目があり、ここの人数配分が勝敗を分けると言

っても過言ではない。

また、運んでいる最中の妨害などはありだ。しかし、相手の部活のテーブルに置いてある物は持ち出してはいけない、というルールになっている。

「先輩も無理みたいだし、ここは俺一人で食べるかぁ。それでいい？」

「異存はない。ファイヤートルネードでのあの食べっぷりを見ているからな」

——そう言えば見られてたなぁ。もう昔のことだし忘れてた——

「それじゃあ、優勝目指して頑張ろう！」

何でこんなにも本気で行事に取り組んでいるのかというと、優勝賞品があるからに他ならない。

「さぁさぁ！ 夏休み前の大イベント、大食い大会がやってまいりました！ 実況はこの俺ルギアで、解説はファイヤートルネード店長のハウオウさんだ！」

ハウオウについては、内心またかと思っている生徒が大半だが何故ここまでこの学校に尽しているのか疑問に思っている生徒も少なからずいた。

「面倒だから説明は省くが、取りあえずたくさん食べれば勝ちだ」

「いや、それ当り前じゃないですか？」

ホウオウがルギアに突っ込む。その後も漫才らしき何かが続き、異質な空気が体育館を包み込んだ。

「ふう、それじゃあ各部活ごとに指定のテーブルに座ってー」

ピカチュウ率いる囲碁・将棋部は体育館右側の真ん中の位置にあり、皿の位置も遠くないというなかなかのポジションだった。

右隣は調理部、左隣は科学部と、周りには要注意な部活が勢ぞろい。向かいには文芸部まである。

「あ、言い忘れてたが優勝賞品はファイヤートルネードの食べ放題券5枚だ。部員全員に配布されるし、1枚につき4名まで入場できるから頑張れよなー」

そう、まさしくピカチュウの狙いはそれだ。ピカチュウにとっての5枚はお店にある食べ物を食いつくすのには十分すぎる枚数だ。毎日通えばおそらくお店はすっからかんになるだろう。

「じゃ、始め！」

開始の合図と同時に動き出したのは、サンダースとジグザグマがいる陸上部だ。常日頃から走っている成果なのだろうか。

そのままテーブルに突っ込んで……。突っ込む？

「お前ら机に体当たりすんな。たまたま机の上に料理が全部なかつ

たからよかったけど」

「は？ もう無いの？」

驚くのも無理はない。始まってからまだ10秒も経っていないはずである。

「すいませんサンダースさん。でも、我が部の先輩方がどうしても食べ放題券が欲しいとのことですので」

ミウのすぐ横には何やら大きな機械が設置されている。それはまるで某ピンク玉のような吸引力で料理を集めていた。……皿の上から零れずに並ぶのは何故なのだろう。

「このポポポ君一号を使い、勝負に勝たせていただきます」

反則気味だが、何をしてもいいのがこの学校のモットー、教師勢は誰も咎めない。

「あ、10万ボルトで壊れるんじゃないか？」

ピカチュウが思い立つよりもはやく、サンダースが電撃でポポポ君一号を破壊していた。

「私の自信作を壊すなど、何を考えているのですか！？ 大体、このポポポ君一号は先輩方の思いつきで生まれたもので、それを実現するためにどんな苦労をしたのか……」

やはり長いので割愛する。

機械も止まり、ピカチュウ達の机にも料理が運ばれてくるようになったが、人数の多い陸上部よりも皿の減るスピードが速い。むしろ運ぶ方が間にあってないくらいだ。

「おーい、皿が遅いぞ」

もちろん、このハイスピードで食べ進める魔のピカチュウをマークしない部活があるわけもなく、ほとんどの部員に目をつけられてしまっている。

「ピカチュウ君、最近また早くなったかも。食べ盛りって言う奴なのかな？」

のんきにピカチュウのことを見ているが、バイゼルの役目として、囲碁・将棋部の前に水をまいている。滑って料理を落とすことを期待しているのだ。

「おうわつと！」

早速ザンゲースが引つかかる。そのまま放物線を描き、ピカチュウの方へ皿ごと飛んで行った。

「おつと！ 出来れば飛ばさないで欲しいです」

しかし、ピカチュウはその皿をキャッチし、料理を口の中に『流しこんで』皿はそのまま積み上げる。この間ピカチュウが空中にいた3秒間だ。

「早っ！ バイゼル、帰ってきなさい！ あの化け物にはその技は効かないわ！」

「はい」

吹奏楽部も陸上部よりは早いスピードで食べている。カビゴンがたまたまいたことが大きいのだろう。

ここらで一度戦局を見直してみよう。

今のトップはぶつちぎりの囲碁・将棋部だ。ピカチュウ一人で食べる食べる。また、一人だけなので食べた送料がそのまま結果に反映される所も大きい。

続いて2位は今まで全く描写の無かった捜査部だ。彼らはポポポ君2号と呼ばれる機械をさり気なく使いながら食べ続けている。機械に料理の搬入を任せ、全員で食べていること。ポポポ君2号の機能として、料理をものすごく圧縮していることが勝因と言える。それでも勝てないピカチュウはやはり恐ろしい。

その後は調理部、吹奏楽部陸上部と並び、大きく離れて野球部水泳部などが並んでいる。つまり、トップ5で1位を争っている状態だ。

「調理部の名にかけて2位は取るぞ！」

あえて1位宣言をしないラティオス。既に1位は諦めているのだろうか。

ちなみに、調理部は運んできた料理を普通に食べるという、まさに正攻法で3位を取っている部活だ。全員の食が太いのがこの方法で3位に位置できる理由だろう。

「ん？ ブイゼル、アレ何かしら？」

リーフィアは体育館の隅にあるよく分からない物体をさす。

「どれですか？ …… ああ、あれですか。多分ピンク色の機械ですね。それが？」

「いや、多分お姉ちゃんはそう言うことを聞いたんじゃないと思うよ？」

ちなみに、リーフィアが指していたアレとは、捜査部の使っているポポポ君2号である。ランダムでスイッチのオンオフが繰り返されている為、なかなかあれが機械であることに気づけない。

「あ、お姉ちゃん！ アレが食べ物を回収してるよ！ 機械なのかな？」

「そうみたいね。破壊した方が良いわよね」

しばらく思案した後、サンダースを無理やり連れてきて破壊させた。捜査部の方からはもちろん悲鳴が聞こえてくる。

「さて、後残り時間は10分だ！ 悔いの残らないように食べるよ！ 特に最下位のパソコン部！」

今のうちに食事を楽しんでおけという意味合いなのだろうが、既に戦意喪失しているパソコン部。誰も動く気配が無い。

「ついでにトップ3の発表だ！ 1位が囲碁・将棋部、2位が料理

部、3位が捜査部だ！」

「料理部って呼ぶなー！」

大会中だろうが気にせずに抗議するラティオス、もういつそのこと変えてあげた方が良くかも知れない。

「機械は止まったけど、ここからはお得意の妨害で頑張るわ！ ゲンちゃん指示お願い！」

「ヤミラミは運搬、ミカルゲは妨害、パソコンを使っても構わない。ムウマは怪しい光で混乱させる。まずは調理部の連中から狙う」

久しぶりとなるゲンガーの覚醒モード。今回ばかりは本気で勝ちに行きたいようだ。

開始から50分経過しているというのにピカチュウの食べる勢いは止まらない。既に2位とは2倍以上の差が付いていた。もう食べなくても優勝出来るレベルだ。

それでも彼は食べ続ける。そこに料理がある限り！

「格好いいこと言ってるぞ！ それって俺がただの食いしん坊だっけって言うようなもんじゃん！」

「捜査部が一斉攻撃を仕掛けてきたが、俺たちは負けないぞ。チルトリス、壁になるんだ！」

「アイアイサー、コットンガード！」

防御力が増加した所で特に状態異常に対しては意味はないはずなのだが……。

「よし守りは完璧だな。それじゃあ状態異常対策だ！ シャワーズはメロメロ！」

ラティオスからは電磁波、シャワーズからはメロメロが飛んでくる。これで状態異常に対しても無敵となったチルタリス。

「そんなもん俺には通用しないっての。まずはパソコンから何でも直しを取り出して……」

この世界ではパソコンに道具を預けることが可能になっている。引き出すときもよく分からない原理で目の前にいきなり出現する。詳しいことはミュウが今後解説してくれるだろう。

結局、ミカルゲ&ムウマにコテンパンにやられ、調理部も再起不能レベルまで追い詰めていた。

「ストップ！ 試合終了！」

ルギアが試合終了の合図を出す。結果は目に見えているが一応発表するらしい。

「結果は……！ 3位料理部！ 2位捜査部！ 1位囲碁・将棋部だ！」

ちなみに、ピカチュウの食べた総量は測定不能だったらしい。恐るべし胃袋である。

そんなこんなで、ピカチュウ達の夏休み生活が幕を開けたのであった……。

終業式！ ～夏休みの幕開け～（後書き）

報告

『TIPS3：セレビィ先生の悩み』は、この頃あったお話です。

この章にかかわってくるお話ですので、目を通しておくことをお勧めします。

後書き

次回からは夏休み！

ムウマ「捜査部新聞7月号も無事出せたわ。気になるなら裏ポケ学の方においてあるから、見に行くといいかも」

夏休み1日目だって部活動！（前書き）

はい、青春の塊です。

パロディも仕込んであります。元ネタはテスト勉強の時と同じなので、そっちが分かっている方にはすぐ分かるかもしれません。

夏休み1日目だって部活動！

地面に照りつける日差しは7月のものとは思えないほど暑く、ただでさえ暑いグラウンドをさらに暑くしていく。

「まだまだ〜！ あと5周！」

そんな中、地上を駆け巡るポケモンの姿がいくつかみられる。大会前の陸上部であろう。

ウィンディやサンダースをはじめとする陸上部。そのレベルは高く、短距離では地方大会、長距離では全国大会に出場できるほどのものである。

全ての人影が陸上部か、と思った時、何やら陸上部では見かけないような姿をしたポケモンも混じっている。

おそらく、陸上部にグラウンドを使われているので、練習が出来ない野球部だろう。校舎の外側を走っている。

「陸上部とかは大変そうだねえ」

その様子をトランペットを抱えながら見下ろしていたポケモンがいた。そう、ブースターだ。

「そうだね。でもさ、練習しないの？」

今は休憩中。合奏の合間の休憩時間だったのだ。だから、ブースターとブイゼルはここで外の様子を見ていたのである。

「大丈夫大丈夫！ 曲はそんなに難しくないからね♪」

ブースターの難しくないという言葉ほど信じられないものはない。例えるなら、成績のいいポケモンのテストの点数が悪かったというセリフ並に信用できない。いや、ここの学校では信用できる場合もあるが……。

「とか言つてさ、かなり難しいんでしょ？」

ブースターは笑つてごまかすが、ブイゼルは難しいんだなと感じた。

「あ、それよりさー、もう合奏が再開するよ！ 急がなきゃ、1年の代表だしね♪」

今年がコンクール初出場となるこの学校。まずはB部門の方に参加することにした。

B部門とは、総勢30名で行われるコンクールであり、曲は自由曲のみ。課題曲はないといった仕様だ。

しかし、この人数のせいで出場できる1年生は少なく、12名中5名しか出ることが出来ない。

その中に選ばれたのがブイゼルとブースターなのだ。

「そうだね。それじゃあ席に着こうか」

とはいっても、ブースターは後ろの方、ブイゼルは前の方だ。し

かし、ブイゼルの隣にはリーフィアもいる。

「ブースターとなんか色々話してたみたいけど？ 何話してたの？」

「普通の話ですよ。コンクールのことや、外の陸上部のこととか」

リーフィアは何か言った様子だったが、トロンボーンの音にかき消されてあまり聞こえなかった。でも、リーフィアも楽器を吹き始めた所を見ると、聞き流して問題ないようだった。

「ふ〜ん♪（合奏再開しますよ）。取りあえずさっきの続きからもう一回！」

鳴り響く旋律、優雅なメロディ。今日も音楽室から音楽は絶えない。

「音楽室、結構頑張ってますわねー」

所変わってハンドピンポン部。現在は体育館にて卓球の練習をしている。

「こっちも練習頑張らないとね！」

そう言いつつ、フライゴンはオクタンのラケットに向けて白い球体を投げる。

それをしっかりラケットで受け止め、相手コートの左端にはじき

返す。

「やっぱすごいや。これも几帳面な性格のおかげなのかな？」

「そこは努力を誉めてほしいですわー」

既に上下関係はなく、和氣藹藹^{あいあい}としてこの2人。オクタンも敬語を使わせることは諦めたようである。

「じゃあ、もう少しすると1時だから、それまで練習続けようか？」

「そうですね。そろそろ1年生が疲れてしまう頃合いですしね」

1年生のことをよく考えて行動する。それがハンドピンポン部のモットーだった。

「フライゴン先輩。今日の練習はいつまでですか？」

「ん〜？ 今日1時に切り上げるよ。みんなもお腹空いたでしょ？ オクタン先輩がおごってくれるって」

1年生——とはいっても2人しかいない——はそれを聞いてものすごく喜んでいる。よほどお腹が空いていたのであるう。

「ちょっとフライゴン！ そんなこと聞いてませんわよー！」

そこに、他の台で練習していた2年生も寄ってくる。3年生はオクタン以外休みなので、これで今日のハンドピンポン部は全員だ。

「だいじょーぶ。学校から差し入れが届いてるから」

フライゴンは体育館の隅に置いてあった段ボール箱を持ってくる。

「凄い量ですわね！。しかも『目指せ全国！』とか書かれていますけど、大丈夫なんですか？」

「いいんじゃないかな？ 職員室の前に置いてあったし」

後日、陸上部から多大な請求が来ることをオクタン達はまだ知らない……。そして、それを仕組んだポケモンがいることも……。

「よし、作戦成功！ 面白いことになりそう」

捜査部一行も部活に来ている。とはいっても、家ではエアコンが使えないので涼みに来ているといった感覚だ。

エアコンは職員室から『頂いたもの』で、他の部屋にはついていない。

それでも、朝からずっと同じ部屋というのは飽きるもの。ゲームがトランプしかなかったらなおさらだ。

という訳で、現在はほかの部活に悪戯とは呼べないレベルの悪戯を施している最中だったのだ。

ムウマ以外の3人も悪戯を施している最中であろう。

「さーで、そろそろ暑くなってきたから戻りましょうか。どうせ請求は部活が終わった後だと思っし」

最近、1年の間でムウマにあだ名がついた。その名も『鬼畜少女』だ。

これに対し、ムウマはまんざらでもなさそうな感じだったという。

「あら？ ゲンちゃん。どうしたの？」

向こう側の窓辺りにゲンガー見える。もちろん、外側から浮いて中を見ているのだ。

それに近づいて声をかける。そうすると、ゲンガーは指さしするような仕草で窓の中を指さした。

「今面白いことになってるから、早く早く！」

ゲンガーが急かすぐらいなのだから、なかなか面白いものを期待していたが、中にあったのは『いつもの風景』だった。そう、いつもの……。

「だから、次の部長はラティアスちゃんで決まりなの」

「ここはやはり2年生に部長の座を渡すべきだ」

仲の悪い部活だつてある。文芸部はその筆頭だった。

今現在の言い争いは 그레이シア とフリーデインのものだが、次の部長について話し合っていたらしい。

「あんだ、途中から入ってきたくせにどこまで生意気なの？ 文も2年生やラティアスちゃんの方が上手いし。あんだのここにおいて

の存在価値って何？」

言い分はこうだ。 그레이シアは文芸部の部長ということもあり、次の部長を決める権利はある。だから、新参のあんたとやかく言われる筋合いはない、と。

「存在価値などの話はどうでもいいんです。ただ、基本的に部長というものは3年生がやるものだから、こういつて口を出してるんだが」

彼の言い分はこうだ。1年生が部長になるのは『自分の』感性的にあまり受け付けない。だから基本に則り、2年生を部長にしようと言っているのだ。

「科学部のミュウだって部長やってるじゃない。基本に則る意味が分からないわ。そもそも、そう言うのに囚われてたら良い文章なんて書けないわよ」

「あ、あの……」

ラティアスがこの言い争いを仲裁しようとしているが、どちらも聞く耳を持たない。

「おや？ 私の名前が呼ばれたような気がしたのですが、誰か探していましたか？」

「あ、ミュウ君。あの2人止められない？」

突如現れたミュウ。科学部も何やら怪しげな発明で部活をやっているのに、よくレポートで抜け出すものだ。というか、何故この

距離で気付いたのが一番の疑問である。

「この言い争いは……。おそらく発明品の1つの効果だと思われる。感情を高ぶらせ、攻撃的にする試薬、『H-30』ですね。どのような形でもいいです。何かを外部から摂取していませんか？」

要するに、何か飲んだり食べてりしていませんかということだ。それよりも、何故そんな危険な試薬を作ったかは分からない。

「あ、さっきゲンガーさんから差し入れて缶ジュースが届いたけど、それかな？」

おそらくそれですねと呟きながら、2人の近くにある缶ジュースの飲み口に怪しげな液体を垂らす。

すると、飲み口が真っ赤に染まり、オレンジジュースではなくトマトジュースのようになってしまった。

「検出できました。それでは、こちらにある治療薬『P-132』をどうにかして飲まして下さい。いざとなれば注射による直接的な摂取でも問題はないです」

「えー、ミュウ君がやってよ。私こういうのは上手くできないです」

「私では近づくこともできません。何故なら、この薬には疑心暗鬼に取りつかせ、信用できるポケモンが激減してしまうからです。私にはお2人ともに面識はありません」

ですので、と続けようとしたミュウを遮り、P-132の入った

コップを受け取る。

「じゃあしょうがないね。私がやるよ」

すつ、と息を吸い、サイコキネシスで2人の動きを止める。瞬き一つできないくらいまでに動きを止められていた。おそらくラティアスの本気だろう。

「じゃあ、口を開けてください」

言うよりも早く、先に口を開ける、否、開けさせられる。

そして、その間に薬を飲ませ、サイコキネシスによる硬直を解く。

「これでオツケーですよね？」

ミュウはその光景を不思議そうな眼で見つめていた。

——体育祭の時にも思いましたが、彼女の技の威力はケタ違いすぎます。おそらく体内の器官に秘密があるのでしょうけど、法律的にも、道徳的にも解剖はできません。となると観察するか、本人から聞くかしかありませんね。折を見て話を振ってみましょう——

「そうですよ。ありがとうございます」

「それと、1つ聞いていいですか？」

ラティアスが質問を投げかける。はつきり言ってこんなことは初めてだ。

「どうしてここで名前が呼ばれたと分かったんですか？」

ミュウにとっては当たり前なことでも、ラティアスからみれば不可解なことになる。つまりはそう言うことだ。

「そのことですか。今、発明品である補聴器の最大出力を試していたところだったんです。結果、この校内での喋りは全て聞こえます。出力は変えられるので、成功と言って問題なさそうです」

「そうなんだ。凄いね」

淡泊なやり取りだが、二人とも頭が良いということもあり、知的な会話に思える。実際に知的な内容なのだが。

そのやり取りを後ろで見ていたのは捜査部。仕掛け人はどうやらゲンガーのようだった。

「面白かった？」

「ええ、貴重な薬品を見せてもらったわ。今後使つかも」

学校中のポケモンが攻撃的になって、ミュウが治療しに回るのはまた別のお話。

夏休み1日目だって部活動！（後書き）

そろそろ夏祭り！ というわけで、次回のお話は夏祭りです。季節はずれなのは御愛嬌。

夏バトンで出てきた夏祭りと同じ奴です。ということは、主演はピカチュウではなく……！

次回『夏祭り』

おそらく一番短いサブタイトルです。

夏祭り（前書き）

今回はリア充のお話で、ニヤニヤ出来ます。是非お楽しみください！

夏祭り

「遅いわね」

ポケモン第2中学校はこのセンター地区の2丁目にある。今回行われる夏祭りはセンター第2公園という所だ。俗にセンター公園と略されている。

その祭囃子の聞こえる入り口前で誰かを待っているポケモンがいた。

腹黒い、更に最近は毒舌にもなってきた文芸部の部長、 그레이シアである。

そもそも、どうしてこうなったかというところ、今日の部活でのあるポケモンの発言が原因だった。

「やつほーラティマス」遊びに来たよ」

先程のフリーディンとの言い争いも終わり、もう帰ろうかという時にそいつはやってきた。

「シャワーズ？ 何でいるの？」

그레이シアが毒舌を吐いてやろうと思った矢先、ラティマスの方が早く声をかける。

「あはは、今日って夏祭りじゃん。それでさ、一緒に行こうかなと思って誘いに来た」

ラティアスは今日がお祭りだということを忘れていたようで、言われて思い出すかのような感じのリアクションを取っていた。

「いいよ」 グレイシアさんとお兄ちゃんも誘うの？ 誘うなら今声かけるけど」

シャワーズはとんでもないと本人の前で言い放ち、ラティアスの耳元で小さく何かをささやく。

「それじゃあ、今日はチルタリスさんと一緒にお祭りに行って、明日は4人で行くんだね」

シャワーズはそれに頷き、何故かグレイシアの方を向いてニヤニヤしている。

「何気持ち悪い顔で笑ってんのよ。それより、イーブイはどうすんの？ こっちじゃ面倒見られないわよ」

「イーブイは同級生と行くって。だから、今日お姉ちゃんは1人孤独なんだね」

誰がどう見ても挑発にしか見えない。グレイシアを挑発して何かいいことでもあるのだろうか。

「……うっさいわね。私だってランクルスと行くわよ」

「あ、ランクルスさんなら今日は練習で少し学校に残るから、お祭

りにはいけないって言ってましたよ」

普通ならそんなことは聞かない。だから嘘だと分かるはずなのだが、ラティアスが話すとどうしても信用してしまう。

「そう？　となると……、困ったわね」

グレイシアは交流相手が少ない。主に趣味が合わないのが理由だ。陰では色々その他の理由が探られているらしいが、おそらくないだろう。多分。

「あ、そう言えばお兄ちゃんも一緒に行く人がいないって言ってましたよ」

「それじゃあラティオスと……。ラティオス！？」

ラティオスと一緒に行くということは、二人で行くことと同義だ。それに気付いたのか、柄にもなく頬を赤く染めあたふたしている。

「はい、お兄ちゃんですけど、何か問題ありました？　無ければ伝えるので、今日の午後6時に公園前で待っていてくださいね」

グレイシアにとって、これほどラティアスが悪魔に見えた日はなかった……。

「え、え、ラティオスと2人？　ほ、本当にどうしてこうなったのよー！？」

今では大分落ち着きを取り戻しているが、先程までものすごくあ
たふたしていた。ということをお願い出し、体が熱くなるのを感じる
グレイシア。

——大丈夫よ。小学の頃は一緒に遊んだりしてたじゃない。それ
と同じ、同じ——

自分に言い聞かせるために、心の中で3回ほど言葉を唱える。

「お、もういたのか？ グレイシアのことだからもう少し遅れてく
ると思つてただけだ」

「まあいいじゃない。それより行きましょ」

ああそうだなと相槌をうちながら、祭囃子の聞こえる公園に消え
ていく。そして、その後ろを追いかける人影が1、2、3人。

「お姉ちゃん、素直になればいいのになあ」

勘のいい読者様ならお気づきであろう。グレイシアの気持ちに。

そして、周りはそれに完全に勘付いていること、陰ながらに応援
していることにも。

3人もグレイシア達の後を追ひ、祭囃子の中へ飛び込むのだった。

三人称↓グレイシアへ

中に入ると足音はパツと消え去り、子供の騒ぐ声など、お祭りらしさが満開だ。

「凄いわね。この中にイーブイもいるのかしら」

「多分いるんじゃないか？ あいつは結構無邪気だし」

ラティオスもイーブイのことは理解している。でも、それは演じている面。実態を見たら多分驚く。

そんなことを考えてると、小さな集団の中の茶色い奴と目が合う。しかも、こっちに駆け寄ってきやがった。

「あ、お姉ちゃん。そっちのラティ兄ちゃんと付き合ってるの？」

顔から溶岩レベルのものが噴き出してるぐらい熱く、赤くなっていく。

ラティオスの方を見ると、視線をそらしながら、まあ、そのなんだ。とかいつもの言葉が出ないときに並べる言葉を発している。

「あんたには関係ないでしょ。早く何処が行きなさいよ」

「へえーそうなんだあ」

……勘付かれた。どう考えても勘付かれた。取りあえず冷凍ビームをイーブイに向けて放つ。

「これで一件落着ね」

「いやいや、全然落着いてない。で、どうすんの？」

「友達のヒトカゲ君がどうにかしてくれるはずよ。軽めの冷凍ビームだったから」

正確に言えば、顔が熱過ぎて冷気が集められなかったことに原因があるのだが。

まあ、早速ヒトカゲ君が火炎放射を当ててるから問題ないだろう。

「それよりも、何でこんなことしてるのに騒ぎにならないんだろうな」

確かに気になる。普通、今は犯罪だ。こんなポケモンだらけのなか、誰も気づかないなんてありえないし、何でだろう。

その後も、射的をやったり、綿飴を買ったり、夏祭りらしいことをして2人ではしゃいだ。

大分日も落ちて、そろそろ最後のメインイベントである花火が始まるころだ。

ふとかき氷屋が目についた。なんだか騒がしいと思ったら、屋台の後ろで誰かがかき氷をものすごい勢いで平らげてる。

そう言えば、あの顔には覚えがある。確か先日の大食い大会で1人で優勝したポケモンだ。ピカチュウとかいう名前だったっけ。ラティアスと同じクラスだった気がする。

「ねえラティオス。かき氷食べない？」

「俺は苦手なんだが……」

そうだ。そう言えば、ラティオスは子供の頃から冷たいのがダメだったんだっけ。すっかり忘れてた。

「まあいい。たまには食べてみるか」

ラティオスの笑顔がまぶしい。その笑顔のせいで、さっきまで引っこんでいたラティオスと2人きりという感情がまた出てくる。うう、恥ずかしい……。

「わ、私を買ってくる。ラティオスは後ろのピカチュウでも見てたら？」

ピカチュウとは前、ブイズの屋敷で色々やった仲らしく、そうかと言ってピカチュウの方へ行ってくれた。

今の間に頭を冷やせ。ラティオスと2人きりなだけじゃないか。つき合ってるなんて誰からみても分からないし、最近会ってないからラティオスも忘れてるかもしれないし。

今思い返せばかなりムチャクチャだが、これでも効果があるのだから凄い。

よし、落ち着いた。今日はメロンにしよう。ラティオスはブルーハワイでいいはず。

「いらっしゃいますっ」

「メロンとブルーハワイを1つずつお願い」

後ろでピカチュウも動き始める。2つだから2人でやるのか、最初から受付と作る側に分かれた方が早いと思うけど。

「ぶつぶつ……。あ、お待たせしました〜！」

何かボソボソ言っていたが、特に気にもならないのでお礼だけいってかき氷を受け取る。

——私はリーフィアだけど説明するわ！ 手の使えない四足歩行のポケモン用に、首からぶら下げて持ち運びする奴があるの。ちゃんとふたがしてあるのよ。だから、このままベンチかどこか行って座って食べるのよ——

解説御苦労さま。でも、邪魔だからもう少し簡潔見まとめてくれるとありがたいわ。

「お、ちゃんとブルーハワイにしてくれたのか。昔のことなのによく覚えてるな」

あ、解説の奴と話してたらいきなりラティオスがやってくるし。もうどうなってるの？ 展開が速すぎよ。

私の首にかけてあるかき氷に手を伸ばして、とる。たったそれだけの動作で体が蒸し上がるくらい温まる。

「じゃ、どこかベンチで食べるか」

「は、は花火が見える所で食べましょうか」

花火はこのお祭りのメインイベント、見逃す理由がない。ということ、ラティオスも難なく了承し、ベンチで1番見やすい所を取ることが出来た。

「あのさあ 그레이シア」

「ふえ？」

いきなりラティオスが呼びかけてくる。氷が口に入ってたから変な返事になってしまった。

「花火が終わったら、ちょっと話がある」

……どう考えてもあの辺りしか思いつかない。あのことだったら素直に嬉しい。

1つ、大きな花火が打ち上がる。青色と群青色の花火で、それは私達を表しているかのような花火だった。

その後も、色々な形、色々な色の花火が打ち上がっていく。

久しぶりに小説のネタになるとか考えずに楽しめた。これも隣にラティオスがいたから？

「綺麗だなあ。 그레이シアはどう思う？」

「綺麗だと思うわよ。それが普通でしょ」

そっけない言い方になったが、気にする余地もなく花火を楽しん

でいた。

最後に、大きな赤色の花火が空に咲く。今日はこれでおしまいだ。

「で、話があるんでしょ？」

気になって私の方から聞いてみる。なんだろう……。

「あ、あのさ、2次関数について教えてくれないか？」

私のささやかな希望が一瞬にて打ち砕かれた。何？ 何でお祭りにまで来て2次関数を聞く訳？

「期待させんじゃないわよ！ 吹雪！」

「なんでえー！！！」

私だってたまには夢見たかったのよ。次からは期待しないけど。

夏祭り（後書き）

〵後日談

何故、イーブイを凍らせたときに人が寄らなかったのか。

「ただいまドラマの撮影中です！」

「カメラに映りたい方は近くを歩いてください！」

この世界では、歩行者などの出演は自由にできる。つまり、イーブイを凍らせた所をドラマに見せかけたわけだ。ラティアスとシャワーズが。

「あ、僕を忘れないで！」

ベンチに座り、 그레이シア達が来るまで場所取りをしていたのはチルタリスであった……。

ブイゼルって怖がりなの？

夏祭りも終わり、一気に夏という雰囲気近づいたピカチュウ達。朝だというのにものすごい暑さだ。

夏祭りが終わってから夏になるというのもいささかおかしい話だが、ピカチュウにとってはこれが普通だ。

そして、8月の上旬にもう一度夏祭りがある。ブイゼルなどの、俗に言う秀才グループはその頃までに宿題を終わらせるのが普通だ。しかし、今年は違ったようだ。

「今年は無理！」

ブイゼルは宿題を整理中だったのだが、余りの宿題の量に今年はその頃までに終わらないと宣言したのだ。

それもそのはず。理科の宿題が無くなったからまだましなもの、適当教師たちのせいで遅れている授業の分、宿題が増えているのだ。それに加え、コンクール練習で部活が忙しい今、勉強に割ける時間も少ない。

「ブイゼル〜！ ピカチュウ君から電話が来てるわよ」

「ん……。なんの用かな？ 今行く！」

綺麗好きのブイゼル母——進化していないのでブイゼルのままだが階下から呼びかける。

階段を降りていくブイゼル。やはり塵一つ落ちていないその階段は、関心を通り越し気味が悪い。

「もしもしピカチュウ君？ 電話代わったけど」

「うん、それじゃあ」

場面は突然変わり、ピカチュウ宅。ブイゼルが代わった瞬間に別の挨拶を述べている。

と思いきや、ピカチュウの手には携帯電話と家の電話が。

「ねえねえピカチュウ君。用が無いなら電話しなくてももらえるかな？ こっちは忙しいんだけど」

ブイゼルは少し怒った口調だ。今は朝で、これから部活があるというのに、用もない電話を掛けられたら怒るだろう。

「いや、そうじゃなくて……。今携帯使ってムウマにも電話してたから」

「ムウマちゃんにも？ 遊びの予定？」

ブイゼルもある程度察しはついてきたようだ。やはり付き合いが長いだけのことはある。

「そう。今日の夜に肝試しでもやろうかなーっと」

「ええ！ 肝試し！？ ナイトウォーク！？」

ブイゼルのビックリする声に、ピカチュウはニヤツと笑う。

そう、ブイゼルはこういう怖いものが苦手だ。だからこそ肝試しに連れて行って楽しいのだが。

「そうそう。だからさ、ブイゼルもどう？」

ちなみに、ブイゼルが電話越しにオロオロしている姿がピカチュウの頭で再生されている。そして、それはあながち間違っていない。

「いや！ 今日から学校に泊まり込みだから！ 何ならブースターに確認取ってもいいよ！」

「そうなの？ つまんないけどそれじゃあ仕方がないか」

ブイゼルの安堵する表情が手に取るように分かる。

「それじゃあ、僕急いでるから！ また今度ね」

ブイゼルは乱暴に受話器を置いたらしい。ガチャと大きな音を立てる。

それを聞くと、ピカチュウは携帯を取り出し、またムウマに電話をかける。

「ムウマか？ 今日の肝試し、やっぱり学校でやるっ」

「だから言ったでしょ？ 今夜ブイゼルは学校にいるって」

この2人、最初からブイゼルを脅かすことしか考えてなかったよ
うだ。

「それじゃあ、分担して他の奴にも電話しようか」

今夜の学校は恐ろしいことになりそうだ……。

今は午後5時。真夏の今は太陽がまだまだ高い位置に位置している。

ピカチュウとムウマは捜査部の部室にいた。ピカチュウ達だけじゃない。ゲンガー達捜査部もいる。

捜査部の部室は、普通の教室とは全く違う。まず、窓は扉との向かいに1枚しか設置されていない。そのすぐ近くにゲンガー、もとい部長用の席があり、真ん中に置いてあるテーブルを囲むように椅子が設置されている。

これだけ聞くとこの部屋はせまいように感じるが、周りには夏休みに入ってからゲンガーが持ち込んだゲームで溢れかえっている。普通の教室の大きさがあったのに、今では半分ほどの大きさだ。

「ピカチュウ、あとのくらい呼んだの？」

「電話でサンダースとチルタリスだろ。サンダースはジグザグマ、チルタリスはシャワーズ呼ぶって言ってたな。後デシリユウとスイクン先生に声かけといた」

ちなみに、この肝試し大会は捜査部の活動の一環ということになっており、学校公認である。だから先生とかも参加しているのだ。

「スイクン先生……。不幸を持ってこなければいいけれどね」

確かにスイクン先生が不幸に見舞われなかった試しはない。ムウマが心配するのも分かる気がする。

「来たよ。で、僕は何すればいいの？」

そんなとき、チルタリスがシャワーズを連れて入ってくる。料理……もとい調理部も終わったようだ。

「来たわね。サンダース達が来ないからもう少し待ってて。そう言えばラティオスはいないのね。てつきり勝手に来ると思ってたわ」

「ラティオス？ お姉ちゃんの吹雪の後遺症がまだ残っている。もう3日目なのにな」

何があったか聞かない方が良くと瞬時に理解したピカチュウは、光の速さで話題を変えることにした。

「そう言えば、チルタリスに会うのも久しぶりだな。この前の大食い大会でも空気だったし」

空気というワードは、既にチルタリスの前ではNGワードになっている。

「どうせ僕は空気ですよーだ。大食いという取柄もピカチュウが持

ってちゃうし」

道に捨ててあるアルミ缶を避けたら、ガムを踏んでしまったかのような感じた。

「おーい、入るぞ。って、何でチルタリスがふてくされてんだよ」

いいタイミングで入ってきてくれたサンダース。だが、何故かジグザグマの姿が見当たらない。

「丁度いい所に。それと、ジグザグマは？」

「ジグザグマは大会間近だからもうちょい練習するってさ。あいつ、何気なく将来有望な選手だぜ？」

何が無気なくなのかは分からないが、ジグザグマは意外にも将来有望のようだった。ジグザグにしか走れないと嘆いていた頃が嘘のようである。

「へえ。それじゃあ来ないのね。私は誰も呼んでないから、これで全員ね」

辺りを見回しながら、ムウマはおもむろに飛び上がり、部屋から出ていく。ジュースを買いに行くついでに先生を呼びに行くつもりらしい。

「それじゃあ、どうやってブイゼル君を呼び出すか考えよう？」

今日の集まったポケモンの中で最年長のゲンガーが切り出した。

それに反応してみんなが一斉にゲンガーを見る。と思いきや、みんなの視線は後ろの窓に集中している。

「え？　なんか変なこと言った？」

「そうじゃないですけど……。何かゲンガーさんの後ろにいる気がして」

周りを代表し、ピカチュウが答える。確かに、さっきから後ろの方に緑色の影が窓から顔を出している。

「あれって、いや、まさかね……」

ピカチュウに、一人だけ心当たりがあるポケモンがいた。緑色の頭をして、空気を読めないメタ発言ばかりするポケモンを。

どうやら本人は顔が出ている気付いていないらしく、必死に聞耳を立てている。窓を閉めたままでは聞こえない気もするが。

「リーフィアだよな？　どう見ても」

たまたま隣にいたサンダースもピカチュウと同じ考えを持っていたようだ。

「サンダース、なんかリーフィアに悟られるようなことしたの？」

何で俺が？　みたいな顔をしているが、リーフィアと一番接点があるのは夏休みの今はサンダースだ。

とにかく、リーフィアの登場により話したくてもなにも話せない

状況になっている。こんな状況を打破できるのは、ピカチュウの知る限りじゃ同じくらい空気が読めないストーカーをしている奴しか思いつかない。

「シャドーボール！」

そして、何故か空気を讀んでムウマが出てくる。扉を開けた瞬間、シャドーボールを放ち、窓ごとリーフィアにガツンとお見舞いしてやった。リーフィアは、某3人組のように星になる所まで飛んでいく。

「綺麗に飛んだわね」

「あのなあムウマ。ここ二階だぞ？ 落ちたら……。あれ？」

ピカチュウは何か違和感を感じ取ったが、今は肝試しの方が大事なので無視することにした。

「うん、邪魔者もいなくなったし、話し合いを始めよう」

午後9時。既に夜が更けている時間だ。今は月明かりと、体育館から漏れる光だけが暗闇を照らしている。

「さてさて、ピカチュウ達は上手くやってくれるでしょうねえ？」

体育館に近い4棟の校舎に隠れているムウマ。ここからブイゼルが出てくるのを見張っている。

「あ、出てきたわね。フェクト！ 電気落として！ サンダーズとデンリユウは体育館の扉を閉めて！」

無線通信機——科学部が開発したものだ——を使用し、ムウマが司令塔になってブイゼルを強制的に肝試しに参加させたようだ。

「驚いてるわね。それじゃあ次のステップよ。アル、ゲンちゃん、よろしくね」

ヤミラミの役目は怖い音を出して恐怖感を演出すること。ゲンガ―は最後の仕掛けだ。

時間がたつにつれ、響く叫び声の音量と回数が増していく。ピカチュウやチルタリスもどんどん悪乗りしているらしい。

それでは、その中の一部をご覧いただく。

「もう、さつきから怖い音が鳴りやまないし……。どうして僕が音楽室に……」

ぶつくさ言いながら歩いているブイゼルの目の前には、浮遊している謎の光と、歩いてくる同じブイゼルの模型。

「いいやああ！」

ブイゼルはそれを見たたん一目散に走り去る。もちろん今まで進んできた方向にだ。これのせいでブイゼルは、かなりの時間廊下をさまよっている。

謎の光は、ピカチュウが電流を流し発光させている豆電球を上か

らつりさげたもので、ブイゼル型の模型は、チルタリスが遠隔操作している。

これを考えて作製したのはフェクトだ。やはり捜査部は侮れない。

「そうか、校庭を抜ければいいんだ」

ブイゼルは、既に音楽室に抜けるためのルートは試しつくした。残るは校庭を抜けて通るルートだけだ。

「夜の学校ってこんなに怖かったかな」

ムウマ達がいなければ至って平凡な夜だっただろう。

そんなことを考えながら進むブイゼルだが、突然、体中に冷たいものが当たる。

「なんだろ。スプリンクラーかな」

こんな時間に撒かれているのも不思議だとは思いながら、幸い誰もいなさそうだったのでここを通ることにした。

校庭を抜けた先では何にも出会わず、無事音楽室へ辿り着いた。

「えっと、クラリネットクラリネットと。あ、ケースは向こうなんだっけ」

ブイゼルは自分のクラリネットを取りに来たようだ。楽器を持つて外に出る。そして、あることを思い出したのだ。

「校庭にはスプリンクラーが撒かれているんだ」

そう、楽器をぬらすなんてこと出来やしない。つまり、外ではなく校舎内の廊下を通る必要があるのだ。

ブイゼルの絶叫が続く事2時間。それにて絶叫は収まったという。

ブイゼルって怖がりなの？（後書き）

『TIPS9：コンクールに向けて』がこの話と同時刻で進んでいきます。ブイゼル視点でこのお話を描いた物語です。

次回予告

万全に練習したブイゼー一同！ 金賞目指して頑張ります！

その影では、ジグザグマの初大会も進んでいるのだった。

次回『コンクールと走り幅跳び』

更に次回の次回予告

リクエスト頂きましたお話が早くも話に！ ピカチュウとブイゼル、この二人に何か異変が！？

コンクールと走り幅跳び（前書き）

視点移動が非常に多いです。

コンクール↓走り幅跳び↓コンクール↓走り幅跳び↓ブイゼルの一人称です。

それではお楽しみください！

コンクールと走り幅跳び

センター地区大ホール。久々にこの名前が出たであろう。ブイゼル達も、訪れるのは大体2カ月ぶりだ。

周りはお洒落なストリートになっており、その道はこの大ホールへと一直線に伸びている。その両端には水が流れており、こんな時期でも暑く感じさせない工夫が凝らされていた。

その中の一つの道、ブイゼル達吹奏楽部が進む集団がある。

「なんだか実感無いなあ」

歩きながらブイスターが呟いた言葉に嘘偽りが無いことは、周りを見ればすぐに分かる。各々（おのおの）が周りのポケモンと話しながら歩き続ける姿は、何かの観光ツアー客のようだった。

「そうだね。まあ、1年生はほとんど出ないから。緊張しないのも分かる気がするよ」

今回のコンクールに出場する1年生はたったの5名だ。緊張しないのも無理はない。聴いているだけでいいのだから。

ただ、演奏する側でもあるブイゼルとブイスターがここまで緊張していないとはどういうことなのか。

立ち止まり、ブイゼルは突然ブイスターの方に向かい合う。当然、ブイスターは何？ といった顔つきになる。

「それより、ブースターは楽しみにしてる？ 他の学校の吹奏楽部の演奏なんて、僕聞いたことないよ」

「もちろん楽しみ♪ ここで金賞取れば地方大会だしね！」

今回のコンクールは地区大会だ。金賞を取れば次の大会に進むことが出来る。この次はブースターの言う通り、この地方、センター地方の大会である。その次は全国大会で、ここで一番上手な吹奏楽部が優勝するのだ。

「だね！ そのためにも演奏頑張ろう」

風が吹き、二人が首に巻いている赤いスカーフがなびく。正装の時はスカーフをつけるのが当たり前だ。普段の生活ではあまりつけるポケモンはいない。何でもデザイン性に少し難があるらしい。

ただ、ブースターの毛の色とは見事にマッチングしていて、体の一部ではないかと思わせるほどだ。

「うん♪ でも、みんな先行っちゃったよ？」

ブイゼル達は既に集団とはかなり離れており、向こう側ではリーフィアが「早く来なさい！」と叫んでいる。

水の流れる音、ブイゼル達の足音、遠くからは楽器の鳴り響く音が聞こえてくる。どこかの学校の演奏が始まっているようだ。

コンクール会場まではもうすぐのようだった。

SIDEチェンジ（コンクール↓走り幅跳び）

「大丈夫だって！ お前ならやれるさ」

所変わりセンタースタジアムの一角。今日は吹奏楽部の演奏と同時に、走り幅跳びの大会もあったのだ。

スタジアムは至って普通なつくりで、変わった所は見受けられない。トラックがあつて、周りに観客席があつて、端には中継モニターも設けてある。

2人がいるのは観客席の真下。語弊の無いように言えば選手控室である。

「サンダースは長距離の選手の為、今日は出場しないが、今度大会があるらしい。今日出場するのはサンダースの隣で震えているジグザグマだ。」

先程からしきりに声をかけるサンダースであつたが、その努力の甲斐も見られず、ジグザグマはただ震えているだけだった。

「いやいやいや、大丈夫じゃないって！」

いつもの口癖——ほとんど出ていないので覚えていないかもしれないが——もなく、あまり親しくないポケモンから見れば君誰？ と言いたくなるような状態だ。それほどまでにいつもと変わってる。

確かに、初大会がこの地方で一番大きなスタジアムというのは、緊張に拍車をかけているような気がする。

「お知らせします。走り幅跳びに出場する選手の皆さまは、指定の場所にお集まりください」

ジグザグマの緊張とは裏腹に、アナウンスは極めて冷静な口調で告げる。まるで死の宣告でも受けたかのように、ジグザグマは動かないでいた。

「ほら！ 呼ばれたぞ！ おーい、ジグザグマ？」

半ばサンダースに押されるような形で控室から出て行ったジグザグマ。もちろんその背中から闘志など見えるはずもなく、ただただ心配そうに見送るサンダースであった。

「そう言えば、ブースターの演奏もそろそろだっけ」

思い出したように呟くサンダースだった。やはり従兄のことも気になるらしい。

SIDEチェンジ（走り幅跳び↓コンクール）

「ついたわよ。ここがコンクール会場。中は広いから迷わないように……。ってもう一回来てるのよね」

あれからリーフィアと一緒に来たバイゼルとブースター。今は高級感の漂う玄関ホールにいた。今から裏に回って演奏の準備をするわけだが、本当に広いので迷わないようにとリーフィアが注意していたところだった。

「ねえ、お姉ちゃん。他のみんなはどうしたの？ 来ないけど」

「先行ってるのよ。私が責任を持って、遅れている1年生を連れて来いと言われたの」

もちろん、遅れている1年生とはブースターとブイゼルのことを指す。それに気づいて少し気まずそうな顔をする2人。

それに気づいた否かは分からないが、リーフィアが優しく諭すような口調で話しかける。

「反省したって仕方無いじゃない。今から本番だし、気を引き締めていくわよ」

その言葉で元気になったブイゼル達は、もちろん裏に回るために走り始めるのだった。

「って、ホールで走っちゃダメでしょうがー！」

……先が思いやられる2人である。

「ランクルス先輩、カビゴン先輩。2人とも連れてきました」

「ありがとうリーフィア。ブースター君にブイゼル君もあまり先輩に心配かけないこと。いいわね？」

2人はしっかりと返事をし、既に運び込まれた自分の楽器の音合チューニング

わせをしに行く。

——他の1年生、マイナンとかが運んでくれたんだよね。感謝しなくちゃ——

周りの楽器、自分の楽器を見ながらブイゼルはそう思う。

部屋の中に楽器を運んできた1年生はいないけど、ここにいるポケモン達は演奏を成功させるという覇気でみなぎっている。それは金賞とか、章に拘る成功ではなく、プクリン先生が言っていた意味での成功。

その中に自分があるとブイゼルが考えると、急に緊張感が芽生えてきた。

周りが気になって見まわしてみる。音楽室と同じような防音加工された部屋で、変わったものは見受けられない。是認が緊張しているのか、誰も声を発せずにいた。ただ楽器の音だけが鳴り響く。

ブイゼルは横に何か温かいものを感じ、そちらをしてみる。ブースターがいた。

言葉は何も発さなかったが、言いたいことはブイゼルに伝わったようだ。ブイゼルは力強く頷き、いつも以上にしっかりした顔立ちになる。

「ポケモン第2中学校の皆さま。チューニングが終了しましたら舞台袖に移動してください」

ブイゼルとブースターの、短い間の誓いは誰にも知られることな

く、静かに消えていくのだった。

SIDEチェンジ（コンクール↓走り幅跳び）

何故ジグザグマが走り幅跳びで有利なのか。

それは、ジグザグマという種族上に秘密がある。

ジグザグマという種族は、ジグザグにしか動けない性質を持っている。これが走り幅跳びで活躍するわけだ。

普通のポケモンが直線に走るとはほぼ同スピードで、ジグザグに動けるのだ。単純にジグザグマの方が助走をつけやすいのが分かる。サンダースはまだ知らないが、緊張や恐怖などに襲われると、ジグザグマは更にジグザグに動くのだ。つまり、今日という日は最高のコンディションだったわけで。

「優勝はポケモン第2中学校のジグザグマです」

表彰台に上るときも、もちろんジグザグに動いている。緊張しているみたいに見えるがそこまで緊張しているわけではなさそうだ。

しっかり賞状を受け取り、サンダースがいるポケモン第2中学校の列へ戻ってきた。

「優勝おめでとうな！」

「ありがとう！」

サンダースとジグザグマは、お互いの額をぶつけあう。彼らならではのコミュニケーションの1つだ。

これで、ジグザグマの県大会出場が決定されたのだった。

SIDEチェンジ（走り幅跳び↓ブイゼル一人称）

夕暮れ時、水の流れるストリートは少し涼しかったけど、そこを超えたらかなり暑い。疲れた体と相まって溶けてしまっんじゃないかと思う。

隣には演奏を聞きに来てくれたピカチュウ君がいる。ムウマちゃんも都合が合わなくてこれなかったらしい。

結果は惜しかったけど、1年目だから仕方が無いってプクリン先生も言ってたし、何より目標は達成できたから嬉しかった。

歩道橋に差し掛かる。ここは車——最近値下がりして買うポケモンが増えてきた——の往来が激しいから、歩道橋を渡っていくという事になった。

真ん中あたりを通った所で、ピカチュウ君が話しかけてくる。さっきまでは僕を気遣ってか話してこなかったけど、僕としては話してくれた方が嬉しいかな。だから、止まって話を聞いてみる。

「ブイゼル。部活楽しい？」

「うん、楽しいよ。大変な時もあるけど、それでもやってて良かったと思うことの方が多いかな」

ピカチュウ君の笑顔になんだか影が差したような気がした。何かまずいことを言っちゃったのだろうか。

「ピカチュウ君、何——」

「楽しいならいいや。実は、部活やめたいってガブリアスが言ってるんだよねー。こういうとき、向こうから戻ってくるようにするにはどうすればいいと思う？」

影が差した理由はこれみたい。確か、ピカチュウ君の部活は部員が少なくて、1人でもやめられたら危ない状況だったと思う。まあ、今年度はやめられないけど、出席しないのも困るもんね。

「うーん、やっぱり楽しさを教えることが一番じゃないかな」

「楽しさ、かぁ」

ピカチュウ君が突然走り出す。本当に急だったから気付くのがだいぶ遅れた。そして、ピカチュウ君が急に止まる？

止まるなんて考えもしなかったから、今も結構な早さで走っている。もちろん、このままだとピカチュウ君と激突だ。

って！ ピカチュウ君、何で振り返るの！ このままだとホントにぶつかるって！

「そうだな、って――」

時すでに遅し。僕とピカチュウ君は歩道橋の上で正面激突してしまっただ。その時、僕は妙な感覚に囚われたような気がした。

コンクールと走り幅跳び（後書き）

大事な結果が分からなかった？　ブイゼルの方は示唆してます。

それと、やつとのことピカチュウの伏線回収。気付かなかった方はこの章の2話目のお話をどうぞ。

視点移動の多さは反省してます。やはり二つの大会を同時に書くというのに無理がありましたね。

それでは♪　次回はリクエストされたお話です！　乞うご期待！

とある夏の入れ替わり騒動　〈前編〉（前書き）

あまりにも長くなったので、前中後編という、初の試みをやってみます。

取りあえず、前編からどうぞ！　ピカチュウの語りです！　ピカチュウ初の一人称です。主人公なのに……。

とある夏の入替わり騒動　〈前編〉

勢いよく転がり落ちていく俺。太陽と階段が交互に見えてはめまぐるしく変わっていく。既に夕陽となっていたが、目の回った俺には、それは昼間の灼熱の太陽のように思えていた。

無事、ではないが上手く転げ落ちたようで目立った外傷は……あった。なんと、肌が橙色なのだ。これはものすごい怪我でも負って、血の色が混じったのではないか？

耳も短くなってるし、首の周りになんだか違和感も感じる。それよりも……。さっきまでは丁度いい気温だなーと思っていたのに、今では灼熱地獄だ。俺ってもしかして、瀕死状態？

「なー、ブイゼ……ル？」

ブイゼルが目の前にいると思って話しかけたら、俺と同じ種族のピカチュウが前にいた。しかも、俺そっくりなピカチュウが。

嫌な予感がして、自分の足元を見える。やっぱり茶色だ。しかも、形が微妙に違う。次に手を見てみる。どこかで見覚えがあると思ったらブイゼルの体だった。なんだか理解できる範囲を超越している。多分、隕石が落ちてきて世界が滅亡するって言われても驚かないと思う。

「何？　ピカチュウ君？」

ブイゼルの方はまだ気づいていない様子だ。それにしても、自分の体に自分の名前を君付けで呼ばれるのは違和感ありまくりなんだが。

体を起こそうとして、ブイゼルもようやく体が入れ替わっていることに気づいたらしい。やっぱり、起き上がるときにあの尻尾は邪魔だよなあ。

「何これ？ 何で僕が目の中にいるの？ これが噂の幽体離脱なの？」

ブイゼル、質問は1つずつ頼む。一度にいくつも聞かれると何も答えられない。そして、入れ替わりに気づいたかと思ったら、まだ気づいてないんですね。

「とりあえず落ち着け。まず俺の家に行こう。話はそれからだ」

「僕が勝手に喋ってる！ 何か悪いものにでも取り憑かれちゃったの？」

パニックになるのも仕方が無い。俺もブイゼルが慌ててるから冷静でいられるようなものだし。このままだと埒が明かないので、ブイゼル、もとい俺の手を引いて家を目指す。無論目指すはピカチュウ家だ。

今現在でもブイゼルはものすごく慌ててる。さっきから他のポケモンの目を引いて仕方が無い。元に戻っても、こちら辺を歩くのは無理だろう。ホントに焼け焦げるくらいの視線を俺の体が受けている。

「ブ……。いや、周りの目を引くからピカチュウと呼んどこう。ちよっと静かにしてくれ」

「うーん、僕がそう言うならそうしとこうかな」

「うわぁー……。ここら辺に生徒がいたらどうしよう。明日から確実に変ポケ扱いだぞ。」

俺の姿をしたブイゼル——ややこしいなあ！——も騒がなくなり、周囲から変な目で見られることもなく俺の家に着くことが出来た。

「親は旅行だし問題ないな。入るぞ」

「何やってるの僕？ それって不法侵入だよ」

まあこの体じゃそう言うことになるだろう。そう言う意味で頷く。ブイゼルが驚いたような顔をしたが気にしない。

うちの両親は本当にきまぐれだ。俺がブースター達と旅行に行くからって、2人で出かけるなんて普通考えもしないぞ。

そのおかげで夜に肝試しが出来たりとか、感謝している部分はあるけど。やっぱり食事がキツイ。特に朝食。朝だから何もする気にならない。

「よし。それじゃあ説明するぞ」

ブイゼルは、俺の体でしっかりこっちを見つめてくる。気恥ずかしいというか、なんだかなあ。というか、まだ気付かないというものもある意味凄いなと思う。

「ブイゼル、自分の体見てみる」

「……。わぁ！ え、これってピカチュウ君の体だよね？」

本当に今の今まで気付かなかったのか。もしかして、頭とかはそのままになってるのか？ だとすると、俺ってそこまで自分のことに興味が無いのか……。逆にブイゼルは結構気にするみたいだな。

「そう。階段から転げ落ちた拍子に入れ替わったらしい」

ブイゼルはしばらく考え込んでいたが、なんだか変なことでも思いついたらしく変な感じににやけている。ブイゼルがにやけるなんて初めてだな。俺の顔だからブイゼルがにやけているとは言えないけど。

「じゃあさ、今の僕ってかなり食べられるの？ それならどうか食べに行こうよ！ 食べ放題のお店！」

はしゃいでそのまま外に出ようとするブイゼルの足を『優しく』掴む。――すまん俺の体――もちろん、足が動かなくてその場でブイゼルはこける。あー、顔面強打した。あれは痛いぞ。

「悪いが、食べ放題の店は全部店長と知り合い以上の関係だ。俺と同じ口調じゃないと怪しまれるぞ」

「え……。それじゃあしょうがないか」

ものすごく落ち込んでる。そんなに俺の胃袋が気になってたのか。それと顔面の方は大丈夫か？ 全然痛がってるようには見えない。

ブイゼルの思考回路って、どうなってるんだろう。

その頭を確かめる方法として、宿題の数学のプリントを取り出してやってみる。

「どうしたの？」

「いや、もしかしたらブイゼルの頭で数学の問題が出来るかもって思っただけ。ブイゼルも一枚やるか？」

数学のプリントを一枚渡す。いつものブイゼルなら余裕の問題だ。当然、俺にとっては既にお手上げ状態の問題だけだ。

早速机に向かって問題を読んでみる。ブイゼルも折りたたみ式のテーブルの上で問題に目を通してる。

おお！　なんだか分からないけど解けるぞ！　理論とか全く出てこないけどやり方は凄く分かる。確かにこれだけ分かれば勉強も楽しいだろうな。ちょっと羨ましい。

「あれ？　いつもなら分かるんだけどなあ。全然分からないや」

どうやら俺の勘は的中したっぽい。体が入れ替わってるんだから頭も入れ替わっていると考えて問題なさそうだ。

それから数十分は、何もしないでただボーッとしていた。ブイゼルは問題と格闘しているようだが、俺の学力じゃ多分解けないだろう。

そして、とある問題があることにいまさら気付く。俺の体はブイゼルだ。だから、帰宅するべきなのはブイゼルの家。しかも、両親はいるだろうから成りすましをしなきゃいけないのだ。

「なあブイゼル。戻る方法が分からないんだし、取りあえずばれなようにするしかないんじゃないか？」

「そだねー、ばれたらムウマちゃんになんて言われるか……」

なんだか軽いぞ、ブイゼル。机に突っ伏してるし。問題と格闘しすぎて疲れたか？ 俺の場合は家にいるだけで誰にも会わないし、軽くなるのも仕方が無いと思うが。

「ちよつとやってみるぞ。……。僕は吹奏楽部でクラリネットやっているブイゼル。こんな感じでいいのか……な？」

ブイゼルはこんな喋り方で疲れないのか？ 僕というだけでも意識しなきゃいけないからかなりキツイ。

「じゃあ、僕もやってみるよ。えーっと、俺はピカチュウ。夏休みは暇なポケモンだ。こんな感じかな……。じゃなくてこんな感じでいいのか？」

おい、そんな目で俺を見てたのかー！ 俺だって好きで暇してるわけじゃないんだぞ！

「そんな目で、お……僕を見てたんだね。……ピカチュウ君」

ぎこちなさすぎて笑うしかない。俺も俺の姿をしたブイゼルも一緒に笑い出す。こんな状態では話し合いすらまともにできない。

「取りあえず、練習しようよ。ピカチュウ君」

単語と単語の間に妙なスペースが出来てしまう。結構難しいんだな。

「そうだね、……じゃなかった。そうだね。あれ？」

おいおい……。ブイゼルってこんなに天然だったっけか。言い直しても間違えるってどうということよ。

こんな下らない会話がずっと続いていて、気がついた時には既に月が顔を出していた。おお、ブイゼルってこんな表現できるのか。やっぱり頭が良いっていいな。

「あ、ちょっと電話してくるね」

うん、だいぶ慣れた。まだぎこちない部分はあるけど、何とかなつた。問題はブイゼルの両親と話してはれないで話す自信が無いことだ。

物は試し、というか試さないと話が進まない。本当はこのままうちに泊まろうと思ったけど、話の都合上それはダメだし。あ、ちょっとメタだったか。

「もしもし？ お母さん？」

「コンクール終わったの？ 結構かかるみたいね」

——お、なんかいい感じに勘違いしてる。説明するのも面倒だし、

このまま押し切るか。

「そう。で、ちょっとピカチュウ君の家に呼ばれてたから、よってきたの。今から帰るね」

「そう。じゃあ早く帰ってくるのよ」

俺は軽く返事だけして、電話を切る。良かった。上手くやり過ごせた。上手くやり過ごせたけど……。

本当、どうやって戻ろうか……。

とある夏の入れ替わり騒動　く中編く（前書き）

パロディをいくつか仕込んでます。そして、前回以上にギャグ回になった気がします。

とある夏の入替わり騒動　〈中編〉

俺の姿をしたブイゼルに見送られ、俺はブイゼルの家を目指す。あまりに遅れると怪しまれるから少し急ぎ足だった。

俺の考えでは、とにかく会話する機会を減らせば問題ないと思うんだ。その分ミスする可能性も減るし。

そんなにブイゼルの家と俺の家が離れている訳でもない。俺の投稿距離の半分くらいの距離だ。無論、そこまで時間がかかるわけでもない。

だが、ブイゼルの体になれていない事、コンクールでブイゼルの体がものすごく疲れている事。この二つの理由から結構距離があるように感じられた。そもそも、楽器吹いてるだけなのに何でこんなに疲れんだよ。

そう言えば、ブイゼルが明日は片づけがあると言っていた気がする。予定表があるはずだから帰ったら見ておこう。ほぼ活動していない俺の部活でも、全ての日にバツ印が付いた予定表が配られるんだし、確実に吹奏楽部にもあるだろう。

既にこの通りは夜の雰囲気だ。周りは暗く、細々と置いてある照明が道を照らす程度だ。夏なのにこんなに暗いということは、8時は回っているのだろう。俺の家で少し過ごしすぎたかな。

やっとブイゼルの家が見えてくる。少し洒落た感じのデザインの家で、俺の家より10倍はセンスが良い。しかも、塵一つ落ちていないのだからすごい。

一旦玄関の前で立ち止まり、呼吸を整える。心なしか心拍数が少し上がっている気がする。それを落ち着けるように、深く深く息を吸い、吐き出す。

そこで気付いたのだが、ブイゼルの肺活量って意外に凄い。これも楽器の影響なのだろうか。僅か4ヶ月でここまでになるんだな。

パンと手で頬をたたく。痛い。まあ、意識はしっかりしたし、ミスしないよう頑張っていこう！

「ただいま」

「おかえりなさい。少し遅いんじゃない？ ピカチュウ君に迷惑よ」

本当なら、俺の家だからと言いつ返したい所だが今は無理だ。歯痒はがゆいなあもう！

「ごめんなさい。次からは気をつける、……よ」

早速ミスしかける。何とか踏みとどまったが、ブイゼルのお母さんはどう見ても不審がつている。次からミスしたら問い詰められること間違いなしだな。

「まあいいわ。それより、疲れてるんじゃない？ ご飯は部屋の方に置いてあるから、机の上で食べてあなさい。そして、疲れたなら早く寝る事！」

「はい、ありがとう！」

俺は駆け足でブイゼルの部屋――何度も来ているから覚えてる――に向かう。少し冷や汗をかいていたことは秘密だ。

ブイゼルの部屋、前に来たのは中学校に入学する前だが、大分変わっている。本棚に新しい本が増えてたり、楽器に関する本、教則本が何かだらうか、それも置いてある。それよりも、教科書が何も置いてないことが一番気になるのだが。青色のレイアウトの部屋なのは変わってない。

次に目についたのが机に置いてあるご飯だ。食べやすいようにサンドウィッチになっている。お腹は満たされないかもしれないが、確かにいくら疲れていても食べれるな。こういう所でブイゼルのお母さんの優しさが分かる。

ベットに横になろうと思った時、教科書の行方が分かった。ベットに全部転がしてある。よくあれで失くさないな。学校の生活とは大違いだ。

お腹もすいていたし、ありがたくサンドウィッチを頂戴した。……うん、おいしい。疲れ回復の為にモモンの実が入ってるのは甘いもの好きにとって嬉しいな。

それにしても、ブイゼルの部屋は冷房が付いてるのか。入った時から冷気が充満してたのを考えると、ブイゼルのお母さんがつけておいてくれたのだろう。俺の両親とは大違いだ。

「お風呂入っちゃいなさいよー!」

階下から響くブイゼルのお母さんの声。でも、風呂ってどこだろうか。うろちよろしてると怪しまれるからな。動くに動けない。く

そっ、ブイゼルに聞いておけばよかったな。

という訳で、ブイゼルへ電話をかける。電話電話……。

ブイゼルって携帯持っていないじゃん！ どーすんだよ。ブイゼルのお母さんがいる所で、「お風呂つてどこにある？」なんて聞けないし、探すのもダメだし……。四方八方塞がれたんじゃないの？

あ、床に置いてあった教科書を蹴っちゃった。意外と整理しないんだよねー。こういう所で性格が分かるよ。

冷や汗と暑さで書いた汗まみれのこの体、お風呂に入らないなんて断固ダメだ。気持ち悪いし、臭い。

結局、階段を下りてお風呂を探すことにした。疲れている風を装いながら、なるべく音を立てずに気づかれないよう……。

「ブイゼル？ 明日は片づけで9時集合だけど、疲れは取れそう？」

「っ！ ……うん、大丈夫！」

いきなり後ろから話しかけられるもんだから驚いて飛び退いちゃったじゃん。大分ブイゼルの話し言葉に慣れたからいいけど、そうじゃなかったら危なかったぞ。

「そう。それと、ブースター君から電話があつたから後で電話してあげなさい」

「分かったよ。ブースターに電話ね」

ブースターと話すのか……。あいつはブイゼルとよく話してるかな。上手く話さないとばれそうだ。

「それで、ブイゼル」

まだあるのか……。早く風呂の搜索を続けたいんだが。

「そっちは裏口しかないけど、どこに行くつもり？」

「……ごめんなさい！ 悪気はなかったんです！」

あ、ミスした。訂正する勇氣はないからそのままでもいいか。それより、ブイゼルのお母さんつてもっと温厚なイメージがあったんだけどなあ。イメージが音を立てて崩れてくぞ……。

「銭湯でも行きたいの？ 疲れてるんだからそう言う所にはいいかなの方が良いとお母さんは思うけど」

お！ これは上手くいけば外に出られるんじゃないか？

「えっと、ピカチュウ君に誘われててさ」

やっぱり自分の名前を使って会話するのはいい気がしない。違和感を感じてしまうな。

「そうなの？ まあ、明日大丈夫ならいつてらっしゃい。くれぐれも周りのポケモンに迷惑をかけないようにね」

よっしゃ！ 抜け出せた！ これでブイゼルに電話できる。

「はい、それじゃあ行つて来るよ!」

「早く帰ってくるのよー! ……そう言えば、何で裏口から出ていこうとしたのかしら」

何故だ……。何故繋がらない……。

「どうしてなんだよー!」

電話ボックス外で叫んでたら、確実に変なポケモン扱いだっただろう。俺じゃなくてブイゼルが。

それより、何でブイゼルは出ないんだよ! まだ9時だろ! 普通通起きてるでしょ。そういうえば、この時間でもブイゼルのお母さんって外出許可出してくれるんだな。

イライラして既に絶滅危惧種に認定されそうな電話ボックスを蹴る。足が痛い。

更にイライラして頭突きしてみる。頭がくらくらしてきた。

水鉄砲を発射してみる。回線がショートして壊れたっぽい。修理費どうしよう……。

「……! おー……」

電話ボックスの外から、誰かが呼びかける声が聞こえる。見渡してみると、ブースターが呼びかけていたようだ。……嘘だろ? 何

でリーフィア先輩までいるんだよ！

そんな俺の気も知らないのだろう。ブースターが扉を勝手に開ける。取りあえず挨拶だな、基本中の基本だ。うん。

「えっと、こんにちはリーフィア先輩」

「あー。入れ替わってるのは知ってるから無理に挨拶しなくても大丈夫よ。それと、こんにちはじゃなくてこんばんはでしょ？ もう日はとくに沈んでるわ」

リーフィア先輩が入れ替わっているのを知っているのは何故なんだ？ それより、その悪魔的な笑みはなんなんだよ2人とも！

「えっとね。たまにはお姉ちゃんのメタも役に立つんだよ？」

……なるほど。メタ世界に行ってきたのか。目の前のキャベツ似の先輩は。前回の話でも見てきたな。

「ピカチュウ。私、心の中読めるんだけど」

ごめんなさい。もうキャベツって形容しません。

「分かればいいわ」

「あはは……。それでね、僕達がここに来たのは、2人を元に戻そうと思っただけなんだ！」

元に戻すだと！ そんなことが出来るのか！ こいつら、どんなオーバーテクノロジーを持ってるんだ？

「こいつって表現もやめなさい。それに、元に戻るには私と契約して……」

「お姉ちゃん……。そのパロディはもう皆さん飽和気味じゃないかな？」

俺を弄んでいるのだろうか……。でも、この2人について行けば元に戻れそうだ。

「それもそうね。もう使わないでおくわ。じゃあ、元に戻る方法だけど……」

固唾を飲み込む。緊張の一瞬だ。一筋の汗が額から流れ落ちる。

「3日間、私達以外の誰にも入れ替わっていることに気付かなくてはいいのよ！」

なんだ。簡単な条件じゃないか。家に引きこもってるだけでいいんだろ？ そうだよな？

「制約はあるわ、1つだけだけど。それは、いつもと同じ生活をすることよ！」

これって、いわゆるご都合主義だよな？ って、今はメタ発言だな。気をつけないと……。

「えっとね、これを見ている人を楽しませるためにも、引きこもられるのは困るんだって」

「つまり、俺がブイゼルになりきらなければ、元には戻れないということがあるか？」

目の前で「そういうこと！」というハモリが聞こえる。うん、吹奏楽部なだけあって音程がしっかりしてる。

やっぱり、ブイゼルって耳が良くなってるんだな。俺だったら絶対気付かないもん。

「……」

分かった。2人の言いたいことは分かった。

だけど、今はそれより銭湯へ急ごうではないか。汗がさつきから止まらない。

この後も2人に絡まれ、帰宅したのは11時を回るころだった。もちろん説教されたさ。ブイゼルにもお母さんの信用が落ちたと報告しなければ……。はあ、入れ替わるって嫌だなあ。

とある夏の入れ替わり騒動　く中編く（後書き）

TIPSで、このお話の裏、ブイゼルが何をしていたかも書こうと思います。

10は諸事情で欠番なので、やるとしたらTIPS11ですね。

次回、後編！　ついでにこの章の最後のお話でもあります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4737s/>

ピカチュウの学園生活

2011年11月10日00時16分発行